
英子とびーこのあいどんの一!?

青楓ユーカリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英子とびーこのあいどんのーーー？

【Zコード】

Z8403T

【作者名】

青楓ユーカリ

【あらすじ】

超がさつ女の英子と超超超靈媒体質少女のびーー。そんな二人のちょっと非日常的な日常生活を、ゆるーく見守る日常系ホラーファンタジー。

基本的に一話完結の短編連作となつております。

第一話 「夜の戸締りはしつかりと」

第一話 「夜の戸締りはしつかりと」

ぴちゅつ。

あたしは、そんな類に当たる冷たい感触で目を覚ました。

「英子ちゃん、うえええん、英子ちゃん起きてよーう」

眼の前には見慣れた顔、もとより見慣れた泣き顔。

じゅわ、久しぶりの 「アレ」 じこ。

「ちっ。あーあー、起きたよ。もう起きたつーの
あたしは投げやりにそんな言葉を放ちながら、その場でもくつと
起き上がった。

「英子ちゃん! 『えーーん。怖かったよー。寂しかったよー』
そう言つて涙と鼻水まじりのぐけやぐけやの顔をあたしにじゅり
つけてくる眼の前の少女。

「くうおら、びーー! んな顔をあたしの服にこすりつけるな!
鼻水がつこちまうじやねーか、きたねーなーもつ」

「だ、だつてえええ

「だつてじゃねーよ。つたぐ。…… で? 今夜は一体何匹だ?」

「たぶん、一人です。英子ちゃん」

一人。

どーやら、不幸中の幸いってやつらじこ。それならまだ時間は
掛からねーだろ?つ

が、あたしが気になつたのはそんな事ではなかつた。
やれやれ。こいつはまだ、そんな言い方をしやがる。…… 一人だ
と? このアマちゃんは何にも分かつちゃいないらしー。

「びーー」。お前も意外とガンコな奴だな。一人じゃねーだろ? —
匹、だ」

あたしはいつものよつこ、びーーにて説教を食らわす。
こんな状況にも拘ららず、だ。

あたしに言わせれば、こんな状況よりも、眼の前のアマちゃんに
説教を与える事が遙かに重要な仕事なのだ。

あくまで優先順位の問題なのさ。まあ、あたしのポリシーの問題
とも言えるが。

「だつて、だつてー」

「まだつてかよ。もうちつと書いて訳のバリエーションってのはね

えのか?」

「い、今は売り切れ中なのです! そーるどあります」

「ああ、そうかよ」

いつちょ前に横文字なんて使いやがつて。

そんなにあたしの感情を煽りてーのか? こいつは。

…いや、コイツの場合間違いなく天然だろつ。

あたしは、小さく溜息をついたのち、部屋を見回した。が、その
時、あたしの眼にとんでもねー光景が飛び込んできた。

!!!

……説教も確かに大切だし、あたしの優先順位としちゃーこの
状況は下の下に位置してはいるが、だからとこつてコレを放置する
わけにもいかない。

まあ、何事も柔軟性つてやつが大切なのさ。時と場合によつて優
先順位やポリシーを変えるくらいには。

「英子ちゃん、お説教は後にしてくださいよー。私たちのお部屋
がぐちやぐちやになつちやうよー」

びーこの言葉通り、あたし達の部屋は「アレ」によつて見る
も無残に変えられていた。

何を隠そう、あたしはこう見えて綺麗好きなのだ。

よつて、部屋に土足で入られるのも、部屋のものを勝手に弄られるのも嫌いだ。

だが、あたしの優先順位を変動させるくらいに、嫌いなのが…。

「安心しな、びーー。あいつはあんたにお願いされるまでも無く、無間逝きだ！」

あたしとびーーの部屋をまるで我が物顔で飛び回る、糞四々しき一匹の浮遊体。いや、「コミムシ。もとい、悪霊。

「おい、びーー。あたし愛用のこつものやつ、とつとめてくれねーか？ 部屋の隅に置いてあつたろ？」

眼を真っ赤に腫らしたびーーは、一度だけコクンと頷くと、あたしの指示に従い、あたしの言つこつものやつをとつと駆けて行つた。あたしは、そんな後姿を見送りつつ、ぽつりと呟く。

「… つたぐ。今更こんな事言つたつて仕方ねーけど、やつぱ引き受けるんじやなかつたかもしねーな」

まあ、何を言つたところで後の祭りつてやつなんだが。

それに、一度引き受けちまつた以上は途中で投げ出すのはあたしの流儀に反する。それだけはあつてはならない。

そんな事を考えているうち、びーーが例のブツをもつて戻つてきた。

「英子ちゃん。持つてきましたよー、でも重いー、これ超重ーい」「どんだけもやしなんだよー！ はん、流石はお嬢様だぜ。あたし何かとは育つた世界が違うつてか？ まあいや、ほら、とつとと貸しな」

あたしはびーーから受け取つたブツを構え、精神を集中した。

「きやーきやー。やっぱ英子ちゃんに似合いますねー、その金属バット」

「うつせーわ。それにちつた一口を閉じてる。集中できねーじゃねーか… つーか、それは褒めてんのか？ けなしてんのか？」

やつぱりこいつ、天然だ。ド天然だ。それも治療不可能レベルの。あたしは気を取り直し、改めて精神を集中する。

相変わらず、部屋は一匹の悪靈により、いじょうに荒らがれている。だが、今はそれも無視し集中。

「… 月は村雲花に風、月夜に提灯夏火鉢… 今宵の我が月は、満月…！」

直後、あたしの手にした金属バットが青白い光に包まれる。やれやれ、これで下準備は完了。後は、ヤツを完膚なきまでにぶちのめすのみ。

「さてと、悪靈。念仏は唱えたか？ 神への祈りは済ませたか？ 心残りはあるか？」

そう言いつつ、件の浮遊物体に一歩ずつ近づくあたし。ほら、死神の足音が聞こえるだろ？ 少なくとも、あたしには聞こえる。

そして、あたしは、悪靈の眼の前に辿りつく。

「まあ、あつたところで、あたしにや関係ねーけどな。… んじゃーな。あ、ば、よー…！」

あたしは、件の浮遊物体に向けて、蒼く煌くバットを全力でフルスイング。

「はん。成仏なんて出来ると思うなよ？ あたしはそんなに優しかねーんだ。てめーにや、地獄すら生ぬるい。あんたに残されたたつた一つの選択肢は、無、のみさ」

悪靈の消滅を見届けると同時に、バットを放り投げ、部屋のとある一角に駆け寄るあたし。

「ちっくしょーー。あー、糞が！ あたしの命の酒瓶をこんなにしちまいやがつて…」

眼の前には、もはや見るも無残なガラス片と、ただの水溜りと化したあたしのお宝達。

ついてない。実についてない。

糞悪靈のくせに、あたしの命をこんなにしゃがつて。こんなのが見せられれば、そりや優先順位だつて繰り上がるつてもんだ。

「ふふふふ。そこだけは悪靈さんに感謝しないといけませんねー。英子ちゃん、知つてますか？ お酒は二十歳になつてからなんですよ？」

ドヤ顔でそんなセリフを吐くびーー。

「こいつ。

そもそも誰のせいで、こんな事態になつたと思つてんだよ。

「いーだろ、別に。1、2歳くらい負けるよ。減るもんじやなし」

「そういう問題では無いのです。いいですかー、英子ちゃん。そもそも英子ちゃんは普段からもつと女の子らしく

説教するはずが、逆にあたしが説教されちまつとは。

成る程。相変わらず、なかなかのいい度胸というか、据わつた根性というか。

「あー、五月蠅せーな。少なくとも12・3のガキに、酒について説教されたくねー。つーか、どの面さげてあたしに説教しようつてんだよ。そもそも誰のせいでこんなことになつたと思つてんだ？ びーーの超超靈媒体質のせいだるーがよ。いや、一万歩譲つてそれはまあ、仕方が無いとしよう。だがな、おめーは未だに、一人で、あんなんちんけな悪靈1匹対処できねーときてる。それについて何か反論はあるか？ あ？」

あたしのそんな疾風怒濤の言葉責めに対し、みるみるうつむきに顔を赤くし、眼に涙を浮かべ、頬を膨らませてしまつびーー。

「だ、だつて、だつて、まだ学園ではそこまで語つてないんですけどん

おいおい、今日何回田のだつて、だ？

あたしは、今日一度田の小さな溜息をつきつつ、びーーの頭をぽんぽんと一度撫でた。

「分かつてゐよ。びーーは頑張つてゐ。それはあたしも良く分かつてゐ。……今はあたしもちつと大人氣なかつたな。『めん、言ひ過ぎた』

素直に頭を下げる大人なあたし。

こいつはその人形ののような白い顔に似合はず、かなりガンコなところがある。こうでもしないと納得しないだろ？

まあ、あたしも大人氣なかつたのは事実だし。

「それはそーと、びーー。怪我は無かつたか？ つたく、暴れまわつてくれたよなあの糞悪靈。やれやれだぜ」

「はい、それは大丈夫です。でも、1日でも早く、この体質をコントロール出来るよつになりたいです。英子ちゃんみたいに強くなりたい！」

真顔でそんな事を言われると、まあ、流石のあたしもひょっとは照れる。

そんな心境を悟られまいと、ぶつきゅうひにびーーに言ひ返す。

「仕事とは言え、巻き込まれる側としちゃ一洒落にならねーからな。頼むぜ？ 修道女様？」

「はい！ でも、その、今は見習い中といいますか、ただの学生といいますか」

「わーつてるよ。びーーが一人前になるまでは、あたしが責任持つて守つてやる。あたしはツマラン嘘はつかねーことにしてるんだ」

「正直の頭に神宿る、ですね？」

「あん？ なんだそりや？ 相変わらず、意味無く難しー日本語知つてんじやねーか。ギャップ萌えでも狙つてんのか？ キララじやねーぞ」

「それは言わない約束でしょ。もうつ。見た目は関係ありません。

それに、私はこう見えて日本語しか喋れませんからー。」

「はいはい。んで、いつになつたらその一人前になれるんだ？ 実際のところどうなんだよ？」

「… あ、あいどんのー」

あたしは、苦笑いを浮かべながら、眼の前の銀髪異国少女の頭を再び撫でるのだった。

END

第一話 「クイズ番組ではしゃぐ大人になりたくない」

第二話 「クイズ番組ではしゃぐ大人になりたくない」

「なあ、びーーー」

「何ですか？ 英子ちゃん」

「こいつてあたしらの部屋だよな？ あたしらのマンションだよな？」

「間違いないですよ、英子ちゃん。学園からの帰り道も、いつも通りでしたし。この階には私達の部屋しかありませんから」

「だよなあ……いつもと同じ道だつたし、何度も通ってるんだ。今更、道を間違えるわけねーもんな」

「そうです。いくら方向音痴の英子ちゃんでも、流石に学習しますもん」

「ああ？ いちいち一言多いんだよなあ。……んで、びーーにはアレ、何に見える？」

「はい、十中八九、スフィンクスです」

「だよなあ……どう見たってそうだよなあ。死ねばいいのになあ」

大きな溜息をつきながら、あたしはそう呟いた。

帰宅した部屋の中に、突然見ず知らずのスフィンクスが我が物顔で鎮座していよいよもんなら、誰だつて愚痴りたくなる。当然、あたしだつて愚痴りたくなる。

強面おつさんの顔に、ライオンの体、鷲の翼を生やした巨大な黄色い物体。

この物体が何かと問われれば、確かにスフィンクスだ。紛れも無

くスフィンクスだ。完璧なるスフィンクスだ。

「英子ちゃん、英子ちゃん。私、スフィンクスってはじめて見ました！ やっぱりおっきいんですねー」

「ああ、そうだな………… つてふつぜけんなんああああああ。はあ？ スフィンクス？ はあ？ こりはエジプトですか？ ギザですか？ 観光名所ですか？ なんなんだこの状況はーー！」

「まあ、まあ、落ち着いてください英子ちゃん」

「いやいやいや、あんたが落ち着きすぎなんだよ！ たかが悪霊一匹でびーひー泣き喫いてたくせに、何でそんなに落ち着いてんだよ！」

そんなあたしのツツコミに対し、陶器のように真つ白なその頬を膨らませるびーー。

「ふう。私、ビービーなんて泣いてません！ メソメソ泣いてたんですね！」

「知らねーよ！ どつちだつて関係ねーよ！ …… ああ、もういい。何か疲れたわ。理不尽マックスな状況のおかげで、思わずテンション上がつちまつたぜ。あたしらしくもない」

あたしは改めて、部屋の真ん中に鎮座しているスフィンクスを見上げた。

この部屋は、ぶつちやけ広い。女二人が住むには広すぎるといつても過言じやねー程広いし、やたらと高価な調度品が揃っている。勿論、あたしの趣味つてわけじゃねーし、そもそもあたしの部屋つて訳でもない。

全では、馬鹿親、もとい親馬鹿なびーこの両親によるものだ。まあ、今は関係ねーから割愛するが、あたしが何を言いたいのかといえば、そんな龜広い部屋の大部分を占めちまうほどビ、龜^ガテカイスフインクスがあたしの眼の前にいるつてこと。

こんなのぜつてー可笑しいし、最も恐ろしいものの片鱗を味わった気分だし、断じて認めたくない現実ではある。

……ではあるんだが、あたしがこのびーこと一緒に生活している以上、何が起こっても可笑しくは無いのだ。

どんな奇想天外な出来事が起きようと、現実と認定せざるを得ないのだ。

なぜならそれが、あたしどびーこの日常生活だから。

「この子、生きてるんですかねー？ 動くのでしょうか？ 私、幽霊の類は苦手なのですが、それ以外の超常現象でしたら大好物です」

そう言つて部屋の片隅にあつたマジックハンドを使い、件の生物をツンツンし始めるびー。

「つーかやめる！ アラレちゃんか、お前は…」

が、時既に遅し。

スフィンクスは、その両目をぱちりと開眼させた。

「あー、糞。だから言わんこつちやねー」

やがて、その大きな眼があたしどびーこの姿を捉えると同時に、今度はその大きな口を開き始めた。

大きく鋭い牙を携えたその口元は、御丁寧にも明らかに人のものであろう鮮血に染まつていた。

つまり、こいつは 人を 食つたのだ。

「では、第一問」

「はあ？ 何だよ第一問つて。クイズか？ 糞つ、教科書どおりのスフィンクスつてわけかよ」

スフィンクス。

この手の類に疎いあたしでも、流石に知つてるくらいには有名な話。

旅人にいきなりクイズを吹つかけて、間違えたやつを食つちまつたつて御伽噺。

糞真面目にも、あたしらの眼の前のこのスフィンクス殿は、それを再現してくれるらしい。

有りがた迷惑この上ねー話だ。

だがまあ、有名な話つてことは、そのクイズの答えも有名なわけ
で。

「朝は4本足、昼は2本あ……」

「人間、人間、人間、人間、に・ん・げ・ん！」

あたしは、スフィンクスの言葉を遮る様に力の限り叫んだ。

「あー、ズルイです英子ちゃん。私が答えたかつたのにー！」

「知るか！ んなことより、正解したんだ。満足しただろ？ とつ
と消えな」

あたしのそんなセリフに対し、明らかに顔をムスッとしたせるスフ
インクス。

「あ？ 何だよ、文句でもあんのか？」

「では、第一問」

「うおい！ まだ続くのかよ！ てめー、言いたい事があるならハ
ツキリ言いやがれ！」

そんなあたしの言葉を無視し、スフィンクスは問題を続ける。

「上は洪水、下は……」

「風呂、風呂風呂風呂風呂風呂風呂風呂……」

あたしは、怒涛の勢いでそう叫んだ。あらゆる怒りを込めてそう
叫んだ。

「それも私知つてたのにーー！」

糞クイズ王殿はまだ満足出来ないらしく、明らかに怒りの感情の
籠つたそのおっさん顔を歪めながら尚も続ける。

「では、第三問」

「いい加減にしやがれ！ 何なんだよ、目的は何だー！」

「パンはパンでも

あたしの人生において、これほどまでに全力でこの言葉を叫ぶことになるとは思っても見なかつた。

たぶん、一生分のフライパンを使つちまつたと思う。
いや、まあ、自分で言つておいて意味分からんけど。

あたしの回答を受け、スフィンクスの目が血走り、その額に血管が浮き出たのが見えた。

つーかあたしが悪いのか？ こんな今時、幼稚園児だつて鼻で笑

「それでも、女こ問う。最終問題二

「英子ちゃん英子ちゃん、最終問題ですって。今度こそ私が答えま

相變わらず、び=」がちやいちやいと能天氣に騒ぐ。

びーこ、わかんねーのか?

を。

禍々しいくらいのオーラを発してるのがわからぬのか？悔しいが、こいつは、あたしの力でどうこう出来るレベルのバケモンじゃない。

あたしは、眼の前の半人半獣の化け物を睨みつけながら、その言葉の続きを待つた。

「我を、納得させよ」

「えーっ、そんなー。英子ちゃん、私分かりません。英子ちゃんに回答権を譲ります。ズバズバッと答えちゃってください！」

[...]

「え、英子ちゃん？ ま、まさか、英子ちゃんも分からないんですね
か？ … うええええん、どうしよう。私たち、食べられちゃうよ

—

またもびーべー泣き出すびーー。

突如、あたし達に見せ付けるように赤く染まつた大きな口を開き、
その凶悪な牙を露にするスフィンクス。

やれやれだ。

あたしは、これまでびーこに見せた中で最も冷たい顔で、彼女を睨んだ。

「おい… ちょっと黙ってくれねーか?」

びーこは、顔を真っ青にし、小刻みに震えながらじへじへと何度も黙つて頷いた。

先程までの喧騒が嘘のようになしんと静まり返るマンショノ内。部屋には、カチコチという大きな古時計の音だけが響き渡る。そんな時間が、どれだけ続いたらどうつか。1時間にも永遠にも思えたそんな時間。

だが、実際は10分も経過していないであろうそんな時間。その沈黙を最初に破つたのは、件のスフィンクスだった。

「合格。 我は満足した」

その言葉と同時に、音もなく消えてゆく巨体。

…… つたぐ、やれやれだぜ。

「一時はどうなるかと思つたが、まあ、何とかなつたな」

安堵の表情を浮かべ、びーこ的样子を伺う。

が、ようやく開放されたつてのに、様子の可笑しいびーー。あたしの言葉にもこくこくとただ頷くのみ。

「あ? もう喋つて良いぜびーー」。つーか何で泣きそつなの?」

そんなあたしのセリフを契機に、まるで緊張の糸が解けたよつこ、一気に涙を流しビーべーと泣き出すびーー。

「ちょ、何だよ。何泣いてんだよ」

「だ、だつてえ、ううう、英子ちゃんが、英子ちゃんが怖い顔で怒るから」

「え？ ああ、確かに黙れとは言った。怖いかどうかは別として、睨んだのも事実だ。だがまあ、勿論それには理由がある。

何といつか、説明するのが既にメンドクセー。

このまま放置じや黙日？ 黙日？ … ちつ。

「聞け、びーー」。あいつの最後の問題があつただろ？ 我を納得させろつて

「どーせ、私にはさっぱりでしたもん」

そう言つて赤い目を腫らしながらツンと拗ねるびーー。

「よく思い出せ、あいつはどんな状態だつた？」

「どんな状態？ うーんそうですねえ、出す問題全部、英子ちゃんに簡単に答えられてちょっと怒つてたかも」

「それだ。あいつは怒つてたのさ。つまり、あいつが尋ねていたのは怒りに対する最上の答え。何だか分かるか？」

まあ、こいつはクイズつて言つより心理分析みてーなもんだが。怒りに対する対処法つてやつだ。

自分で言うのも何だか、あたしもこんな性格だからな、この手の対処方法つてのは嫌でも身についちゃったりする。

「… 沈黙、ですか？」

「正解。何だ、やれば出来るじゃねーか。怒りに対する最上の答えは、沈黙だ。言い訳したつて怒りはおさまらねえ。逆にさらに怒りを買つちまう事もある。そんなときは、沈黙。沈黙は金つてやつだな」

あたしのそんな解説を聞き、最初はぽかんとしていたびーーだが、やがて、再びその両目に大粒の涙を溜め、声を上げ泣きだした。

「うええええん。よかつたー。私、英子ちゃんに嫌われちゃったのかと思って、それで、それで」

「はあ？ あのなあ。確かにあたしは仕事としてあなたの守役をやつちやいるが、あたしだって人間だ。嫌いな人間と一緒に生活なんてするわけねーだろ？」

そう言つてあたしは、田の前で泣きじやぐる一人の少女を、ぎゅっと抱きしめるのだった。

まあ、たまにはこいつの悪くない。たまには、な。

END

第三話 「鏡の前では苦笑い」

第三話 「鏡の前では苦笑い」

「つまーい、びーー？ いねーのかー？」

あたしの仕事はびーーの子守役。
学園への送り迎えに加えてボディーガード、時には保護者的な役
割さえ担うこともある。

びーーの場合、どこにしようが、例えマンションの部屋の中に居
ようが、安全だとは言い難い。

それこそがあいつの持つ才能であり、呪いでもある。

尚もマンション内を探し回る私。

いひいう時、あたしは無駄に広いこのマンションに怒りを覚える。
どう考えたって、あいつの子守をするのには広さは不向きだ。
部屋なんて、住めりや何でもいいんだよ。4畳半もあれば十分な
んだ。

無駄に広ければ広いほど、あたしは部屋中を探し回りなきゃなら
なくなる。つたぐ、メンドクセー。
ぶつぶつと愚痴をこぼしながら徘徊していく。

と、一枚の大きな鏡の前で、あたしはその歩みを止めた。
何故ならあたしは、半べそをかきながら何かを必死に訴えるびー
ーの姿を見つけたからだ。

…… そう、その鏡の中で。

ちなみにびーーの声は聞こえていない。きっと、鏡の中だからだ
る。

よりにもよって、何故鏡の中なんかにいやがるのか？ そりゃ探したつて見つからねー筈だ。

だが、愚痴を言つても仕方が無い。

何と言つても、びーこは超超靈媒体質。厄介事に巻き込まれるのに、それ以上の理由はいらない。

あたしは、溜息を一つつきながら、その大きく古い鏡に近づいた。

「よお、びーこ。随分とおもしれー所にいるじゃねーか」

向こうの声も聞こえてこないし、こちらの声も聞こえてはいないらしい。

鏡の中のびーこは、あたしに何かを必死に訴えかけているものの、当然何を言つてるわからない。

やれやれ、びーすりやいいんだ？ この状況。

とりあえず件の鏡をぺたぺたと触つて調べてみる。が、無駄にデカくて古臭いってところ以外、特に変わったところは見当たらない。

勿論、一番の異質は中にびーこがいるってことだが。後ろに回りこんでみると、やはり入り口の類や靈的な気配すら感じ取れない。……。

ちなみに、この部屋はびーこの衣裳部屋である。

糞高そうなドレスから、てめーいつそんの着るんだよ！ つてレベルのコスプレちっくなふざけた衣装まで、ありとあらゆる何百着の服がところせましと並んでいる。

流石はお嬢様。あたしらとは住む世界が違う。

まあ、住む世界が違うつーか、今は文字通り鏡の世界にいつちまつたわけだが。

： まったくもつて笑えねー。

念のため、衣裳部屋をぐるりと見回る。

当たり前だが、眼に入つてくるのは右も衣装、左も衣装。あたしには一生、縁もゆかりもねー代物ばかり。

なんつーか、頭が痛くなつてくる。

まあ、あいつの場合、お世辞じやなく人形みてーななりしてやがるからな。それに、あれくらいの年齢の外人つてやつは何を着たつて似合つちまうものなのさ。びーこも然り。残念ながら、誰も得しねーが。

びーこの話はどうでもいい。今は鏡の話だ。

手つ取り早いのは、この鏡を完膚なきまでに粉々にぶつ壊しちまう手だらけ。

この古臭い鏡が何らかの力でびーこを取り込んだのだとすれば、それさえぶち壊しちまえば、何らかのリアクションが期待出来る。が、反面、鏡を破壊したからといって、びーこが無事に鏡の世界から脱出出来るという保証は何処にも無い。

むしろ、出入り口たるこの鏡を壊しちまつたら、普通に帰つてこれなくなつてしまつ可能性すらある。

さて、どうする？ あたし。

こずれにしても、一つだけ確かなのは、このまま何もせずにいたところで何ら解決には繋がらねーつてこと。
うだうだ言つても何も始らねーつてこと。
つまり、行動あるのみだ。

そうと決まれば話は早い。

あたしは、ジーンズのポケットをじんじんと探り、得物を探した。

出でたのは一本のナイフ。護身用に常に持ち歩いているあたしのコレクションの一つだ。

眼の前の馬鹿デカイ鏡を粉々にするにはむと心もとねーが、この

際贅沢は言つていられない。

あたしは、眼の前の状況を一瞬か彼方へ忘却し、意識をナイフへと集中させた。

「月は村雲花に風、月夜に提灯夏火鉢… 今宵の我が月は… 無月！」

直後、あたしの手にしたナイフが青白い光に包まれる。さて、準備は完了。

「悪く思わねーでくれよ？ 恨むんならびーこに魅入られちまつた己を恨むんだな。それじゃ… あばよ…」

あたしは、全身全霊を込めて、ナイフを振り上げ、件の鏡に突き刺した。

これで全てが解決するはずだった。これでこの糞メンンドクサイ事態からおさらばのはずだった。

が、そんなあたしの考えはまだ甘だったらしい。

やれやれ、あたしは甘いもの苦手だってのによ。まったくついてない。

あたしの全力を込めたナイフによる一撃は、青白い閃光と共にいつもあつさりと弾き返されていた。

「ちつ、あたしの読みは大外れだつたらしい。… 振り出しに戻る、だ。さて、どーしたもんかね」

全力が効かなかつたのだ。これ以上切りつけたところで、傷一つけるどころか、恐らく、体力の無駄使いに終わつちまうだろう。

あたしは、一旦頭を冷やすため鏡の前で腰を下ろしあぐらをかいだ。

鏡の中では、相変わらずびーこが大粒の涙を流しながら、口をぱくぱくさせている。まあ、概ねいつものことだが。

つたく、鏡の世界でも何も変わらぬーな、あいつは。

……は？

変わらない、だと？

あたしは、改めてびーーのその姿を確認する。

びーーは普段、学園の制服でいることが多いものの、部屋では珍妙なTシャツを着ている事が多々あった。

ちなみに、今日のTシャツはと、彼女の好きな言葉の一つ、「天網恢々疎にして洩らさず」という諺がでかでかとプリントされた、センスゼロのTシャツ。

確かに色々と言いたい事や突つ込みたいところはあるものの、この際、重要なのはびーーのセンスなんかじゃない。注目すべきは、その文字列だ。

あたしは、今、Tシャツに書かれたその言葉を、極普通に読みとる事が出来た。

当然だ、普通に書かれた文字を普通に読んだだけだからな。

あたしだって馬鹿じやない、それくらいの漢字は読める。つまり、あたしが何が言いたいかといえば、文字が、左右逆になつてねーということだ。

その事実が指示示す意味はたつた一つ。

「糞つ。あたしとした事が、とんでもねー勘違いをしていたらしい。その上、びーーのTシャツでその事に気づかされると、情けねーことこの上なしだな。格好悪つ」

あたしは、今日一番大きな溜息を一つついた後、未だ青白く煌き続けるナイフを再び構え、立ち上がった。

「今度こそ、完全におさらばだ。あいつのいねーこんな世界は、一度と「ermenだぜ。んじゃ、あばよー！」

そう言つてあたしは、自分自身にナイフを突き立てた。

瞬間、あたり一面に鏡の割れる不気味な破壊音が響き渡ると共に、あたしは、光を失った。

「…ちゃん。英子ちゃん！ しつかりしてください。眼を覚ましてください」

「あ？ 何だ、びーこか」

どうやらあたしは、びーこに膝枕されているらしい。

何がどうしてこんな状況に陥っているのか？ 数秒だけそんな事を逡巡した後、すぐに先程の記憶が鮮明に蘇ってきた。

「つてことは、どーやら脱出成功したらしいな」

「うええええーん。良かつたよー。英子ちゃんつたら私の目の前で急に鏡に吸い込まれてしまふんですもの、私、私、どうしてらしいかわからなくて、凄く不安で」

そう言つてビービー泣くびー。

あーもー、相変わらず五月蠅せーなー。

： まあ、元の世界に戻つてきただつて確然たる証拠でもあるんだが。

今回の話、鏡の世界へ誘われたのはびーこではなく、あたしだつたつてオチ。

びーこと生活している以上、超常現象のターゲットがあたしに向く事もざらにある。

そのことを失念していなければ、もつと早く解決できただらう。認めたくねーが、完全にあたしのミスだ。

まつたく、やれやれだぜ。

それにしても、嬉しくても泣く、悲しくても泣く、安心しても泣く。こんなんで本当に、立派なシスターつてやつになれるのかね？

だがまあ、今回ばかりはあめに見てやるぜ。

あたしは、眼の前で泣きじゃくる少女に言ひつ。

「おい、びーー」。： それ、いいTシャツじゃねーか

「でしょでしょ？ 英子ちゃんの分もありますから、今度一人で一緒に着ましちゃうね？」

そんな満面の笑顔に対し、あたしは、苦笑いを浮かべながら頷く
しかないのだつた。

END

第四話 「金曜日は眠らない」

第四話 「金曜日は眠らない」

その日、あたしは疲れていた。疲れ果てていた。

「なあ、おい、びーー」。今ので何匹田だ?」

「12です、英子ちゃん」

「じゅうに? 12匹?」

「糞つ、聞くんじゃなかつた。」

あたしは、深い溜息をつくと同時に、手にしていたナイフをその場で手放した。

「お疲れ様です、英子ちゃん。はい、これ」

そう言つてミニネラルウォーターのペットボトルをあたしに手渡す
びーー」。

あたしは、それを受け取ると一気に喉の奥へと流し込んだ。

一時の静寂に満たされたマンション内に、「ゴクゴクといつあたしの喉音だけが響き渡る。

「つふはあああ。ちつきしょー。だからあたしは金曜日が嫌いなんだよ! 特に13日の金曜なんて、その存在すら許せねえ。死ねつ。氏ねじやなく死ね。カレンダー上から消えちまえ」

「英子ちゃんつたら、またそんな子供みたいな事言つて。金曜日がなくなつちやつたら、全国のカレンダー屋さんが大変ですよ?」

「そういう問題じやねーし、そもそもカレンダー屋さんて何だよ! ガキかてめーは」

びーーこの天然つぶりが披露困憊のあたしに追い討ちをかける。ヤバイ、突つ込んだら余計疲れちまつた。

つーか、何でこんなことやつてるんだね?、あたし…。

あたしはぐつたりしながら今日一日の出来事を振り返った。

あたしの基本的な一日は、びーこに始まりびーこに終わる。朝、目覚まし代わりであるびーこに騒ぎ声で眼を覚ます。あたしは夜行性だ。

だから寝起きはすぐぶる悪い。むしろ最悪だと言つてもいい。目覚ましの2、3個くらいではとてもじゅうがどうすることも出来ない。

つまり、誰かに起してもうつ以外に、あたしが時間通り起きる術は無いってこと。

そして、悲しいかな、この部屋にはまともな人間と呼べる類の生物は、あたしとびーこしかいない。

となれば必然的に、毎朝びーこに起してもうつとう、恐ろしく不安で不服な方法を取らざるを得ないのだ。

毎朝、あたしが一番最初に眼にするのは、そんなびーこの中の膨れつ面。

びーこは、あたしに往復ビンタをお見舞いしたり、あたしの腹の上に本を山のように積み重ねてみたり、時には口と鼻を同時に塞ぐなどという実際にアグレッシブでチャレンジ精神に溢れる方法でこのあたしを起してくれる。

人の優しさってやつが骨身にしみる。ありがあたすぎて涙が出てくるぜ。

簡単な朝食を済ませ、あたしは愛車のスクーターでびーこを学園へと送り届ける。

基本的に、学園にいる間だけは、びーこに靈媒体質が悪い方向へ働く事は無い。

あたしと一人でマンショングリーンによつぽい安全なのだ。

そして、あたしはその間だけびーこのお守役から開放される。

その時間、あたしは別件の糞メンドクセー仕事をこなすこともありますれば、丸々自由な時間として勝手気ままに費やす事もある。よっぽどすることが無い場合や、びーこに涙目で懇願された場合は、まあ、学園内をついて回る事も稀にあるが。

そこがあくまで学園である以上、放課後はやつてくる。安全だからと言つても、所詮は一時しのぎ。学園は、びーこのためのシェルター や隔離施設ではないつづること。

夕刻、あたしはびーこを迎えて行くため再び学園へと赴く。後はまあ、一人でマンションに帰つて馬鹿話をしたり、飯食つて寝るくらいだらう。

勿論、途中で何度も、メンドクセー厄介ごとに巻き込まれたりするの 日常茶飯事。

だが、金曜日はそうはない。

真実はあたしもしらねーし、別段しりたくもねーし、興味もない。だがまあ、あたしが言えることは一つ。

金曜日には魔物が住んでいるんだ。

比喩とか例え話つてわけじゃない。言葉通り、そのままの意味だ。

金曜の夜つてのは人間を解放的な気分にするが、それはそのまま人間以外にも当てはまる話らしい。

金曜日の夜は、何故か良くないものたちが騒ぎ出す時間帯なのだ。

特に13日の金曜日なんて最悪だ。眼も当てられない。

現に、こうしてあたし達の部屋には既に、びーこに魅入られた12匹の不届き者達が侵入してきやがつた。

1匹1匹はさほどではないといつても、ただでさえ1週間の疲れがどつと押し寄せてくるこの時間帯に、休みなく連戦。

そんなの疲れるに決まってる。むしろ疲労しないわけが無い。

だからとつて油断をすれば、あたしもびーこもただではすむわけがない。

常に続く緊張状態。永遠とも思える時間。長い長い夜。

だからあたしは、金曜日が嫌いなんだ。

「英子ちゃん? まだ眠つてしまつてはいけませんよ? ほら」

そう言ってびーこが指さす先に、青白い炎が上がった。呼応するよつに部屋全体が振動し、激しい風が吹き荒れる。

休む暇もなく13匹目のおでまし。つまり、びーやら今夜は徹夜確定らしい。

⋮ つたつぐ、やれやれだぜ。

あたしは、部屋の壁面に飾られていた一振りのレイピアを掴み取り、一気にその刃を突き立てた。

金曜日は、まだまだ眠らない。

END

第五話 「日曜日は眠れない」

第五話 「日曜日は眠れない」

「私、明日は学園に行きたくありません！」

あたしの長い夜は、そんなびーこのセリフで幕を開けた。
実にメンドクセーことこの上ない事態。

これは、そう、言つなればびーこの病氣の一つみてーなものだ。
勿論、心の病つてやつだが。

毎度毎度、こいつは日曜日の深夜、突然そんな事を言い出す。

「ああ？ またかよ、びーー。つーか今何時だと思つてんだ？ 寝
ろ、全てを忘れてとつとと寝ちまえ」

ちなみに今は、深夜の1時。

良い子つづーか、お子ちやまはとつくに寝てている時間つてわけだ。
「そひは参りません。だつてだつて、どーせ私は駄目駄目なんです。
何をやつても駄目駄目なんです」

そう言つてベッドの上でしゃべくれるびーー。

どうやら、今夜も重症らしい。

「ようやつ、びーー。あたしだつてこんな事は言つたかねーが、も
う決めた事だろ？」

「……つ。そ、それは分かっています。でもでも」

「でもも、だつても無しだ」

あたしはそう断言しながら、びーこのベッドに近づき、そしてそ
の小さな頭を撫でた。

「いつも言つてんだろ？ びーーなら大丈夫だつて。おめーなうき
つと出来るつてな」

そんなあたしのありがたいセリフにも、ふるふると首を横に振りて拒絶を示すびー。

「いつは何だかんだで頭が堅い。というか妙なところで意地つぱりなのだ。

全く、メンドクセーことこの上ない話だぜ。

「厳しいことを言つようだがよ、びーこのその呪われた才能つてやつは、現状あたし達にはどうすることも出来ない。確かに、実際に起きた事に関しては、解決に協力してやることは出来るし、それがあたしの仕事つてやつではあるが……」

「分かっています。私だって、この力をコントロール出来たら、普通の生活が出来たらどんなにいいかっていうのも考えてますもの」

「……だったら何が問題なんだ？」

あたしは、その質問の答えを知りつつあえてそんな言葉を投げかけた。

これまで何十回と交わされてきたやりとり。

それでもあたしは、黙つてびーこの返答を待つ。

「ううつ。私には、自信が無いんです。私は、英子ちゃんみたいに強くはなれないんです」

やつぱりまたその話か。

あたしは深い溜息をつきながら、しつかりとびーこの田を見据えた。

「良く聞けびー」。確かに、おめーのその呪いとも言える才能つてやつは、誰のせいでもない、勿論びーこのせいでもない。もって生まれちまつたギフトつてやつだ。けど、その力は使い方一つで、いや、制御出来るか出来ねーか。たつたそれだけでびーこの人生そのものを変えちまえかねない代物なんだ。そりやあたしだって、厄介ごとに巻き込まれるのは「メンだし、びーこには真っ当な人生つてやつを送つて欲しいと思ってる。嘘じやねーぜ？」

びーこは俯きながらあたしの言葉を聞いてくれる。

「びーこはあたしが強いやつだなんて思つてるようだが、そりゃ勘

違うも甚だしいつてもんだ。あたしだって、じえーもんはじえーし、

断じて強く何かねーぜ」

「英子ちゃんも… その、怖いんですか？」

「ああ。勿論怖い。おめーが普段あたしをびつ思つてゐるのか知らねーが、あたしだって一応年相応の女の子なんだぜ？ びーー」と同じで怖いもんは怖いし、逃げ出したい時だつてある」

あたしのそんなセリフに対し、ぴくりと反応し、ゆつやくその顔をこちらに向けてくるびーー」。

「でも、英子ちゃんは逃げ出したりしません。いつも私を護つてくれて助けてくれます」

「そりゃ、それがあたしの仕事つてやつだからな」

一瞬だけ寂しそうな顔をしたびーーは、田元だけを赤く腫らせて、再びその白い顔を伏せてしまつ。

毎度の事とはいえ、つたくしょーがねーやつだ。

あたしは、再びびーーの頭をくしゃくしゃと撫で回しながら話へ。 「だが一番の理由は、… あたしがびーーを信じてゐからだ」

再び顔を上げるびーー」。

「何度も言つてることだが、あたしはびーーに賭けてんだ。おめーのその才能… いや、努力や頑張りに期待してんのさ」

先程の泣き顔はぢーいえや。田を輝かせてあたしの顔を見つめるびーー。

「びーーなら、あんたならきっと、この歪んじまつた世界つてヤツを正しい方向へ矯正出来るつて。あたしはそう確信してくる。だからこそ、あたしは命を賭けてあんたを護る事が出来る。もつ後戻りできなくくらいに、あんなバケモン達に喧嘩を売れるのさ」

「英子ちゃん…」

いつの間にかびーーは、あたしの直ぐ横に来て、あたしの手をしつかりと握つていた。

「私、間違つてました！ 私、頑張つて強くなつてみせます…！」

ローマは一日にしてならず、私明日も学園に行きます…！！！」

「ひや、ひー」の中で何らかのケツがついたらしく。つたく、やれやれだぜ。

「それは、そ、と英子ちゃん。私、今、やる気や情熱で、こ、ぱいになつちやいまして、その… 全然、眠れそうにありません…」

先程の泣き顔とは打って變つてめちゃくちゃ元気良くそんな事を言いやがるびー」。

きたよ。毎回この話のオチはいつもひつだ。

あたしは、次のびーこの言葉を身構えるようにして待つた。

「だから、眠れるまでまた英子ちゃんのお話を聞かせてください。

私、英子ちゃんのお話大好き」

「つたく、飽きねーやつだな」

あたしは、小さく溜息をついた後、ベッドの上で実に良い顔で正座する異国少女に言ひ。

「いいぜ、何度も聞かせてやる。耳の穴かっぽじつてよーくきけよ? 今夜は寝かせてやらねーからな」

「望むどいりです!」

そんなあたしの口調は、まだまだ眠れない。

END

第六話 「月曜日は誰だつて憂鬱」

第六話 「月曜日は誰だつて憂鬱」

「おい、びーー。忘れモンはねーか?」

「はい。ばっちりですよ英子ちゃん。それでは参りましょーうか?」

「へいへい、あいよ」

あたし達は、そんな言葉と共にマンションを出た。
びーーを学園へと送り届けるのもあたしの仕事。
あたしはスクーターに跨ると、いつものようにヘルメットを渡し、
びーーを後ろへと乗せた。

ちなみに今日は月曜日。

また、長い長いあたしとびーーの1週間が始めるのだ。

余談だが、あたしは月曜日が嫌いだ。大嫌いだ。

金曜日も嫌いだが、この月曜日ってヤツも、また違った理由で大嫌いなのだ。

もともと低血圧なあたしだが、それに加えて昨日の夜の酒が残つ
ていて頭が痛い。

そんな状態で先の見えない1週間が始まるのだ。

だから、月曜日のあたしのテンションは死ぬほど低い。例えるな
ら歩くゾンビ状態だ。

いや、むしろ月曜日が大好きだなんてやつは断じていねー等。
むしろ、そんなやつがいたら見てみたい。

どんな顔で毎日を謳歌しているのか、是非お目に掛かりたい
もんである。

そんなことを考えていると、後ろのびーーが俄かに謳歌出した。

「英子ちゃん！　あれ、あれ見てください」

相変わらず騒がしいヤツ。全く、だからあたしは、月曜日が嫌いなんだ。

「つたく、月曜朝から何だつてんだ？」

あたしは、渋々びーこの指差す方角を睨んだ。

そんなあたしの眼に飛び込んできたもの、それは。

「……ゾ、ゾンビ？」

そう、ゾンビだ。間違いなくあのゾンビだ。

映画やゲーム、小説や漫画。今となつては様々な形で絶賛大活躍中の、あの生きる屍だ。

そりや確かに、月曜のあたしのテンションの低さはゾンビ並だなんて言つちまたが、まさか本当に出てくるとは思わなかつた。

しかも、実に最悪な事に、田の前に広がるゾンビ達は1匹2匹なんてレベルじゃない。

「なんじゅじゅああああああああ。おいおいおい、あたし達の知らねー間にバイオハザードでも発生したつてのか？　一体全体何なんだこの数は！？」

奇妙な事に、ふらふらとあたし達の前を歩くゾンビ達は、ある者はスーツに身を包み、ある者はどこぞの学園の制服を着用し、またある者はやけにカジュアルな格好をしていた。つまりは、多種多様。あたしたちには眼もくれず、服を着て一心不乱に、それぞれの目的地へと歩いていくゾンビたち。

何ともシユールな光景だ。

「これは、あれじやねーか？　びーこが昨日の夜、性慾りもなく学園に行きたくねーとか駄々をこねたからじゅねーのか？」

「だ、だつてえええあれはー」

「だつてじゅねーよ…　つたく、まあ、今んとこりは奴等に敵意はないみたいだし、ここは華麗にスルーしてこのまま学園に行くぞ。

いいな？」

そんなあたしの言葉を聽いているのかいないのか。びーーは何故かその眼を輝かせながらゾンビたちを見つめている。

「ああ？ 何だよびーー、お前にしちゃ珍しくびらねーんだな」「何を言つているのですか、英子ちゃん。私、こいつ見えてこの手のゲームは大得意なんです！ 1から5まで全部クリアしましたもん興奮気味にそんなことを言つ出すびーー。

つーか、いや、知らねーよ。

「いいですか？ 英子ちゃん。腐れゾンビどもを屠るには頭を一撃で。これが基本なんです」

「く、腐れゾンビ共？」

「びーー、お前がバイオ好きなのは分かつたけど、その、むやみにゾンビ達を煽っちゃいけねーな」

あたしはくれぐれも慎重にびーーを諭す。

相手に敵意がねーつてんなら、それに越した事は無い。

なのに、こいつときたら、こいつときたら…。

「何言つてるんです英子ちゃん。ゾンビなんて燃やしてバラして粉砕してなんぼですよ。あんな腐れ脳みそ共に遠慮も配慮もいりません！」

何があつたの？ むしろ、このお嬢様とゾンビの間に一体なにがあつたの？

あたしは慌てて、びーーの口を塞いだ。

が、やつぱり、いつも通り、時既に遅し。

周辺のゾンビ達の雰囲気が一気に変わつたのが分かる。

「お、おい。覚えとけよびーー。今日の説教はいつも3倍だからな！」

「えー。何ですか英子ちゃん。私、間違つたこと言つてませんもん。それとも英子ちゃんはあんなゾンビ共の味方なんですか？ 同病相憐れむ、ですか？」

「知るか！ んなことより、びーーー、とつととあたしに掴まれ。いいか？ 絶対振り落とされるんじゃねーぞ！」

「え？」

きょとんした顔で呆けるびーーーを後ろに乗せ、あたしは慌ててスクーターを爆進させた。

何故かつて？

理由は簡単。

先程のびーーこの煽りのおかげで、某映画よりいよいよゾンビ達が全力疾走で一斉にこちらに向かつてきたから。

数が数だ。ぶっちゃけ、シャレにならない。

朝からなんだよこの仕打ちは。

神はいねーのか、神は。

「馬鹿が！ 100%、びーーこが煽りやがったせいだ。あーもう糞」「だ、だつてええ」

そう言つていつもの「」とベーベー泣き出すびーーー。

泣きたいのは間違いなくこっちだ畜生。

「あれだけの数だ、1匹ずつ粗手してたらキリがねえ。予定通りこのまま学園まで突つ切るぞ」

もはや喋らなくなつてしまつたびーーこは、そんなあたしのセリフに対しても、真っ青な顔でただただ額き続ける。

まるでゾンビのようなそんなびーーこの顔に苦笑いしながら、あたしは荒い運転で学園へとひた走る。

あたし達の真後ろには眼を血走らせ、狂つたように全力疾走であたし達を追いかけてくるゾンビ軍団。

やべーなこれ、今夜絶対夢に出てくるよ。

「おい、びーー。まだ学生とは言え、お前だつて一応聖職者だろ。何かねーのかよ、聖水とか銀の銃弾とかあるだろ？」

が、肝心のびーーからの返答が無い。… どうやら、恐怖が臨界点を超えてしまつて気を失つたらしく。

それでも、あたしを掴む手が緩まないのは本能ゆえなのだらう。
「嘘だろお前。幾らなんでもそりゃねーだろ。こーなつたら今日の
説教はいつも10倍にしてやる!」

あたしはそう叫びながらもスクーターを飛ばす。

自分でもかつてないほど必死に飛ばしたためだらう、気がつくと
眼の前には学園の門が見えてきた。

唯一絶対の安全地帯。非日常から日常へのスイッチポイント。あ
たし達が辿りつべき田的田。

が、その門は既に固く閉ざされた後。
どうやら、あたし達がゾンビ騒ぎをしているうちに登校時間を過
ぎちまつたらしい。

つまり、完璧な遅刻だ。

「だああああ、こうなつたら止まつてる時間も門を開ける余裕もね
え。このまま突っ切る」

スクーターを限界速度まで上げ、そのまま門の前でスクーターご
とジャンプ。

が、当然門を越えるには高さが足りない。

あたしは、口から泡を吐き失神し続けるびーこを小脇に抱え、空
中でスクーターを足場にしてさらにジャンプ。

馬鹿でかい音を立てて、そのまま学園の門に衝突するスクーター。
何とか門の頭上を超えて、学園敷地内に突入、びーこをかばいつつ
地面へと不時着するあたし。

……た、助かった、のか？

体中に癌を作りつつも、何とかその場で立ち上がり眼の前の光景
を確認する。
なにがどうなったのか？

あたしにはさつぱり分からねーが、眼の前のゾンビ達はその姿は忽然と消し、代わりにいつも通りの朝の通勤通学の光景が広がっていた。

やれやれ、どうやら助かつたらしい。

「おい、起きろびーー。学園に御到着しましたぜ、お密さん

「ん、んみゅう」

ようやく眼を覚ますびーー。はん、まつたくいい氣なもんだぜ。

ひと安心したところで、改めて、あたしは眼の前の光景を見渡す。擦り傷だらけのあたし。

傷一つないびーー。

大破したあたしのスクーター。

半壊した学園の門。

今日はまだ月曜日。

あたしの憂鬱な一週間は、まだまだ始つたばかり。

……だからあたしは、月曜日が嫌いなんだ。

大きな溜息をついたあたしは、びーこを連れて学園内へと向かうのだった。

END

第七話 「月光照らすはシリアルキラー」

第七話 「月光照らすはシリアルキラー」

皆さんこんばんは、びーーーです。

現在の時刻は、草木も眠る丑三つ時。

今、私は、とある理由で英子ちゃんを尾行しています。
私は知っているのです。

ここ最近、英子ちゃんがこの時間になるとマンションをそつと抜け出す事を。

勿論、私に内緒で。

： うーー、英子ちゃんのばかばかばか。絶対許さないんですからね！

と、まあ、そんなわけで、こんな真夜中に私は英子ちゃんを一人でつけているのです。

正直言つととても怖いです。恐怖です。

でもでも、私にとつては英子ちゃんに隠し事をされたり、英子ちゃんに見放されちゃうほうがよっぽど恐怖なのです。

幸い、今のところ英子ちゃんに尾行がバレた様子はありません。
それにもしても英子ちゃんつてば、さつきからどんどん人気の無い方へ進んでいます。

ううう、暗いよー、怖いよー、寂しいよー。今にも何か出来そうな、そんな雰囲気なのです。

最近、この町では嫌なニュースが飛び交っています。連續殺人鬼、シリアルキラーの出没です。

ホラー や 幽霊、怪奇現象も確かに怖いですが、やっぱり一番怖い

のは人間。

被害者は既に数人。それも全て10代の少女。今、この町は混乱と恐怖の真っ只中になります。

： 分かっています。そんな大変なときに、こんな時間に、それも一人で出歩くなんて自殺行為だつてことくらい。

それでも、それでも私は、英子ちゃんを放つておけない。英子ちゃんを信じたいのです。

そんな事を考えていたその時、確かに先程まで私の目の前を歩いていたはずの英子ちゃんが、忽然とその姿を消してしまいました。

「英子ちゃん？ そ、そんなー」

見失つた？

慌てて走り出そうとしたその瞬間、後頭部を激しい衝撃が襲うと共に、私は、唐突に、その意識を失ってしまいました。

： ああ、私って、ほんと馬鹿。

「とつとと洩えやがれ！」

あたしは、今夜7匹目となるその獲物に、蒼く煌くナイフを突き立てた。

獲物は、音もなくその場で倒れ、やがてぴくりとも動かなくなつた。

「へつ、ざまーみろだぜ」

あたしは、息を切らせながらその場に座り込む。

ふと、昨日降った雨によつて出来た水溜りに、自分の顔が映りこ

む。

…… 我ながら何てツラだ。こんな顔、びーこのやつには絶対
みせられない。

何故なら、今のおたしは、あたしが先程まで相手をしていた輩より、よほど酷い顔をしていたからだ。

どうやらおたしは、笑っていたらしい。

醜く顔を歪ませながら、ケタケタと笑っていたらしい。

： あたしは、こんなところで何をやつている？

そんな取りとめも無い自問自答を始めた矢先、あたしの眼の前に、あたしを一気に現実へと引き戻す光景が飛び込んできた。

どうこいつことだ？

迷つて いる暇も、眼の前の光景を疑う暇も無い。あたしは、無我夢中で走り出した。

糞ツ、頼む、間に合ってくれ。

「知つて いるかな、お嬢さん。人間の肉は酸っぱくて食えたもんじやない。一般的には そう言われているだろ？ あれは嘘だ」

「これはどこかの廃屋で しょうか？

頭が痛い。気分が悪い。そして、動けない。

私は、そんな最低の状態で眼を覚ました。

でも、何より一番最低なのは、眼の前の相手が、件のシリアルキラーだと、すぐにそう確信出来てしまつた事です。

いつそのこと悪い夢であれば、どれだけ良かつた事か。

私は、田の前に横たわる数人の少女とおぼしき遺体を一瞥しながら、そう思つたのでした。

おぼしき。私がそんな曖昧な表現を使ったのには、勿論理由があります。

私は、吐き氣と震えを押し殺しつつ、再び田の前の、かつて少女であつた物に眼を向けました。

人間、心の底から絶望と恐怖で満たされると、涙すら出ないものですね…。

「僕はね、自分で試してみないと気がすまない性質なんだよ。何でも実験して、実践して、納得しないと気がすまない性質なんだ。だからさ、食つたんだよ、僕は」

腕、足、胴、そして頭。

眼の前の少女達の亡骸は、私の見る限り、そのどれもがどこか一部を欠損し、苦痛に歪んだ表情を浮かべていました。
まるで、生きながらにして、体を食いつかられたかのように、苦痛と恐怖に満ち満ちた顔をしていました。

「結論から言つとね？ すっぱにだなんてとんでもない。きっと、僕の選別眼が良かつたんだろうね。君くらいの年齢の少女の肉つてやつはね、… 甘いんだよ。嘘じやない。全部本当のことさ。だって、ほら、こんなに実験… いや、実食したからね」

やう言つて一歩ずつ、まるで私の「」を食べようかと値踏みするように、男はゆっくりと私に近づいてきました。

「ごめんね、英子ちゃん。今までずっと英子ちゃんに迷惑掛けて、助けられて、その結果がこれだなんて… そんなの絶対可笑しいよね。」

英子ちゃん、やつぱり私は最後までダメダメなのでした。

「今夜君に出会えたことは、僕にとって実に幸運だった。日本人の少女の肉は、酸っぱいどころか甘かった。確かにそれは実験から導き出した答えだ。それじゃ今度は、君のような外人の少女はどんな味がするのか？ それって、実に興味深いとは思わないかい？」

眼の前の男は、とうとう私の目の前までやってきて、興奮氣味に私の頭を撫でるのでした。
英子ちゃんとはまったく違うその穢れた手で、私を撫でるのでした。

「特に、君のような透き通るように色白で、輝くような銀髪を持ったオッドアイの少女なんて、どんな味がするのか見当もつかないよ」

男はポケットから赤く染まつたナイフを取り出し、私の顔に手をかけ、そして…

が、その時、静寂に包まれた暗闇を切り裂くように、あの人声が響き渡りました。

「そいつはあたしも同感だ。けど安心しな、これから先、てめーにそれを確かめるチャンスは巡ってこない。永遠になー！」

そんなセリフとともに、あたしの投じたナイフは見事殺人鬼の右肩に命中。

あたしは、バッドを片手にしながら、一気に殺人鬼の元へ駆けた。

「誰だ？ 僕の崇高な実験を邪魔するヤツは」

「はん、誰だと思う？……言つてみろ、あたしは誰だ！？」

あたしの振り上げたバッドを、コンバットナイフで受け止める殺人鬼。

「知らないな。興味も無い。だつて君は、酸っぱいって言つより、激辛っぽいしね。残念だな、僕は辛いものが嫌いなんだよ」

「奇遇だな。あたしもてめーみた的なヤツが大嫌いなんだ」

威勢よく飛び出したのは良かつたものの、あたしのバッドは仄くかわされていく。

逆に、あたしはヤツの攻撃を防ぎきれず、徐々に押されていってしまつ。

ちつ、糞野郎のくせして、一撃一撃が早い。まるで頭のネジが何本か飛んじまつてるような動き。

いや、この惨状を見る限り、確実に飛んじまつてるんだろう。だが、このままだと…。

「成る程、正義の味方気取りかい？ 言つておくが、僕は何も悪くない。ただ追求しただけ。納得したかつただけさ」

弾かれ飛ばされるバッド。

ただでさえ、あいつらとの連戦で体力が残つてねー状態。加えて、どうやら血を流しそぎちまつたらしい。やばい、ふらふらしてきた。

「威勢良く登場したわりには、随分とあつけないんだね」

糞が、好き勝手いいやがつて。こつちにはこつちの都合つてもんがあんだよ。

あたしは、足元に転がるあるものを確認した後、その場でしゃがみこんだ。

「……そんなに人の肉が好きなら、こいつでも食らいやがれ！」

あたしの足元に横たわる、腹を大きく裂かれた少女の遺体に手を突つ込み、その臓物を男の顔に思い切りぶちかます。

仏さんには悪いが、使えるものは何でも使うのがあたしの主義だ。

ドス黒いその塊は、男の顔にぶちあたり、不気味な音を立てながら破裂した。

「がああつ、き、きさま」

「命の賭け合いで、奇麗だとか汚ねーなんて概念はねーんだよ」
よろめく男を尻目に、数歩引いた位置であたしは、精神を集中し始める。

「外面如菩薩、内心如夜叉、鬼面仏心」

あたしは、懷から紅く煌く10本のナイフを取り出した。
「てめーがどこで何をしようが、どこで誰を殺そうが、あたしの知つた事じゃない。勝手にやつてくれ。正義を氣取る気は全くねーからな。だがな、あいつだけは駄目だ。びーこに手を出す不届き者だけは、絶対に許しちゃおけねー。」さて、お仕置きの時間といこうじやねーか。準備はいいか？ あたしはとつぐの昔に、出来てる、ぜつ！！

紅い閃光を描きながら、あたしの放つた10本のナイフが男の四肢に突き刺さる。

聴きたくもない男のきたねー断末魔が、月の輝く夜にこだまする。それと同時に、男は大の字でその場で倒れこんだ。ちなみに、そのナイフによる血は、一滴たりとも流れていない。

「あたしは、あんたと違つて絶対に人間を殺したりはしない。いや、人間だけは殺せないのさ。そして感謝しな、代わりといつちや何だか、あんたのその 異端 を奪つてやつた。つて、もう聴いちゃいねーか。まあいい、暫くそこでおねんねしてな」

あたしは大の字で横たわる男をスルーし、椅子に縛られ顔を真つ青に染めたびーこに駆け寄つた。

「よお、びーこ。今夜は随分と妙なところで出合つじやねーか。何だ、夜の散歩か？ まあ、言いたいことは山ほどあるが、とりあえず帰ろうぜ。そこらじゅう痛てーし、貧血でぶつ倒れそうだぜ」

そういうながら、びーこの口元に張られたガムテープを一氣にはがす。
「ツつ。… ばかばかばかばかばかばか。英子ちゃんのバカー」

「おまえなあ、それが命の恩人に対して言うセリフか？」

「え、英子ちゃん!」そ、いつもいつも、一人で何やってたんですか

！
私、凄く心配してたんですよ！」

成る程、合点がいった。それでわざわざあたしをつけてきたつてわけか。

「…か、あたしとしが、たかかひー、こ程度の尾行にすら気がつけなかつたのか。一生の不覚だなこりや。

「いや、まあ、確かに何も言わなかつたのは

… ほら、この前のゾンビ騒ぎ覚えてるだろ？ あの時のゾンビの残党がこの辺りにいるって噂を小耳に挟んでな。所謂、後始末って

ヤツだ

そなから手をもと請ひてくればは良か。カリ。ないてか
和

「ああああ、そりやうだよ。話の続お聞かねえよーが。」

よし
今回はあがしも悪かでかがらな
ほら 特別はおふくでやる

そう言つてあたしが背中を差し出すと、びーこは素直にあたしの

言葉に従つた

二二二
一月一號

やうやく、緊張と恐怖から開放された事で彼女の疲労は臨界を突破してしまつたらしい。

中で舞ひ始めたのです。

つたく、あたしはあんたの保護者かよ。

……
そういうや、保護者だつた。まつたく、やれやれだぜ。

第八話 「電車の寝心地の良さは異常」

第八話 「電車の寝心地の良さは異常」

がたんじとん。がたんじとん。

オレンジ色のタトに照らされながら、あたし達は揺れる電車の中にいた。

「最近のびーーの送迎には、もっぱら電車を利用している。何故かつて？

理由は簡単。

あのゾンビ事件で、あたしのスクーターがスクラップになっちゃつたからだ。

一応修理に出しちゃあいるが、当然ながら時間が掛かる。つーわけで、その間の足として、あたしとびーーこはこのローカル線を利用しているのだった。

まあ、そんな事情はどうでもいい。

この際、あたしが言いたいのは一つだけだ。

……電車って、何でこんなに眠くなるんだらう。

あたしに寄りかかりながら、すうすうと寝息を立てるびーー。そんなびーーを見つめつつ、あたしの瞼もまた、いつの間にか降りてきて…

ふと、田を見ますと、車窓はオレンジ色から闇色へとその姿を変えていた。

くつそ。

どーやら、びーこにひられてあたしまで眠つけたらしい。
慌てて窓の外を確認する。

あたしの田に飛び込んできたのは、全く見たことの無い風景。
… 最悪だ。完璧に乗り過ぎしちゃった。

とはいっても仕方が無い。一先ずあたしは、
隣で未だに眠つたままのびーこを振り起しにした。

「おい、起きろびーこ。どーやらあたし達、随分と寝過ぎしちゃったようだぜ… つてあたしの服によだれをたらすんじゃない!」

「ふええ? ああ、お早うびーこます英子ちゃん」

「ううううう、あたしの服で垂れ流しのよだれ拭くびーこ。

「だああああ、垂らすのも拭くのも禁止だバカ。つたぐ、しょーがねーな。ほり、こいつを使え」

あたしはポケットからハンカチを取り出し、びーこに手渡す。
ファンシーなウサギちゃん柄のハンカチで、口元をぬぐつびーこ。

… 言つな。何も言つな。

「え、英子ちゃん、英子ちゃん」

ぐいぐいとあたしの袖をひっぱるびーこ。

「あ? 今度は何だ? トイレか?」

「違います! あ、あああ、あれ、あれを見てください」
そう言つてびーこが指示するその先にあるもの、それは。

車内に佇む複数の骸骨、シャレコウベ達の姿だった。

「い、ここは…」

焦つたあたしは、改めて車内を見渡す。

先程まであたし達と一緒にいた乗客達は、その姿を消し、代わりにいるのは何故か骸骨軍団。

それだけでも失神したくなるくらいの事態だが、問題は車内だけ「ことじまらない」。

車窓から見える風景。

さつきあたしは、見た事が無い風景って言った。

「どうやら、早くもその言葉を訂正せざるを得ないらしい。」

窓から見えるその風景は、見慣れぬ風景どころか、そもそも日本の風景であるかも怪しい。

辺り一面、水面。視線の先にはレールすら存在していない。この電車は、そんな水面の上を、まるで浮かぶよつこじて進んでいた。

ジーザス。

これらから導き出される答え。それは。

「英子ちゃん、私達……死んでしまったのでしょうか？」

「バカ言つたじやねー。そんなわけねーだろ…………たぶん」

少なくともあたしは、誰かに殺された記憶はない。ないつづーか、そんなのあつてたまるかよ。

恐らくだが、これは黄泉列車だ。

死者を黄泉の国へと運ぶため、一路、三途の川をひた走る黄泉列車……なのだろう。

憶測の域をでねーのがもどかしいが。

「一先ず様子を見て回りつ。このままいつにいつに乗つてちや駄目な氣

がする」

震えるびーーにぎゅっと腕を掴まれながら、あたし達は列車内を徘徊する。

「ほねほねさんが一人、ほねほねさんが一人、ほねほねさんが三人」「シャラップ！ 一いちいち数えんでいい。つーか、ほねほねさんつて何だよ。そんな可愛らしい見た目じゃねーだろ、これ」

シャレコウベ共は、何故か皆一様にうなだれ、俯いている。

まあ、これからあの世つてやつに逝くわけだし、そもそも浮かれてるヤツがいるわきやねーんだけど。

そして、暫く見て回つてもう一つ分かつた事がある。

こいつらは、一様にして五体満足では無いという点。

腕の骨の無いもの、足の骨の無いもの。ひび割れているもの、砕けているもの。

大なり小なり、こいつらには欠損が見受けられた。

恐らく、死ぬ直前に負った傷や怪我なのだろう。まあ、それらが死因かどうかは判断しかねるが。死因かどうかは判断しかねるが。

成る程、これはつまり…。

怖いもの見たさつてやつなのだろう。びーーにはそんなシャレコウベ達を先程からじーつと見つめている。

これだけヒントがあるんだ。流石のあいつも、気がつくレベルの等。

あたしは、びーーの口から真相が語られるのを待つた。

「英子ちゃん、私、分かりました！」

ほら。きた。

「よし。聞かせてもらおうじゃねーか、びーーの回答つてやつを」自信満々に頷いた後、びーーはその口を開いた。

「私達、ほねほね星人さんの」

「違う！ぜんぜん違う！ふざけんなエセシスター」

「え、エセシスターじゃありません。ぶちシスターです」

いや、意味分からんから。

「時に落ち着け。そして聽け。良いか？　あたしたちまごつなる前、何処で何をしていた？」

「学園から電車で帰る途中、その、あまりにも気持ち良くなつて寝てしまつたような、そうでないような」

「いやいや完璧に寝てたからな？　むしろあたしより先に寝てたからな？」

そんなあたし達の漫才のようなやつとりを見て、カタカタと笑うシャレコウベ達。

笑つてるんだよな？　あれ。

「でもでも、がたんがたんつて規則的に揺れて、ビリして電車に乗ると眠くなつてしまふんでしょうか？」

いや、知らねーよ。

確かに眠くはなるが、今そんなことはビリでもいい。

「どーやらあの電車。あたし達が眠りこけちまつてる間に事故を起こしたらしいぜ。しかも相当でかい」

そう言つてあたしは、後方車両を指し示す。

「見ろよびーこ。後ろの車両がないぜ。まるで千切れたみてーに、連結部分が壊れてる。しかもこの列車、よくみりやあたし達の乗つてた列車そのものじゃねーか」

何というか、全体的に黄泉仕様になつちゃいるが、確かにあたし達の乗つていた列車そのものだった。

「つうううう、やっぱり皆死んじやつたんですねですか？」　英子ちゃんも死んじやつたんですねか？」

：　まつたく、ちよつとは自分自身の心配もしきつてんだ。

「安心しな。あたし達は死んじやいねーよ。びーこはそう簡単に死ぬたまじやないだろ？　あたしだつて、そう簡単に死ねるわけがな

い

今までやつてきたことを考えるのなら、あたしは間違いなく地獄
逝きだらう。

つたく、やれやれだぜ。

「それによ、幸いあたし達の姿はシャレ口ウケになつたやいねーだ
ろ? こいつがあたし達がまだ生きてる証拠だ」

そう、まだ、今は。

骨でないあたし達は、まだかろうじて生きている。
だが、断じて談笑していられるような状況じゃない。

「つまり?」

「つまり、あたしたちは生死の境にいるわけじゃ。かなり曖昧で
中途半端な位置だ。それこそ、生身でこんな異様な列車に紛れこん
じまうくらいにな」

あたしとびーこは死んじやしない。だが、確実に死に掛けている。
というか、このままここにいれば、マジで黄泉の国つてやつに逝
つちまうかもしれない。

つーか、あーだこーだと言つてる時間は、もはや無い。

「びーこ。あたしに考えがある

「それは危険な事ですか? 英子ちゃん」

……こいつ、どうこうわけかこいつこいつの感だけは良いんだよ
な。

「危険かどうかは考え方による。で、簡単に言つてだな。あたしは
こいつで自分を刺す」

そういうてあたしが懐から取り出したのは、一本のハンターナイ
フ。

これもあたしの「レクション」の一つで、その禍々しきまでに研ぎ
澄された刃先が特徴の一品。

今日に限つてこれを持って来たつてのは、果たして幸運なのか不

幸なのか。

だがまあやはり、迷っている時間は無い。

「実のところ、あたし達はまだ眠っているのさ。あたし達の魂は現実世界では眠つたまま。だから、じいつでサクッと切つて目を覚ます。無理やり目を覚ます。言わば、目覚まし代わりだ」

自分で言つておいてなんだが、世にも恐ろしい目覚ましがあったものだ。

「で、でもそんなことしたら英子ちゃんが」

「分かつてゐる。ただでさえ、現実世界のあたし達がどんな事になつてゐるか想像もつかねーからな。勿論手加減はするつもりさ。で、あたしが現実世界で目をさましたら、びーこを病院へ叩き込む。以上だ」

「でもでもー」

未だ納得をみせないびーこ。だが何にしろ、選択肢はない。

これは、あたしにしか出来ない方法なんだ。

「でもは無しだって、いつも言つてるだろ？ 考えてみろよ。こんな荒療治、あたしにしかできねーだろ？ ましてや、あたしがびーこを刺せるわけがない」

だからこそ、これはあたしにしか出来ないやり方。

「時間がねー。びーこの許可を貰つてちや日が暮れちまつびーこのか、本当に逝つちまいかねないからな」

今回は、かつての鏡の世界に迷い込んだときとは訳が違つ。

このナイフで刺すのは、あたしの体、魂そのものなのだ。一歩間違えば、正にトドメになりかねない。

あたしは、最後にほんほんとびーこの頭を撫でた後、ナイフに力を込め… 自らのわき腹に突き立てた。

そして、突き立てた後に後悔した。

これ、目覚まし代わりなんだから、別に刺す所は腕でも足でも良かったんじゃないだろうか、と。

カツコつけて腹に刺しちまつたけど、その必要は全くなかったんじゃないだろうか、と。

ザ・後の祭り。

あたしは、苦笑いを浮かべながら、目を瞑つた。
目を覚ますため、目を瞑つた。

地獄絵図。

むしろ、さつきまでの黄泉列車内が天国にさえ見える。
あたしの眼に飛び込んできたのは、正にそんな表現がしつくりくる、そんな凄惨な光景だった。

どう覗眞目に見ても、この中に生きている人間がいるとは思えなかつた。

無造作に床に転がる人体のパーツ。いや、パーツと言つのも憚られる、生物の肉片、元は何かだった肉片達。

これまで、びーこに巻き込まれ様々な怪奇現象や、オカルト、魑魅魍魎や超常現象の類に出くわしてきたが、この光景は、明らかに異質だつた。

床が真っ赤に染まつている。

血生臭いとは、こういうことを言つのだろう。

あたしは、眼の前の光景に聊かの吐き気と頭痛を覚えながらも、びーこを探すため、何とか自分を奮い立たせる。

ガラス片が幾つも突き刺さり、打撲や擦り傷は幾つもあるものの、不幸中の幸いにも、一先ずあたしの体に致命傷や四肢の破損はない

ようだつた。

勿論、黄泉列車内で自分で刺した傷を除いて、だ。

びーこ、あんたは今、どこにいる？

わき腹に応急処置を施した後、あたしは辺りの搜索を始めた。が、あたしが探すまでもなく、びーこはそこにいた。

白い肌を紅く染め、びーこは確かにそこにいた。

あたしは、自分の鼓動が早くなるのを感じた。

： これは、どういうことだ？

あたしは かつて人であつたもの達 を丁寧に払いのけ、びーこを抱え起こした。

びーこの体は鮮血により赤く染まつていたものの、それはびーこの血ではない。

それどころか、驚くべき事にびーこのその体には、ただのかすり傷一つさえ無かつた。

こんな異常事態において、大事故において、淒惨な現場において、びーこの体にはかすり傷一つさえ無かつたのだ。

そんな、あたしの見た光景。それは……

まるでびーこを護るかのように、びーこの周りに壁を作るかのように、幾人もの人達が彼女の周囲に折り重なつっていた。その様子はさしづめ肉の壁。人間による壁、ドームである。

果たしてそれが何を意味しているのか？

残念ながら、今のあたしはそれを考える時間も余裕も持ち合わせてはいない。

改めてあたしは、そんなびーこの恩人達に一礼をした後、びーこを連れて列車から脱出した。

そこからの記憶は、正直よく覚えていない。
気がつけばあたしは病院にいて、むしろびーこに看病される結果となつた。

勿論、原因は腹のあの傷だ。

どうやらあの車両で助かつたのは、あたしどびーこだけだつたらしい。

原因は機体の老朽化による脱線事故。そんなシマラナー事故。
それでもあたしは、あの時見た全ての光景を、決して忘れる事が出来ないだろう。

あの光景の意味を、あたしとびーこが理解出来る日がくるかどうかは別として。

だからこそ、今、あたしが言える事はたつた一つだけ。

暫くは自転車通学にしよう。

そう心に固く誓つたあたしなのだった。

END

第九話 「油性マジックは永久に落ちない」

第九話「油性マジックは永久に落ちない」

「むにゅむにゅー、英子ちゃん、もー食べられないよー」

漫画やアニメの中でしか聞いた事が無いよつな、そんなテンプレートなセリフを吐きながら、びーこはすやすやと寝息を立てている。食いたいだけ食つて、言いたいだけ言つて、遊びたいだけ遊んで。疲れたらその場で寝る。

お前はガキか！ そう突つ込みをいれたいのを何とか堪えるあたし。

「こりで起こしちまうのも無粋つてもんだ。」

びーこが一体どんな夢を見ているのか？ んなことは別に知りたくもねーし、そもそも興味が無い。

まあ、確かに興味はねーが……つたく、幸せそーな顔しやがつて。あたしは、そんなびーこの横顔を暫く眺めた後、起こさないよう注意しつつ、彼女をそっとお姫様抱っこした。

「こんなところで寝たら風邪ひいちまうだろーが。ただでさえお前は、お嬢様体质つちやつなんだからよ」
こいつの体調管理も、認めたくねーがあたしの仕事の一部と言えなくも無い。

あたしの仕事がお守だと揶揄されるのは、どビのつまつこりつところにあるんだろうな。

まあ、愚痴つても仕方ないが。

あたしは、びーこをそのままゆつくりと彼女のベッドルームに運んだ。

起こさないよう注意していたとはいえ、相変わらずぐすりと眠り続けるびーーー。

つーか起きる気配は微塵も無い。

ベッドに寝かせてやった後も、逆に氣を使ったのがアホらしくへりに、ぐすりと涎を垂らしつつ眠るびーーー。

そんな顔を見て、あたしは…… やべえ、無性にイライラしてきた。

はあ。

つーか何であたしは、こんなお嬢様のお守なんてやつてるんだろう。

今でも、この仕事を引き受けた自分自身を、信じられなくなる瞬間がある。

どう見てもあたし向きの仕事じゃねーし、どう考えてもあたしの柄じゃない。

だからってわけじや全然ねーが、たまには「こんな事」をしあつて、決して罰はあたらねー等。むしろ許されて当然の行為だと言える。

だからこそ…… あたしは、ポケットからあるものを取り出した。

びーーーが眠つてから数時間、時刻は深夜。

基本的に夜行性であるこのあたしも、いい加減眠くなるよつた深夜帯。

辺りは不気味なくらいに静まり返つてゐる。

時間帯を考えれば当たり前のことなのだが、何分びーーーとの日常に当たり前や常識なんて言葉は通用しない。

人が想像できる全ての出来事は、実際に起こりうる現実である。なんて格言もあるが、びーーーの場合には正にその逆。

あたしが想像も出来ねーようなことばかりが次々と起る。
そんなおかげで、退屈しない、退屈知らずの日常生活ついでつが
今も続いている。

だが、どうやら今夜は、そんな非日常とは無縁の夜らしい。
あたしだつて人間だ。いくら夜行性であるとは言え、一日仕事を
こなしてきた身である。そりやー、疲労もたまるし、眠くもなる。

つーわけで夜も更けた。そろそろベッドに向かうとするか。
あたしがそんな結論に至りソファーから立ち上がった、まさにその
瞬間、部屋のドアが勢い良く開かれたのだった。
忌々しい事に、あたしが眠りの世界へこの身を投じるのは、まだ
まだ先の話らしい。

「英子ちゃん英子ちゃん英子ちゃん」
「英子ちゃん英子ちゃん英子ちゃん」

「つものびーー」のすつとんきょーな声が、何故か今日に限つて一
重に聞こえる。

こだまだらうか？ いや、むしろ仕事のしきぎて幻でも見てるつ
てか？

つーか、これ、声だけじゃなく、びーーの姿まで一重に見える。
……成る程、いつの間にかあたしは寝ちまつたらしく。
つまり、これは夢だ。夢に違いねえ。

「時にびーー」。スマンがあたしのほっぺをちょいとつねつてみてく
れねーか？

あたしのそんな呼びかけに対し、一人のびーーは、それぞれ両サ
イドからあたしの頬を思い切りつねる。

「い、いふあいふあい、もういふあらもうふあふあつふあ
つて、もういこいつてんだろーがよー」

あたしは、赤く腫れた頬をさすりながらそう叫んだ。

実に残念な事に、こいつは夢じゃねーらしい。現実。よりにもよつて現実だ。

よーするにいつもの事、いつもの事態つて事らしい。びーこのやつ、またよからぬものを惹きつけやがつて。まったくもつてやれやれな事態だぜ。

「あのねあのね、私、目が覚めたら隣に私が居て、でも私もここにいるから、私が一人になっちゃいまして」

「あのねあのね、私、目が覚めたら隣に私が居て、でも私もここにいるから、私が一人になっちゃいまして」

見事にハモるびーこ達。

騒がしさが2倍なら、苦労は2乗。あたしは既に、頭が痛くなつていた。

「あーあー、何となく事態は飲み込めたから、てめーら騒ぐな。いいか？ 確かにこの世には自分と似た姿の人間が3人はいるなんて逸話があるが、普通、人間は分裂したり分身したりしねーんだよ。つ、ま、り。お前ら、どっちかが偽者つてわけだ」

恐らく、ドッペルゲンガーとかそんな類だろう。

この手のやつらは、やる事が単純なだけにその力は洗練されて厄介だつたりする。

ぶつちやけ、瓜二つってレベルじゃねーぞ、これ。

背格好はあるか、声も髪型も、御丁寧に服装まで一緒ときている。とはいえる、解決方法事体は至つてシンプル。

どっちかが偽者だといつならば、その偽者をぶつた切つてやればそれで終了。

簡単だろ？

まあ、問題はどちらが本物のびーこで、どちらが偽者野郎かつてことなんだが。

「うええええん、英子ちゃん。私が本物です、あっちが偽者なんですー。信じてよー」

「うええええん、英子ちゃん。私が本物です、あっちが偽者なんですー。信じてよー」

……やつぱり分からん。

何から何まで一緒に二人。びーびーと泣くその姿まで一緒にのだから始末が悪い。

一瞬、別にこのままでもいいんじゃねーかなんて思ったものの、一人でも糞面倒で苦労のたえないこのびーこの子守が、単純に2倍になつたらと思うとゾッとした。

それだけはまずい。

一刻も早く解決しねーと、あたしの命に関わる。

あたしは、何かヒントを探ろうと、手で顔を覆いびーびー泣き叫ぶ眼の前のびーこ達を、必死に凝視した。

服装は二人ともパジャマ。ふりふりのフリルのついた、胸焼けがしそうな感じの可愛らしいパジャマ。

肌は二人とも透き通るような白。白人のガキ特有の高級陶器のような白や。

顔はまるで人形のように整つた小さな顔。今は、その長い金髪を揺らしながら目を腫らして泣いている。

ん？ 顔？ ････！

見つけた！ 压倒的で、確實な、二人のびーこの相違点。

間違ねえ。まさか「アレ」がこんなところで役に立つとはな。流石はあたしだぜ。

さて、それさえ分かつてしまえば話は早い。とつとつこんな茶番を

終わらせて、ベッドにダイブしようじゃねーか。

あたしは、ポケットをまさぐり、手に触れた1本のマジックペンを取り出した。

ああ、そうか。今日はナイフを携帯してなかつた。

仕方ねーな。じうなつたらこいつで力タをつけるしかない。

まあ、格好はつかねーが、何だかんだいっても今回の場合、これはこれで御説え向きかもしれない。

あたしは、一本のマジックペンを片手に持ち、ゆっくじと精神を集中し始めた。

「月は村雲花に風、月夜に提灯夏火鉢。： 今宵の我が月は、初月直後、あたしの手にしたマジックペンが青白い光に包まれ、やがてビームサーべルよろしく、その光の刀身をすらりと伸ばした。

「へえ、悪くねーな。： さて、それじゃあ、準備はいいかよ？
びーこ」

あたしの光剣を見て、がくがくと震え言葉も出ない様子のびーこ。

： つたくしょーがねーな。

「びーこ。心配すんじゃねーよ。あたしはあんたのお守役だぜ？
と言つても、あたしがあんたの面倒を見ているのは、何も仕事だからってだけじゃない。前にも言つただろ？ あたしは、嫌いなやつとわざわざ一緒に部屋で暮らしたりしない。あたしは、あんたのことを特別だと思ってるんだ。びーこの事を気に入ってるんだ。それともびーこは、そんなあたしのことを信じてくれねーのか？」

そんなあたしのクサイセリフに対し、物凄い勢いで首をフルフルと横に振つて答えの代わりにするびーこ。

よし。びーこの覚悟も決まったようだし、もう一踏ん張りしてやるか。

あたしはニヤリと口元を歪ませながら、一方のびーこに對し、思い切りペンセイバーを振り下ろした。

例え見た目がびーーこそつくりだらうと、それはびーーではない。あたしが守りたいのは、びーーの外見や外側なんかじゃない。だからあたしには、躊躇も戸惑いも一切無かつた。

あたしの一撃を受けた偽びーーは、青白い光に包まれつつ、やがてその正体である黒い影のような体を露にしつつ、音も無く闇夜に消えていった。

二つに一つ。

あたしの選択は、びーーから正しかつたらしい。

ほつと胸を撫で下ろしたあたしに向かつて、びーーが涙と鼻水まじりのぐしゃぐしゃ顔を携えて飛び込んできた。

「私、わたし、英子ちゃんのこと信じてましたから。英子ちゃんならぜええつたに本物の私を選んでくれるって信じてましたから。私たちは以心伝心だつて信じてましたから」

「あ、ああ。んなもん当然だろ。なんつてもあたしとびーーの仲だからな。あ、あははははは。よし、びーー。今夜はもう遅い、一緒に寝ようぜ、な？」

「はい！」

そう言つて、眩しそうくらいに純真で無垢で穢れの無い笑顔をあたしに向けるびーー。

…… 言えない。

びーーが寝ている間に、このマジックペンで、その白い額に「肉」というイタズラ書きをしたなんて、口が裂けても言えない。

そして、そんな腹いせレベルのイタズラ書きが、本物と偽者を見分けるための決定打だつたなんて事実、言えるわけがない。むしろ言わぬが花つてやつだろ、そんなのは。

終わりよければ全てよし。無事解決したんだから、そんなことは

些細な問題。

やつだりへ。

END

第十話 「タイムカプセルはパンドラの箱」

第十話「タイムカプセルはパンドラの箱」

とある休日の午後。

びーこが厄介なのは、何もその才能だけが原因ではない。ヤツの疑う事を知らない、そして何にでも首を突つ込みたがる性格。

これこそが、びーこのびーこたる由縁。

だからこそ、びーこがこんなセリフを吐きながら一々一々顔であたしの前にやつてきたとしたら、あたしは即座に臨戦態勢に入らざるを得ないのだった。

「英子ちゃん！ 見てください、これ。私、すごいもの拾っちゃいました！」

そう言つてびーこがこれ見よがしにあたしに見せ付けるもの。それは、一つの薄汚れた化粧箱だった。

何を隠そう、びーこには収集癖がある。といふかまわづ興味を引いたもの、自分の知らないものを拾つてきては、いつして白慢げにあたしに見せるのだ。

これだけは、あたしが何度説教を加えても治らない。治る必要ないか日に日に重症化しているから性質が悪い。

「で？ 今度は何を拾つてきたんだ？ なんつーかまた、怪しげな

箱だな。触るべからずつてオーラがむんむんしやがる

「何を言つているんです英子ちゃん。そこに山があつたら登る。ひもがあつたらひつぱる。スイッチがあつたら押す。箱があつたら開ける。ね？」

いや、何がね？　なのかあたしにはさつぱり理解出来ない。

「びーー、あたしの話聞いてたか？　見るからに怪しつて言つてんだよ、それ」

あたしにそれと称された件の箱を抱えながら、びーーはその辺い頬をふくーっと膨らませる。

あくまで、あたしの意見を聞き入れるつもりは無いらしい。

「ぶーーぶー。怪しくなんてないですもん。きっと私達の想像もつかないようなものが入つていていたがいありません！」

「あーそうですか。つーかよ、一体何処で拾つてきたんだ？　ちよつと散歩してくるつて言つてたが

「はい、近所の土手に埋まつてました」

は？　埋まつてた？

それはもう怪しつてレベルじゃない。十中八九ヤバイ。

間違いなくパンドラの箱つてやつだ。

「待てびーー。いいか？　それは罷だ。孔明の罷だ。ゼーーつたいに開けるんじやねー、今すぐ元の場所に戻してーー」

が、時既に遅し。

眼の前のびーーは、何の躊躇もためらいもなく、その箱を開けた。

こんなこといら、昼寝なんてしてねーであたしもついていくべきだつた。

後悔先に立たずとはまさにこのこと。

一先ず、いきなり爆発したり、中から煙が出てきてばーさんにな

つちまうなんてオチはないらしい。

代わりにあたし達の眼に飛び込んできたもの、それは、一通の手紙と、小さな黒い箱だった。

「手紙？ おいおい、ますます怪しいぜ、これ

「では英子ちゃん、そちらの手紙は英子ちゃんにお任せします。代わりに、こちらの黒くて四角い箱は任せくださいね」

「やれやれだ。まあ、開けちまつたもんは仕方ねーな。とりあえず手紙を読んでみるからよ、ぜーつたいあたしの許可無くそっちの箱を開けるんじゃねーぞ」

そんなあたしの忠告に対し、じーっと黒い箱を見つめつつ「クククと頷くびー」。

駄目だコイツ、あたしの話なんか聞いちゃいない。すっかりブラックボックスの虜つてやつじゃねーか。

とはいって、ここまでできたらもう後戻りは出来ない。

あたしは、溜息を洩らしながらも件の手紙に目を通す事にした。

「んじゃ読むぜ？ えーっと、なになに……」この箱を見つけてくれた方へ、これは、ワタシのタイムカプセルです」

あ？ タイムカプセル？

「お、おい、やっぱ開けちゃ まづかつたんじゃねーか？ タイムカプセルつていつたらあのタイムカプセルだろ？ 縛らあたしでも、そんな他人様の大事な思い出つてヤツを踏みにじるのは趣味じゃねーぜ」

「英子ちゃん、続きを」

びーこはいつもの調子と異なり、やけに真剣な顔つきで短くそう言つた。

そんな彼女に内心驚きながらも、仕方なくあたしは続きを読む。「なになに…」ワタシはもう、疲れました。何故ワタシが、ワタシだけがこんな目に逢わされるのか？ この世界は、理不尽で満ちています」

何だこれは？

タイムカプセルにしちゃ、やけに暗いつつーか、えりく恨み節つづーか。

とはいえ、続きが微妙に気になるのも事実。
あたしは懲りもせず続きを読み上げる。

「非情に遺憾ながら、ワタシは自ら命を絶つ事を選びました。これ以上、こんな生活に耐えられない。心も、体も、限界なのです」
ところどころ滲んだその文字を読むうちに、何だかあたしまでブルーな気分になってきた。

隣のびーこの様子を伺つと、やはり先程の真剣な表情を浮かべながらも、未だにブラックボックスを凝視し続けている。

びーこがそこまでこのパンドラの箱に惹かれる理由は分からねーが、あたしはさらに読み進める。

「だから、ワタシはこの箱を遣します。この箱を見つけたシアワセな誰かさんのために。この箱にワタシの…………」

…… 虐だろ？

続きを読むだその先、あたしは、思わず固まつた。

そして、思わずその口を止めた。いや、止めざるを得なかつた。

「英子、ちゃん？」

そんな様子を不審に思つたびーこが、その箱に手をかけながら、あたしの顔を見上げる。

こいつ、まさか開ける気か？

駄目だ、それだけは駄目だ。ぜつたに駄目だ。何があつても、それだけは。

「どけつ、びーこ」

あたしは、ブラックボックスに手をかけたびーこを払いのけ、懐

からいつものナイフを取り出し精神を集中させた。

「月は村雲…………つて、まどろっこしい。悪いな、今はカツコつけてる場合でも、体裁を気にしてる場合でもない」

あたしは、何かを叫んでいるびーこを無視して、その箱に蒼く煌くナイフを突き立てた。

瞬間、箱はドス黒いオーラを放ちながら徐々に薄れゆき、やがて、その姿を完全に消した。

恐らくだが、在るべき場所へ、元の場所へ還つていったのだろう。

……一先ずは、これでいい。これでいいんだ。

「な、何事ですか英子ちゃん？ 手紙には何て書いてあつたんですか？ 何で箱を刺しちやつたんですか？ 箱には何が入つていたんですか？ ねえ、英子ちゃん、英子ちゃんつてば！」

大粒の汗を滲ませながら、あたしは、眼の前のびーこの頭をぽんぽんと二度三度撫でて諫める。

何て書いてあつたかだと？

そんなの、言えるわけねーだろ。

絶対に言える訳がない。

手紙の主が……差出人がびーこだつたなんて、そんなの言えるわけねーだろ。

その上、手紙の最後に書かれていた日付は今から数年前。丁度、あたしとびーこが出会った頃の日付だった。

とはいって、少なくとも、びーこはこの箱について何も知らない様

子だった。

もしかすると覚えていないだけ、忘れてしまつただけなのかもしれないが。

少なくともこれが、単なるびーーの悪戯とは思えなかつた。眼の前のびーーが、これを書き、そして埋めただなんて思いたくなかつた。

タイムカプセルという名の、いんな、いんなパンドラの箱を埋めただなんて思いたくなかつた。

それでも、びーーがこの箱に惹かれ、どこからともなく持ち帰つて来たのも事実。それが意味する事実は……。

それからあたし達は、あたし達にしては珍しいくらいの「ハハハハハハ」平穀な休日の午後を過ごした。

びーーは、箱の事などすっかり忘れてしまつたように、無邪氣に笑つていた。

そんなびーーを見守るあたしもまた、事実から目を逸らすかのように一緒に笑つた。

まるで、何事も無かつたかのように。現実から目を背けるように。いや、これが現実だなんてあたしは認めない。絶対に。

そんなあたしとびーーが、この出来事の本当の意味を知ることになるのは、まだ、随分と先の話。それはまた、別の話。

だから、あの箱の中身はあたしだけの秘密。少なくとも、今は、まだ。

E
N
D

第十話 「鏡の口ひそひのせんじ」（前編）

第十一話 「鎧は口を閉じるもの」を叫ぶ

第十一話 「鎧は口を閉じるもの」を叫ぶ

気がつくとあたしは、真っ白な空間に佇んでいた。

ひたすらにどこまでも真っ白だだつ広い、何も無い虚無の空間。ここは、どこだ？ そもそもあたしは、何でこんなところにいるんだ？

そんな疑問があたしの脳を支配する中、突然、背後に重たい金属音が響き渡った。

音の発生源へ振り返り、その光景を見た瞬間、あたしはこの状況を理解した。

ああ、そうか。まだどつかの馬鹿が、びーこに惹かれちまつたつてわけか。

あたしは、大きなため息を一つついた後、改めて目の前の状況に視線を走らせる。

まるで、御伽噺の西洋の城にでも出でくるような大きな玉座と、そこに座るびーこ… そして、その傍らに直立する何故か首の無い西洋騎士の鎧。

首なし騎士。

最悪だ。

確か、アイルランドに伝わるケルト神話の魔物。死を予言する者、人間の魂を狩る者なんて呼ばれる鎧野郎。所謂、デュラハンってやつだ。

相手は伝承憑き。いつものネームレス、名無しの悪霊の類とは比べ物にならぬ一存在。

スフィンクスの時同様、もしもガチンコ勝負にでもなればものなら、あたしの力で何とかなるかどうかは……。

びーこは玉座にその体を預け、ぴくつとも動かない。どうやら、気を失っているらしい。

あたしが、必死になつて最善の手に考えを巡らせてみると、首無し騎士がその金属音を響かせながら近づいてきた。

そして、あたしの真正面。約5メートルほどの距離のところで立ち止まる。

：あたしには分かる。

この甲冑騎士に顔は無いが、今、こいつは確かにあたしを睨みつけている。

その鋭い眼光で、あたしの眼を、真正面から見据えている。

全身から嫌な汗が流れ出すと共に、多量のアドレナリンが分泌される。

あたしは、自分が震えている事に気がついた。
そして、自分が笑つていてる事に気がついた。

そんなあたしの態度を確認した首無し野郎は、どこから取り出したのか、洋風の手袋を地面へと投げつけた。

手袋？　おいおい、上等じゃねーかコイツ。
思わず笑みが零れるあたし。

つまり、これは決闘だ。

あたしは、今この首無しナイトに決闘を申し込まれたのだ。
勿論、件の眠り姫、びーこを巡つてだ。

これまで、びーこに魅入られた魑魅魍魎、オカルト、超常現象、
変態の類は「まん」といた。

あたしは、そんなやつらを容赦なく葬つてきたし、そもそもあいつらは、節操も礼儀もプライドも持ち合わせちゃいない。
だからこそあたしは、眼の前の光景に驚愕し、心を躍らせている
のだった。

こいつは間違いなく今までの類とは違う。こいつは、びーこに魅入られながらも、その理性の光を失つていらない。

そして何より、こいつの放つ禍々しいくらいに冷たいオーラは、少なくともあたしの闘争心に火をつけるには充分だった。

そのときになつてようやく、あたしは腰に一振りの日本刀を携えていることに気がついた。

それは、あたしの部屋にある中で一番の業物。

血と呪いに塗れた曰く憑きのじやじや馬。

ちなみに、あたしがこの問題児を使用したのは過去に一度だけ。
まあ、そのときのことは、思い出したくないので割愛するが。
とにかくそれ以来、あたしの部屋に札付きで封印を施してきた代物。

それがなぜ今、あたしの腰にあって、なぜ、この空間に存在しているのか？

……いや、今はそんな下らぬことを考えるのはやめよつ。

今は、この「秋艶」があたしの腰にある。その事実だけで充分だ。
あんな首無しのバケモンを相手にするとあつちや、特にな。

鎧は、そんなあたしの顔を睨む事に飽きたのか、踵を返し再び玉座の前へと戻ると、びーこの前で片膝をつき、その小さく白い手を取りのだった。

これまたあたしには分かる。

あいつは今、びーこの手を取り、キスしやがったんだ。勿論、首がねーんだから出来るはずも無いんだが。

けどまあ、ヤツがびーこまでもスカした鎧野郎だつてのは嫌つて程分かつた。

そんな一連のシマラン礼式が終わると、首無し野郎はその黒いマントを翻し、再びあたしの前に対峙する。

白と静寂だけが支配する世界。

音もなく、時間の概念すら超越したそんな世界。

その下らねー世界をぶち壊すため、あたしは、鞘から刀を抜いた。対する眼の前の甲冑も、ぽつかりと空いた首の穴から、一本の光り輝く剣を取り出した。

相手にとつて不足は無い。

あたし達は、示し合わせたように同時に剣を振り上げた。

その時私は、激しい剣響で眼を覚ました。

辺りは一面、白の世界。まるで世界で独りぼっちになつた気分。でも、やつぱり私は一人ぼっちなんかじゃありませんでした。英子ちゃんです。

私の目の前で繰り広げられる、英子ちゃんと首の無い鎧さんの激

しい斬り合い。

また私のせいで、英子ちゃんが危険な目に合っている。

その事実は、私の心の奥底に重くのしかかります。

私は、英子ちゃんに何か言葉を投げかけようとして、けれど寸前でその言葉を飲み込みました。

だつて、だつて、英子ちゃんのその顔があまりに真剣で、怖くて、嬉しそうだったから。

だから私は、唇を噛締め、両の拳をぎゅっと握つて、黙つて英子ちゃんを見守るしかないのでした。

糞つたれ、何て馬鹿力だ。

一撃一撃が腹が立つくらいに正確で、重い。

常にあたしの一歩先を読んで立ち回り、あたしの猛攻を受け流し続ける鎧騎士。

それは、相手の力量ゆえか、それともあたしがこのじやじや馬たる妖刀を使いこなせていないだけか。

あたしの剣戟は、甲冑野郎に殆ど届いていない。

最悪だ。

あたしは、眼の前の相手にのまれ、そして、この妖刀にさえのまれ、拳句の果てにこの勝負自体にのまれていたのだった。

改めて、刀を握るあたしの両手が微かに震え始める。

これが、ただの武者震いであればどれだけ良かつた事か…。

恐怖が徐々にあたしを支配していく。

少なくとも勢いだけは勝っていたあたしの剣戟だったが、それすら押され始める。

こんな時に限つて、いや、こんな時だからこそなのだろう。

あたしの脳裏に、かつてこの妖刀を初めて振るった時の記憶…

この刀があの人の血に染まつた時の記憶が鮮明に蘇る。

……やめろ……やめてくれ……あたしは……あたしは……。

戦闘中にそんなツマラネー事を考えていたのだ。あたしの左腕がヤツにぶつた切られたのも、ある意味当然の事だと言えた。

真っ白の空間に、突如として咲いた紅い華。

静寂の空間に、突如として響き渡つたあたしの断末魔。

あたしは、体を紅く染め上げながら、尚も妖刀を振り上げる。

たかだが腕一本もがれたくらいで、あたしはびっこを手放したりしない。

首無し騎士は、そんなあたしの一撃を軽々と受け止め、代わりにあたしの左足を奪つていった。

再び、白の空間に紅い華を添えるあたし。

左足の膝から下を失つたあたしは、バランスを失い、その場で片膝をつく。

たかだが足一本失つたくらいで、あたしはびっこから逃げたりしない。

それでも、甲冑の攻撃は終わらない。
更なる一撃加えるため、甲冑騎士はあたしに向かってその黄金色に輝く剣を素早く降り下ろした。

……間一髪、その一撃をからうじて受け止めたあたし。が、それと同時にその輝きを増す騎士の剣。
つたく、最悪だ。こいつの黄金の剣は、あたしの妖刀と正反対の性質。このままだと……。

次の瞬間、あたしの妖刀「秋艶」は音もなく、折れた。

そして、そんな光景をまざまざと見せつけられたあたしの闘争心もまた、完膚なきまでにぶちのめされたのだった。

つまりは、終わりだ。 何もかも。 終わりだ。

あたしは、刀身の折れた秋艶をその場に放り投げ、目の前のデュラハンを見据える。

「…………どーやら、あたしの負けみてーだな。悔しいが完敗だ」
ぱつりとそう呟いたあたしは、その場で静かに眼を瞑った。

すまん、びーー。結局あたしは、最後まであんたを守り通す事が出来なかつた。

まあ、お前と関わりあいになつちまつた時点で、碌な最後になんねーだろうなとは思つちゃいたさ。

きっとあたしは、地獄逝きだろーな。 まず、間違いなく。

全てはあたしの力量のなさ故。

全てはあたしの慢心が招いた結果だ。悔いはないし、後悔はない。確かにないが、せめて……せめてお前が一人前になつた姿つてやつを、この眼で見てみたかつたぜ。

首の無い剣士は、あたしにトドメの一撃を加えるため、その剣を高く高く掲げ、そして……。

「だめ…………っ！」

そう叫びながら、あたしと剣士との間に割つて入つた人物。この空間には、あたしと剣士と、そしてもつ一人しかいない。つまりは、びーこである。

「駄目、駄目です。これ以上は駄目。だつて、だつて英子ちゃんが死んじやう。ねえ、お願ひです鎧さん、これ以上英子ちゃんを傷つけないで。私はどうなつてもいいから、英子ちゃんの命をとらないで！」

先程までと打つて变つて、その動きを急激に緩める騎士。そんなんびーと騎士との睨み合には、一体どれだけ続いたのだろう。

そしてとうとう、騎士はその場で再びびーこに膝まずづいたのだった。助かった？　いや、助けられたんだ。このあたしが。

「く、糞が、んな同情はいらねーんだよ」あたしは、びーこを払いのけ、再び騎士の前に這い出る。

「え、英子ちゃん、もう良いんです。もうやめてくださいー。」

そんなんびーこの必死の訴えを無視した私は言つ。

「よう、首無し野郎。あたしは、まだ、やれる」

首無し騎士は、そんなあたしの様子を黙つて傍観した後、再び、その剣を振り上げた。

パサツ。

ドサツでもバタンでもなく、パサツである。

首が落ちる音にしても、あたしが真つ二つになる音にしても、聊か軽すぎるその擬音。

いや、まあ、自分が死ぬ時なんてのは、案外こんなもんなのかもしれねーが。

徐々に薄れゆく意識の中、あたしがその空間で最後に見た光景は、あたしの切られたポニー テールを拾うデュラハンの姿だった。

気がつくとあたしは、とある部屋のとあるベッドに横たわっていた。

徐々に覚醒していくあたしの脳みそが、じーがびーのマンション、びーの部屋のびーのベッドであるということを理解した。あたしは、あるはずの無い左腕を動かし、何とか起き上がると、あるはずの無い左足を撫でた。

五体満足。

部屋の片隅にそっと置かれたあたしの秋艶も、やはり、折られてはいない。

あの悪夢のような出来事がまるで夢であつたかのよう、あたしは五体満足のまま、びーこの部屋にいた。

ただ、そんなあたしの短くなつた髪型がだけが、
実だったと言うことを如実に物語つていた。

つまり、あたしは、負けたのだ。それも惨敗。完膚なきまでに叩きのめされたのだ。

その上、こんな風に情けを掛けられて、惨めにも生き残っちゃった。生き恥を晒すよ。」

胸の中に、ドス黒く、そして冷たい感情がこみ上がつてくる。
「……畜生、ちくしょう、チクショウ」

「……畜生、ちくしょう、チクショウ！」

その時、何も言わずあたしの傍らに居てくれたびーこが、あたしの涙をそつとぬぐい、優しくそして力強く抱きしめてきた。

それでもびーこは何も言わない。

ただ微笑を浮かべるのみ。

びーこはその細い腕により一層の力を込め、あたしを強く強く抱きしめるのだった。

END

第十一話 「大人とは、全てを包み出来る心を持った子供」

第十二話 「大人とは、全てを包み出来る心を持った子供」

例え、あたし達にどんな出来事が襲いかかるようと、あたし達がどんな目に逢おうと、世界はその歩みを止めない。

あの悪夢のような首無し騎士との一戦から一夜明けた今日、あたしはいつも通りびーこを学園へと送り届けた後、そのまま真っ直ぐにマンションへと帰ってきた。

今日のびーこは、学園で泊り込みの実践授業。
学園が学園だけに、魑魅魍魎の類が活発になる夜の時間にしか出来ない事も多々あるためだ。

ついでに、翌日の帰りの送迎も学園側が行ってくれるらしい。つまり、いつものようにあたしが出向く手間もないって事。

加えて、今日の予定は突然の白紙。

何件か糞メンドクセー仕事を予定したものの、明らかに意図的に、一方的にキャンセルされたためだ。

……いや、この期に及んで深く考えるのは辞めよう。
つーか、今は何も考えたくない。

あたしは、自室へと戻るとベッドに横たわり、ぼーっと天井を見上げた。

真っ白の天井は、どことなく例の白い空間を想起させた。

惨めな敗北。

完璧なる敗北。

敗北びじりか、勝負にすらならなかつたといふ事実。
その上相手に情けをかけられ、生き恥を晒しながら、あたしは今、
じるじる。

あたしは、びーこを護る事が出来なかつた。

不甲斐ない自分。
口先だけの自分。
弱く脆い自分。

そんな自分が嫌になる。

自己嫌悪のリピート。
どん底ブルー。

折角のオフだつてのに、何をやつても手につかない。つたぐ、あ
たしらしくねーよな、本当に。

そういうえば、昨日あれからびーこと一緒に話をしていない。
今朝も、あたしたちがお互いに言葉を交わすことなく、学園へと
向かつた。

果たしてびーこは、今のあたしをどう思つているのだろう?
護るはずのびーこに、逆に護られる事になつてしまつた情けない昨
日のあたし。

ボディーガードとしちゃ、勿論失格だらつ。
その上、折角びーこに助けられたつてのこ、みすみす殺されにい
くようなマネまでしちまつて…。

あいつは、そんなあたしをどう思つているのだろう?

あたしが、何百回目かのそんな思考のリピートを繰り返していると、唐突にあたしの部屋のドアが開いた。

「ただいまー、英子ちゃんは？ びーー？」

「ちよ、お前、随分早いじゃねーか。泊まりでの実践授業つてやはもう終わつちまつたのか？」

「えー？ 何言つてるんですか英子ちゃん。時計を良く見てください」

言われた通り、あたしは部屋の片隅に置かれたデジタル時計に目を通す。

人間つてやつは、のまづ食わずに一歩も動かず、丸々一日を思考を巡らすだけに費やす事が出来る生き物らしい。

…………… どうやら、あたしの休日は、そんな思考のスパイラルだけで終わつてしまつていたようだ。

やれやれだ。本当に。

が、もう一つ、あたしの眼には驚愕の事実が映し出されていた。

「びーー、お前、その髪……」

「べ、別に英子ちゃんのために短くしたんじゃないんですからね！ なーんぢやつて。どうですか？ これ、似合つてますか？ 英子ちゃんとお揃いのショートカットですよ」

びーこは、長く美しかったその銀髪を、ぱつぱつと短く切つてしまつていた。

どうやらあたしは、この能天氣娘に随分と氣を使われてしまったらしい。

それほどまでに、あたしは惨めな姿をしていたのだつ。それとも、こいつなりの優しさつてか？ 愛情表現？

： つたぐ、バカヤロウが。

あたしは、思わずにはやけてしまい、そつなく元を必死に隠しながら、照れ隠し気味に叫ぶ。

「おいびーー」。夕飯はラーメンでも食いに行こうぜ、今のあたしはかつてないほどに腹が減ってるんだ。今日は特別だ、おかわりもアリだぜ」

「やたー！ 私、ところが良いです。と、ん、こ、つ、 とんこつせーん」

そんな笑顔を見て、あたしはふと思つ。

もう一度と負けるわけにはいかねーと。

そして、もう一度とこの笑顔を手放さないと、そう固く心に誓つあたしなのだった。

END

第十二話 「家に帰るまでが遠足」

第十二話「家に帰るまでが遠足」

びーーの実地訓練の日々は続く。

今回は、そう、山篭りだ。

とある山で、様々な道具や荷物をもつての強行軍。まるで、軍隊か何かみてーなこの訓練方法。普通のミッション系お嬢様学園なら、天地がひっくり返つてもやらねーであろうーの訓練。

だが、びーーの通う学園は、所謂普通とはちよつと言ひがたい場所。

彼女らは、断じて普通の学生なんかじゃない。

だからこそ、彼女らのことってば、こいつ馬鹿みたいなやり方での体力づくりってやつも実は重要だつたりする。

それは勿論、あのもやしつ子にも言える事。

「英子ちゃん、私、もう一歩もあるけましぇーん」

「つむせー、たかだか山んなかをちよつと歩こたぐらこでへばつてんじやねーよ」

「だ、だつてえー」

「だつてじやない。いいか？ あたしなんてなあー、あの糞じじいの修行とこつ名の憂さ晴らしで」

「もう！ 英子ちゃんの話なんて聞いてません！」

「何だよ、思つたより元気が残つてるじやねーか。それだけ文句が言えれば、家まであつという間だぜ？」

今回は学園から聊か離れての訓練ついことで、あたしはお守役として朝からびーーに付き合ひ、別に義務でもないのに同じ訓練を受

け、こうして現地解散による帰りの送迎をもこなしてくる。よーするに、びーこによるびーこのためのびーこにつくすー日つてわけだ。

まあ、あたしとしては勿論これも立派な仕事の一環だし、この間は図らずもびーこに借りを作つちまつたわけだから、何の文句もねーわけだが。

だが、そんな仕事熱心なあたしと違つて、当のびーこ本人は先程から不満たらたら。

やれやれ、こいつは何にもわかつちゃいねー。重要な事を理解していなーいのだ。

「びーーー、遠足つてヤツはな…… 家に帰るまでが遠足なんだよー！」

「何を言つてるんですか英子ちゃんは。そもそもこれは遠足じやないですし、訓練だつてもつ終わつたじやないですかー」

「いや、だからな？ ……まあいいや。何だかあたしも疲れた。とつとと帰るつ

あたし達は黙々と山を降りる。

びーこのその雪のよつな真つ白の顔には、疲労の色が如実に現れていた。

というか、あれだけ山を歩き回つたくせに、日焼けの一ツもしてねーのが不思議だ。

荒い呼吸に大粒の汗。

流石にちよつと無理をさせすぎただろつか？

ただでさえ体力が皆無なびーこが、曲がりなりにもあの強行軍をこなしたのだ。

せめて帰りぐらつは楽をさせてやるべきなのだろつか？

そんな事を自然に考えてしまつあたしは、やはり過保護になりすぎなのだろうか？

いの間の一件もあつてか、あたしの中の基準つてヤツがイマイチ曖昧になつてきちまつてる。

「一むイカンな。

あたしが、うんうんとそんな思考の迷路を彷徨つてゐる最中、びーじがスツトンキョーな声を上げる。

「英子ちゃん、あちらの森林地帯を突つ切りましょー！ 私、知つてます。あちらが近道なのです」

間違いない。

やはり、あたしはびーじに對して甘くなつちまつていたらしく、だつてそつだろ？

普通に考えて、そんな今思ついたような、いつものびーじの考え無しの提案に従えばどうなるか？ どんな結末が待つてゐるか？ そんなの、火を見るより明らかだつたし、普段のあたしなら、そんな審議の余地もないよつた糞みたいな提案、鼻で笑つて却下している筈なのだから。

…………だからじや、今、あたし達がこつして森の中ですつかり迷子になつちまつたつていう事実も、きっとあたしの緩みきつた脳ミソが招いた結果なのだわ！

「英子ちゃん、じい、どこなんじょつか？」

あたしは、頭を抱えていた。ああ、あたしは何て馬鹿だつたんだ。やはりあたしは、びーじの優しいおねーさんでも、氣のいい同居人でもなく、ヤツの鬼教官であるべきだつたんだ。

くつや。

あたしつて、本当バカ。

「まあ、じつはちまつたもんは仕方ね。後悔なら帰つてからでも十分出来るからな。おい、びーこ、コンパスと地図をだしな」

「え？ あ、あのー、その、てつくりもつ必要ないかと思いまして、訓練終了の折に、置いてきてしまいまして…」

不幸つてのは、どうしてこいつも重つちまつものなんだろ？

あー、早くも頭痛がしてきやがつた。

「家に帰るまでが遠足だつて、あたしはあれほど言ったのに」

「なるほどー、さつすが英子ちゃん。こいつ意味だつたのですね？ 私、また一つ勉強になりました！」

「そりや良かつた。本当に良かつた」

待て待てあたし。やけになるな。

こんな時だからこそ冷静になる必要がある。仮にもあたしはびこの保護者だ。

これまでだつてもつと酷い田代をさん逢つてきたじゃねーか。これくらいなんだつてんだ。

一先ずあたしは、あたしとびーこの荷物を確認してみる事にした。

…… 食料は、びーこのおやつのチョコが少々。加えてあたしのケロリーメイトが少々。500mlペットのミネラルウォーターが半分。

ここは森。こぞとなつたら現地調達が出来なくも無いはず。

地図やコンパスの類は無い。ケータイは持ち込み禁止につき、部屋に置いて来ちまつた。まあ、あつたところでビーセ圈外だつたう。

後は、びーこの着替えくらい。元々、最小限の装備で最大限の重荷を持つての山歩きつてコンセプトだつたからな。

それに、いくら現地解散つていつても、ほぼ一本道で、数刻たらずで山から抜け出せるはずだつたのだ。

迷つたり迷子になるような要素など何もなかつたはずなのだ。びーこの、性格と体质を除いては。

あたし達は、互いに言葉を交わすことなく、重苦しい雰囲気のなか歩いた。そこには出口があると信じて。

こんな時ヘンゼルとグレーテルだったら、パンの屑でも落として目印にして歩いたのだろうが、生憎あたし達はそんな上等なものを持ち合わせてはいない。

あたしは、変わりに目印になりそうな木や分岐点になりそうな場所にナイフで傷をつけながら歩く。

そうして何本かの木に傷をつけようとした瞬間、あたしの中の疑惑は確信へと形を変えた。

「可笑しい。もう傷がついてる。あたしのナイフでつけた傷がついてやがる。あっちの木にも、この木にも……」

「英子ちゃん英子ちゃん、私、この道、さっきも通った気がします」
その木には、既に何本ものあたしのナイフによる傷がつけられていた。つまりこの場所を通りるのは1回や2回どころではないってこと。

「同じ場所をぐるぐる回ってるってのか？ 異常じゃない回数を？」

「う、うえええええーん、英子ちゃん私たち完全に迷子だよー。疲れたよー」

びーこの泣き声があたしの焦燥感を駆り立てる。
落ち着け、冷静になれ、クールになるんだ。

シャレにならねーぜ、よりにもよって迷子になつて遭難死なんて。

いつもみたいな怪異や魑魅魍魎、超常現象の類なら荒業や力技で何とかなるつてのに、よりもよつて森で迷つて遭難だと？

笑うに笑えねーよ。

……いや、待てよ？

これは本当にただの迷子か？

思い出せ、こうなったのはそもそも誰の言葉が原因だった？

そうだ、勿論びーこだ。

あいつが関わる以上、これはただの迷子なんかじゃない。森はただの森ではなくなり、遭難はただの遭難で無くなる。

もしもこの迷子が、意図的に何ものかによつて引き起こされたものだとしたら？

びーこに魅入られた何ものかによつて引き起こされたもの、もしくはびーこに魅入られたこの森事体が引き起こしたものだとすれば？つまり、何らかのサインや、その原因となる何かが潜んでいるはずなのだ。

あたし達をニヤニヤ顔で見ている何かがいるはずなのだ。

あたしがそんな風に思考を巡らせていたその瞬間、前方の木陰からガサツという物音が聞こえてくる。

瞬時に、その発生源の方へ顔を向けるあたしとびーこ。そんなあたし達の目に飛び込んできたもの、それは…。

「クマ…………」

気がつけば、あたしとびーこは同時にそつと、全力疾走を開始したのだった。

END

第十四話 「森のクマさんはストーカー」

第十四話 「森のクマさんはストーカー」

「まつてクマー、オトシモノクマー」

カタコトの日本語でそう言いつつ、まるでプリンターのようなフォームであたし達を追いかけてくるクマ。

疑う余地も無い、遭難の原因は間違いなくあれだ。

鋭い牙と鋭い爪を持つ日本最大の猛禽類のあのクマ?

いやいや、そこそこだ。断じてね。

駄目だ、このままだと追いつかれる。

ただでさえここは森の中。地の利はクマ野郎に分がある。加えて、限界寸前のびーこの体力はもう長くは持ちそうにねえ。というか既に、今にも倒れそうなふらふらとした足取り。

は
あ。

つたぐ、しょうがねーな。
こうなつたら手は一つ。

「びーーー、お前は先にいけ。ここはあたしが何としてやる」と、まあ、びーこの手前格好をつけてみたものの、相手はクマで

ある。

しかもどう考へても普通とは言へがたいクマ。

白邊じやねーが普通のツキノワグマ程度となら、何度かやりあつた事がある。いや、まあ、思い出したくも無い負の歴史つてやつだが。

さて、いのクマさんは果たしてどう出る？

「クマ野郎。相撲でもしようつてか？」

その口元を真つ赤に染め、こちらに迫つてくるクマ。

目は完全に充血しちまつてゐし、呼吸も荒い。

明らかに、さつきまでお食事中だったといふことが分かる。

それが人間の血でないこと祈りながらその場で足を止め、あたしは、コンバットナイフを構えた。

が、クマはそんなあたしを華麗にスルーして、そのままびーこを追う。

… どうやら、あたしのことなどはながら眼中に無いらしく。

「いの口つコングマが！」

そう愚痴りつつ、あたしもびーことクマを追う。

「いやああああ、いーなーいーでーべーだーせーーーー

「ハアハア、まつクマー」

「待てやーてめーらーーー」

びーこを先頭に森の中を爆走するあたし達。クマに追いかけられる人間と人間に追いかけられるクマ。何ともシユールな光景だ。

だが、こんな状況がいつまでも続くはずが無く。

「も、もう駄目です。わ、わた、私、もう一步も歩けましょーん

「ぐ、ぐ、クマママ」

びーこがその場で倒れこむと同時に、クマもまたその歩みを止め

た。

そして、そんな一人と一匹によつやく追いつくあたし。

「はあ、はあ、おこひりこなクマ。覚悟はできんだらうな？」

「な、なんのクマー？」

あたしは、再びナイフを構えびーーの前に立ちはだかりながら言う。

「決まつてんだろ、あたしに道される覚悟だよ」

そんなあたしの氣迫に対し、震えながら一歩下がるクマ。

何だ？ 戰意は無いつてのか？ そんな図体して？

「待つてください英子ちゃん。この子、もしかしたら悪いくそやんじやないのかもしません」

びーーのそんな言葉に対し、首を激しく上下に降り、肯定を示す

クマ野郎。

「おいおいクマに良いも悪いもねーだろ。それともびーー、お前にはこいつがふーさんにでも見えるのか？ 好物がハチミツに見えるか？」

相変わらず、眼の前のクマの口元、牙、爪は真っ赤に染まっている。とてもじゃないがハチミツを啜つて生きている類には見えない。そんなあたし達のやり取りに対し、クマ野郎がぽつりと一言。

「コレは、とまとケチャップクマー」

「うあい！ 紛らわしいんだよ、つーか何でクマがトマトケチャップ啜つてんだよ！ 大人しく鮭でも咥えてやがれ」

思わず我を忘れて突っ込んだが、やっぱりこいつは普通じやないつてことが分かった。

「でもでも、やうこえまきせじのクマさんは落し物がどうとか言つてました」

ああ、そう言えれば確かになんことを言つていたかもしない。

あの時は逃げるのに必死で聞く余裕も無かつたが。

「で、びーー。お前、何か落としたのか？ 少なくともあたしは落としてねーぞ」

「い、いえ。私も特には、何も微妙な沈黙があたし達の間に流れる。

が、そんな空氣を破つたのは、他でもないクマ自身だった。「タシカニ、おとしたクマー。ほへ、愛、とこう名のバクゲキを

先程より、せらにて重苦しい沈黙があたし達に襲いかかる。ひたすらにドヤ顔のクマ。

何が何だか分からず、茫然自失状態のびーー。

血管をいくつも浮かび上がらせ、ナイフを逆手に持ちかえるあたし。

「ああ、確かに落としたかもしねーな。ただし、てめーが、その粗末な命を、な」

問答無用で、眼の前のクマを肉塊へと変えよつとしたその時、びーーが躊躇氣味に言つ。

「ストップ。ちょ、ちょっと待つてください英子ちゃん。やっぱ私ははどうしても、その子が悪いクマには見えないんです」「悪いクマには見えないだと？ 少なくともあたしには、最低に頭の悪いクマに見えるけどな」

びーーはじーっとあたしの顔を見つめる。

その目は、必死に何かを訴えかける。

……びーーは頑固だ。これ以上あたしが何を言つたって無駄だ
るわ。

これだからお嬢様つてやつは。

「わーったよ。あたしはあんたのお守役だ。びーーがそれで良いつていうんなら、もう何も言わない」

「ありがとう」びーーは、英子ちゃん

あたしが後ろに引下つた後、びーーはこはこつゝつと涼しげな笑顔を携えながら、クマ野郎を見つめる。

「オジョウサン、ぼく、キミに一目ぼれしたクマー。白い肌ー、ギ

ンイロの髪。食べちゃいたいくらいにスキマーツ

あ
あ。

クマから畠田されるひーー

いや、というが待てよ？

「お前、アレか？」
びーこの才能ってか能力に魅入られたんじや無
くじ、「お前、アレか？」の見と目こ惚れちまつたのか？

「カカドー、アーヴィングの領地へいたカア。

高だよ。クマの癖に、人間に惚れちまつたのか？　しかもよりも

「五」

「もう！ 失礼ですよ英子ちゃん！ それはそうと、あの、ありがとうござりますクマさん。でも、私は英子ちゃんみたいに強いかったが好きなんです。『めんね？』

びーこの言葉を受け、クマが恐る恐るあたしの顔を覗く。

今夜は熊鍋だ

猛烈な勢いで首を左右に振るクマ野郎。つたぐ、クマのくせに度胸がねーな。まあ、びーーに告白する辺り、怖いもの知らうではないんだが。

けだ。

その場で項垂れる妙に人間くさいクマ。

そんな態度に呼応するかのよう』、森が本来の姿を取り戻した。

近くで迷つてたのか…。

「さて、勝負ありだな。つてもあたしは何にもしてねーが。おい、
帰るぞびー。」

「はい。それではクマさん。お元気で」

そんなあたし達の背後から、あきらめないクマーなどといつせり

フが聞こえてきたのは、あたしの気のせいではないはず。

あたしは、体力の限界に陥つたびー」を背負いながら帰り道を往く。

「しかしなあ、まさかクマに告白されるとはな。いつそ付き合つてしまえば良かつたのに。案外いいボディーガードになるかもしけねーぜ」

「酷いです。幾ら私だつてせめて相手は人間が良いですもん」

「ああ、さつきの話で言つどびー」はあたしが好きなんだつけ?」

「もうー、や、先程の話は例えです。あくまで例え。その、英子ちゃんみたいに強い殿方が良いつて言つただけですもん!」

「あー。はいはい」

「…… 英子ちゃんの、バカ」

いつして、あたしとびー」の長い遠足が終わつた。

訓練に付き合つての山歩き、森林探索、加えてクマとの追いかけつー」。

どう考へても、明日は筋肉痛だらつた。

まつたく、やれやれだぜ。

END

第十五話 「贈り物選びは慎重に」

第十五話 「贈り物選びは慎重に」

「英子ちゃん英子ちゃん、お届けものみたいですね」

そう言つて一つの怪しげな小包を抱えながら、びーこは嬉しそうにあたしの元へ駆け寄つて來た。

どうやら、さつきのインターホンは宅配業者のおつかやんによるものだつたらしい。

「んで、誰から何が届いたんだ?」この時期だからお中元お歳暮の類じやねーだろ?」

「名無しさんからですよ、英子ちゃん」

「ななし? そんな知り合いあたしに居たかな? いや、それともびーこの知り合いか?」

「お名前もご住所も書かれてませんねー、これ」

待て待て、それは限りなく厄介事の匂いがする。

「おいおいおい、待て。それって差出人不明つてやつじやねーかよ!」

「ああ、それなら私も知つてます。ニュースやドラマで良く犯人が一方的にものを送りつけるアレですね」

「そうだ。つーかそこまで分かつてんなりまつまでもねーと思つが、いいか? 開けるなよ? ゼええええつたいて開けるなよ?」

目を輝かせて小包を見つめるびーこに対し、あたしは早々に釘を刺した。

これはデジャヴでも何でもない。以前のタイムカプセルの時と同じパターンだ。

が、そんなびーこが大人しくあたしの言葉に耳を傾けるはずも無

く。

「ちっちっち。それはむしろ逆効果つてものです。開けるなど言わ
れれば開けたくなるのが人の業」

「ちょ、待て、待てびーこ！」

「と、言つわけでオープンざボーックス」

あたしの忠告も虚しく、びりびりとその包装を破り、ついに、び
ーこはそのブラックボックスを開けた。

その瞬間、カチつという明らかに異質な、まるで何かのスイッチ
が入ったような、そんな音が部屋内に響きわたった。

そして中から出てきたもの、それは…… 一つの林檎だった。

「あつ。林檎ですよ、英子ちゃん。私、林檎大好きなんです
この期に及んで何を呑気な事を……。

これがただの林檎であるはずがない。

だつてそうだろ？

普通の林檎は、カチッカチッ何て電子音を奏でないし、そもそも
配線が伸びているはずがない。

だったら、目の前のこの物体は一体何なのか？

「目覚まし時計でしょうか？」

「アホか！ 爆弾だろ、爆弾！」

「ば、ば、ばば、ばばばば、ばくだん？」

そう言つて噉みまくつたびーこの手足は、既に震え始めていた。

「つおい！ 落ち着けびーー。落とすな、絶対に落とすんじやねー
ぞ、その箱。今度という今度は振りでもなんでもねーからな？」

あたしのそんな必死の訴えに対して、顔を真っ青に染めながら激
しく上下に頷くびー。

やれやれ、いつもこれくらい素直だと、子守としちゃ楽なんだがな。

びーーの腕に支えられ小刻みに揺れるその箱の中身を、改めてそつーっと覗くあたし。

一見ただの林檎。

だが何度見直しても、底からカラフルな赤と青の二種類の配線が伸びているし、カウントダウンの「デジタル表示までついている始末。

林檎には「丁寧に觸體マークまで描かれている。

加えて綺麗な筆記体で愛しの白雪姫へ、なんて書かれやがるから始末に負えねー。

ふざけんな！ とんだ毒林檎じゃねーかよ。

依然として、あたし達の部屋には不気味な「デジタル音」だけが響いている。

……落ち着け、あたし。いつもの要領でやれば間違いない筈。「びーー」。自慢じゃねーが、爆弾の解体は何度かやらされたことがある。まあ、見てな

あたしは、ポケットからいつものナイフを取り出し、静かに解体作業に取り掛かった。

爆弾ってやつは、作成者の癖や思考ってやつが如実に表れる代物だ。むしろ、意図的に思いのたけとこいつを爆弾に詰め込んでくる輩もいる。

そう、今回の一の爆弾の作成者によつて。

「あたしも専門家じゃねーから、そこまで詳しいわけじゃねーが。そんないたしにも分かる。この爆弾の製作者は、完全にあたし達を馬鹿にしてやがる」

「ど、どこのことですか？」

びーこが青白い顔で恐る恐る言った。

「見ろよ、この2本の配線。これみよがしに伸びたこの配線。テレビや映画なんかで使い古されてカビが生えたネタつてやつだな。どつちかが本物でどつちかがフェイク」

つまり、正解を切れば爆弾が止まるが、ハズレを切ると…。

まさか、こんなベタ展開にあたしが巻き込まれるとは思いもよらなかつた。つーか、出来れば一生したくなかったよ、こんな体験。単純な構造だからこそ、最後は一択。

映画とかだと、じつじつときラッキーカラーとか、好きな色を選んだりするんだよな。

「あー、一応聞いておくが、びーこは赤と青どつちが好きだ？」
「し、しし白です。英子ちゃん」

「何でだよ！ 聴け、頼むからあたしの話を聞いてくれ。つーか、お前、あさつての方向むいてんやねーよ。現実を直視しやがれ！」
「え、ええええ、英子ちゃん、私、これ以上、持つて、い、られな
い」

大粒の汗を流しながら、力チ力チと歯を鳴し涙目のびーこ。つーか、ターミネーターかよ！

「はいはいはい、分かつた。分かつたから、一先ずその箱を置け。な？」

びーこは、再び激しく首を上下させながら爆弾箱をそつとテーブルの上に置いた。

「さて、そういうふうにタイムマシンが後5分と迫つちまたわけだが」

……
「じつちや何だが、ぶっちゃけメンドクサくなつてきたあたしは、半ば投げやりにそう答えた。

「英子ちゃん、そういえば私、急に用事を思い出しました！ と言
う事で私、帰りますねー」

「待てやコラ！ どこに帰るんだよ！ ここがてめーん家だろーが

よ

「あ、あいどんの一」

悪く思わんでくれよ、びーー」。

何といつても今日は、お前に頑張つてもらわなきゃならねーんだからな。

「びーー」。ぶつちやけあたしもお手上げ状態だ。だから、あたしはあんたに賭ける事にした。あんたの天性の才能、カンつてやつに賭けて見ることにした。つまりな、青か赤か、どっちを切るのかお前が選べ」

そんなあたしの言葉がよほどショックだったのか、口をあんぐりと開けたまま固まつちまつたびーー」。

「へいへい、びーー」。びーーやら固まつてる時間もねーみたいだぜ。ほら、見てみろよ」

林檎のデジタル表示、カウントダウンは残り3分。まつたぐ、やれやれだぜ。

「え、えええ、えええ、英子ちゃんは、その、び、び、びどつちだと思ひます?」

「知らん。あたしの命はびーーの選択に預けたんだ。あたしの役割はもうびーーの選んだほうを切るだけだ」

「そ、そんnaー」

「おつと、そんnaもだつても禁止だぜ。さあ、時間がねーんだ。とつとと覚悟を決めな。…あたし達が爆死しちまう前にな」

そのぱっちらりとした目を白黒させながら、びーーにはひたすらに林檎爆弾とあたしの顔を交互に見つめていた。

残り1分。

頼むぜびーー。お前の可能性を見せてくれ。

残り30秒。

びーーの視線が、やがて爆弾の配線の前で止まつた。

「分かりました。……青です。英子ちゃん、青を切つてください」
青。空の色。海の色。自由の色。そして、あたしの好きな色。
「…………良いんだな？ さて、それじゃあいくぜお嬢様？」
「いぐりと一度だけ深く頷いたびーー」。

その表情は、先程までの怯えと焦燥の入り混じった顔などではなく、何かを決意した強さに満ちた顔だった。

何だ、やれば出来るんじゃねーか、そんな表情も。

あたしは、ニヤリとその口元を歪めながら、手にしたナイフで一気に青のコードを切った。

その瞬間、林檎のカウントダウン表示とその不気味な電子音が一様に消え去る。

「おめでとーさん、解除成功だ。やつたなびーー」。お前はやれば出来る子だと信じてたぜ」「

やれやれ、疲れた。無駄に疲れた。

こんな事に付き合わされたのは、かつてはつづきにして欲しいもんだぜ。

だがまあ、上手くいって良かつた。

この後の展開は……

あたしがそんな思考を巡らせていた瞬間、また別の電子音がマンション内にこだまする。

一瞬、びーーが驚きのあまり数センチほど飛び上がったものの、すぐにそれが己の携帯電話から発せられているものだと気づき、ポケットを弄のだった。

「はい……え、ダディ？ はい？ た、誕生日？ サプライズ？」

もう一、ダディのばかばかばかばかー」

そう言って、携帯電話を放り投げ、膨れ面であたしの前に立ちは

だからびーー。)

やれやれ、本当の地獄はこれからつか。

「つまりは、そう言ひつけた。誕生日おめでとさんびーー。」お前幾つになつたんだつけ？ まあいや、で、どうだつた。サプライズプレゼントは？ あたしの迫真の演技つてやつは？」

「そんなの知りません！ もう、ダディはともかく英子ちゃんまでグルだつたなんて信じられません！ 私、本当に怖かつたんですからね！」

「気持ちは分かるが、そう拗ねるな。グルというか、あんたのバカ親、失礼、親バカな両親に頼まれてこんな三文芝居をやつたのは事実だ。まあ、あたしとしてもあんまり乗り気じやなかつたんだがな： プрезентやらサプライズ云々はともかくとして、あたしとしては、そろそろびーーに自らの手で選択する事、決断する事を経験してほしかつたのだ。そのためには良い機会だとそう思つたつてわけだ」

先程までの青白い顔はどこへやら、その顔を怒りで真つ赤に染め、びーこは尚もあたしを睨み続ける。

「ついでに白状すれば、あたしはいつも見えて花も恥らう乙女だぜ？ 当然、爆弾の解体なんてやつことは無い。むしろあつてたまるかよ。それともう一つ、ここに届く荷物はびーこのバカ親、失礼、親バカな両親の手で一度検閲を受けてんだぜ？ 知らなかつたのか？ 確かにびーこのお守はある程度あたしに一任されちやいるが、お前は常に両親にも護られてるつてことさ。だからよ、爆弾なんか届くはずがねーんだよ、このマンションには、最初つからな

あたしが喋り終えると、びーこは大きな溜息をついた後、今度は満面の笑顔を浮かべながら言つ。

「はあ、全く、どうして私の両親はこつもお茶目なんでしょうか？ でもいいです。確かに、いつまでも英子ちゃんに頼りっぱなしの自分から卒業しなきやと思つていきましたから

「へえ？ 言いつじやねーか

「それに、英子ちゃんのお芝居なんて滅多に見られるものではありませんし。ふふふ、英子ちゃんつてば、演劇の才能もあるんじやないですか？」

「……忘れる。そのことについては、今すぐ忘れて良い。つと、そんな事言つてる場合じやなかつた。ほら、行くぜお嬢様。両親がお待ちかねだ。本家でお前の誕生日パーティーがあるんだとさ」

「はい！ でもダーティとは暫く口をきませんからね、私

あーいら、『愁傷様』。んなことしたらあの親父さん、絶対泣くだらうな……。

そんな事を考えながら、あたし達は揃つて部屋を出たのだった。

END

第十六話 「人に夢と書いて墓無い」

第十六話 「人に夢と書いて墓無い」

可笑しい。この状況はどう考えたって可笑しい。

たまらなく、嫌な予感がする。むしろ嫌な予感しかしねー。

今日は日曜日。

今の時刻は午前11時を少し回ったところ。

休日のそんな気だるい空氣の中、あたしは、リビングの時計を眺めながら大きな溜息を漏らした。

ガキつてのは、どういっわけか休日はいつもより早く起きたりする。言わずもがな、びーこもその一人。「多分に漏れずその一人なのだ。

いつもなら、一日酔いでグロッキーなあたしをお構い無しで朝の6時あたりに叩き起こしたりするびーこ。

早起きは三文の得だと喚きながら、あたしをベッドから引きずり落とす筈なのだ。

むしろ三文くらいの得なら、あたしは一秒でも長く寝ていいたい。つーか、あいつは知らないのさ。

その諺は元々、早起きしたって三文ぽっちの得にしかならねーから大人しく寝てろ、って意味だと叫つことを。

少々話が脱線しちまつたが、今、あたしはリビングにいる。

いつもの喧騒からは想像も出来ねーくらいに静まり返ったマンシ

ヨン内。

びーこが未だに起きて来ない。

たつたそれだけの事実が、この平穏と静寂を生み出している。

平穏、静寂。

あたしたちの生活にはまるで縁のないこの言葉。
手を伸ばしても決して届かぬこの言葉。

それが、今、あたしの手の中にある。

……おっと、感傷に浸つてゐる場合じゃねーな。

柄じやねーんだよ。こんなのはや。

それに、そろそろ偽りの静寂つてやつにも飽きてきた頃合だ。
やつぱりあたし達にお似合いのは、こんな静寂よつも、誰かさ
んの笑い声や騒ぎ声に溢れた、賑やかな日常つてやつりしへ。

つたく、しょーがねーな。

あたしは、我らが眠り姫を叩き起すため、彼女の部屋へと向かつ
た。

いつして実際部屋の前に立つてみても、やはり物音や生活音の類
は聞こえてこない。

と、なると、やはつやつこつこつなのだらう。

あたしは躊躇することなくびーこの部屋のドアを開けた。勿論、
ノックなどしない。

そんなあたしの目に飛び込んできたのは、ベッドの上で眠るびー

「」と…… 一匹のおぞましい猿だった。

猿。そう、人のコメを食つていうアレだ。

何だよ、身構えた割には何ともちんけな相手じゃねーか。

：いや、待て、果たして本当にそつか？

猿程度の下級の魍魎の類なら、あたしは何度も葬つてきた。
だからこそ、その存在を、気配を感じ取れなかつたというのがま
ず可笑しい。

そして、何より可笑しいのが、猿は普通あんなに禍々しい雰囲気
をまとつてはいないという点だ。

あたしは猿といつより、何か全く別の存在……なのかもしれない。
何はともあれ、一先ずあたしは彼女の隣にぴつたりと居座つてい
る猿モドキと、びーこを引き離す事にした。

やつぱり、念のためにこいつを持つてきてよかつたぜ。

あたしは右手に携えた金属バッドに精神を集中させた。

「月は村雲花に風、月夜に提灯夏火鉢。： 今宵の我が月は、半月
青白い光に包まれたバッドを掲げながら、あたしは一気に猿モド
キに詰め寄る。

「うおら、猿だがバグだが知らねーが、ヒツヒビーこから離れや
がれ！」

直後、あたしのバッドから逃れるように、身を翻し、部屋の隅へ
と飛んだ猿。

はあ？ 飛んだだと？ あの猿が、こんなにも身軽で俊敏な動き
をするなんて聞いた事がない。

が、今はそれよりびーこだ。

これがただの猿なら、多少悪夢を見せられるくらいで済むが、残
念な事にこいつはただの猿じゃない。

あたしは慎重にびーーこを起す事にした。

「おー、びー」。起きる。目を覚ます。何をされた？　あいつ何をされた？

そう叫びながら、あたしはびーーの頬をぺちぺちと呶く。
それでもびーーは田を覚まさない。覚まそうとしない。

「お前、びーーーの何を喰いやがった？」

糞ッ。こんなことなら、もつと早く起きるべきだった。もつと早く様子を見るべきだった。何がお守だ。何がボディーガードだ。結局、成長してないのはびっこじやなくてあたしの方じやねーか。あたしが、そんな後悔の念に押し潰されそうになつたその時、びっこがゆつくりとその目を開けた。

分かるか？」

「英子ちゃん…」

あたしの目を見ながらぽつりとそう呟いたびーー。

思わず安堵するあたし。

だが、その安堵感も次のひーこの一言で、完膚なきまでに叩き潰される事になる。

「英子ちゃん、私を…
私を、殺してください」

その言葉を聞いたとき、あいつが何を喰つたのか？ あたしはそれを唐突に理解した。

あれは猶でなくノク

あいつは、性質の悪い残留思念、怨念の類だ。夢の果て。そんな人間のバグ。負の感情の塊。

あれは口火を食ひのり少なく、鬱をひき鬱をひく。

あいこは 英子の夢 一まりは 志 目標 指針 生きる希望を
喰つたのだ。

人は脆い生き物だ。

夢を失った瞬間、人は人で無くなる。

その夢が大きく、困難であるほどに、その反動は大きい。

あいつは、あの糞野郎は、びーーにーの世で一番言わせちゃなら
ねーセリフを言わせた。

あたしの中で、何かが音を立てて崩れたような、そんな気がした。

「色即是空、空即是色……死ね、この我楽多が」
気がつくとあたしは、そんなセリフを吐き捨てながら、右手に件
の妖刀、秋艶を携えてバグを見下ろしていた。
そして……。

「返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返
せ返せ返せかえせええええええええ……！」

四肢をぶつた切り、腹を裂き、腸を引きずり出し、顔を潰し、そ
の体を微塵に切り刻む。

あたしは、バグを十六の肉塊へと変えた。

「はあ、はあ、はあ、あ、返せ、びーーの、あたしの、夢を、返
せ。返してくれ」

あたしの眼の前の黒い肉塊は、その断末魔を上げる間もなく、あ
たしの前から粉微塵になつて消えた。消滅した。

それと同時にあたしの意識も遠ざかり、やがて、びーーのベッド
に寄りかかるようにして、その意識を完全に手放した。

「起きて下さい！ 英子ちゃん、英子ちゃんつてば。ほら、今何時

だと思つてゐるんですか！」

いつもの、誰かさんのやかましい声があたしの脳内に響き渡る。

つてことば、もつ朝か？ やれやれ、相変わらず起つての早起き

んだよ
ん?

次の瞬間、あたしの脳が一気に覚醒する。

「びーこー！ おま、お前、大丈夫か？ 気をしつかり持つんだぞ？」

頼むから、殺してくれなんて言わないでくれ

涙目でそう訴えかけるあたしに対して、びーこが一言。

「はー? 英子ちゃん、やっぱりお煙はもう少し控えめしちゃう?」

「あ？」

「そもそも時計を見てください。英子ちゃん。13時ですよ？ 13時。いくら何でもお寝坊がすぎます。もう、英子ちゃんが昨日、無理やりお酒なんて飲ませるから、私までお寝坊さんになっちゃったじゃないですかー。ふんふん」

ああ、この緊張感のないツラ。いつもびーこだ。間違いない。

そう言つて、柄にも無ぐびーに抱きついたし。

「ふえ？」

まあ、たまにはいつこう逆パターンもアリってことだ。

それにもしても、とんだ悪夢だつた。」いや絶対今夜ユメに出るな。

あつ、おい、そこの猿。あたしのこのコメ、ちゃつちゃつ
食つちまつてくれよ。え？ 駄目？ 駄目なの？
まったく、やれやれだぜ。

第十七話 「チビにも人権はある」

第十七話 「チビにも人権はある」

「英子ちゃん英子ちゃん、私、ペットを飼いたいです」

「何度も言つても駄目なもんは駄目だ。いい加減諦めやがれ」

先程から何度も繰り返されるやりとり。

業を煮やしたあたしは、無言でテレビの電源を切つた。

何やらびーこがビービーと喚き散らしているが、あたしは断固無視を決め込む。

今宵の我らがお嬢様は、びーこを「所望らしい」。まず間違いなく、さつきまであたしと一緒に見ていた動物番組の影響だらう。

何が「動物大好きペット天国100連発!」だ、コンチクショウ。こんなメンドクセー状況を招きやがつて。今更ながら腹が立つてきた。

： 勿論、動物達に罪はねーが。

「聞け、びーこ。あたし達がペットを飼えない理由は大きくわけて三つある。まず一つ目、このマンションは元々ペット禁止だ」
そんなあたしの言葉に対し、再びぶーぶーと一丁前にブーイングを垂れるびーこ。

「例えここがびーこの馬鹿親…失礼、親馬鹿な両親のマンションであつても、ルールはルール。他にも住人はいるんだ。当然だが、ルールは守らなくちゃな」

徐々に小さく、弱弱しくなるびーこのブーイング。あたしは、構

わざ話を続ける。

「二つ目。びーー」お前に動物の世話が出来るとは、到底思えない
こんなあたしの言葉に対し、再び勢いを取り戻すびーーのブーイ
ング。

つたぐ、五月蠅せーなー。むしろ、あたしに世話されてるくせに。
「三つ目。まあ、ぶつちやけこれが一番の理由なんだが：動物は、
悪靈や魍魎の類の媒介になりやすい。あんたのボディーガードとし
ちや、これは見過ごせない点だぜ。つーわけで、とつとと諦めて寝
る。寝ちまえ。寝てさつさと忘れちまえ」

「犬は？ 犬はどうですか？ 英子ちゃん」

「だーめ」

「猫は？」

「媒介としちゃ最も適した動物だな。当然だめ」

「じゃあじやあ、ハムスターは？ 小つちやくて可愛いですよ？」

「往生際が悪いぜ、びーー」潔く諦めな

と、いつわけで、一回の口は納得したよつな素振りを見せたび
ーー。

だが、それは大きな間違いだったと言つことを、あたしは身をも
つて知ることになる。

全てはこの翌日。

それは、あたしにとつての悪夢の幕開けである。

「なんじやーりやああああああああああああああーーー？」

その日、あたしは珍しくびーーに起こされたる前に、自分で目を覚
ました。

もしかすると、自分自身の身に起きたこの超常現象を無意識のう

ちに感じ取っていたのかもしれないし、たまたまだったのかもしれない。

理由はどうあれ、あたしは目を覚まし、眠い目をこすりながら周囲を一瞥した後、力の限りそう叫んでいた。

叫ばずにはいられなかつた。

起き抜けにも関わらず、だ。

眼の前に広がる「広大な光景」

どうやらあたしは、巨人の国にでも紛れ込んでしまつたらしい。

： だが、それが大きな間違いであるといふことにすぐに気づかされる。

何故なら、あたしのいるここは、巨人の国でも何でもなくて、どうみてもあたしとびーこのマンションだつたからだ。

一部、あたし以外の全てが巨大化しているといふ点を除いて。

待て、待てよ。あたし以外の…？

と言う事は、この場合、あたしが小さくなつちまつたつて方が自然な考え方なのか？

そもそもどうしてこうなつた？

昨日は確かびーことペットの話をして、その後一人で呑んで、そのままソファーで寝ちまつて、それから…。

あたしがうんうんと唸りながら逡巡しているうちに、眼の前に巨大な人影が迫る。

「あれー、英子ちゃん？ もしかして英子ちゃんですか？」

それが、巨大なびーこの姿であると気づくのに、数秒の時間を要した。いや、違うな、これが普通。普通サイズのびーこだ。

だが、おかげで確信がもてた。

やはり、認めたくねーが、どうやら… あたしが縮んじまつたつ

てのが正解らしい。

そんなあたしに対して、ひーこが投げかけてきた言葉。

「英子ちゃん、スルイ！ また一人でそんな楽しそうな事して！」
人の気も知らず、またすつとんきょーなセリフを吐きやがつて。

おがいがて好き好きでこんな格好しておれにり オ

巨大なソフナーの上で、巨人びーこを見つめながらじたばたと必死にそう訴えるあたし。

「何たよ」

なれしししししし

そばで、あたしをその巨大な掌の上に乗せるひー

ハムスター サイズってところだろう。

「いやいやめがれ！ あたしを薦めるのはやめろーー。」

だ、駄目だ。びこのやつ、あたしを見る用が完全に、ペットを

見るときのやれそのものになつちまつてやがる。

幸いにも今日は休日。びーーーの送り迎えをしなくていいってのは

手口の悪いがたがこの街おたじにとすり、いいがた

因つてやつは、一体何だ？

やいひー!。それでお前、また良からぬ事を考えたんじやねーだ

ג' ינואר

「おこりが、今動搖しませんが、

「だ、だつてえー」

びーこの妄想は時として、思いもよらない超常現象を招いちまう
だってじゃねーよ。泣きたいのはこっちだつづーの」

事がある。

未だその才能を制御し切れていないびーこ。その力。なんつーか、呆れると言つより何でもアリで神様じみてきちまつて。

これは一刻も早く一人前つてやつになつてもらわねーと、ここの先もつとんでもない事体が起きて可笑しくは無いつてわけだ。

：まあ、何はともあれ、今はこのペット化もとこ、チビ化を何とかしねーとな。

だが、そんなあたしの考えを知つてか知らずか、びーこは今のがたしを完璧にペットの類にしか見ていない。

「英子ちゃん英子ちゃん、エサ食べますか？」

「ぶつ飛ばすぞ！」

「じょ、冗談ですつてば。でもでも、そんな愛らしい姿で凄まれても、全然怖くないです。これなら普段出来ない事も、今なら出来るかも」

そう言つてにっこりと満面の笑みを浮かべるびーこ。

何というか、物凄く嫌な予感がする。むしろ嫌な予感しかしない。

「英子ちゃん、一緒にお風呂に入りましょう」

「はつはつは。悪いな、びーこ。あたしは朝風呂は入らねー主義なんだ」

だが、こんななりであたしの主張がまかり通るはずもなく。あたしの必死の抵抗も虚しく、あつとこく間に丸裸にされるあたし。最悪だ。

「ううううう、びーこ、よりもよつてびーこに脱がされた。裸にされた。犯された。もうお嫁にいけねーよ」

「はーい、一緒に入りましょうねー。キレイキレイしましょうねー」

ひょういと掴まれて、そのままバスルームにGOされるあたし。

眼の前には広大な海原もとい、湯船に張られたお湯。

元々無駄に広いバスルームだが、今日はまた一段と広く見える。
ぶくぶくと湧き上がるジェットバスが何とも凶悪だ。

「ふつふつふー。英子ちゃん、私が体を洗つてあげます」

「いや、別にいい。むしろ遠慮するぜ、あたしは」

「ふふーん、遠慮は無用です。今日は私に任せてくださいー。」
そう言つて巨大な泡泡スポンジをあたしに多い被せるびーー。
死ぬ。

びーーに、泡に、スポンジに殺される。

「や、やめろペタンコ！ まな板！」

「何ですか？ 自慢ですか英子ちゃん？ 私だつて、私だつて英子
ちゃんくらいの年齢になればきっと！」

完璧なる逆効果。

激しさを増すスポンジ。

全身を包み込む泡。

ぐつたりなあたし。

「ゆつくり肩まで浸かって一緒に100まで数えましょうねー」
見渡す限りの水面。あるのはびーーことあたしの体のみ。

昔、海のど真ん中で取り残されたダイバーの映画を見た事がある
が、あんな感じ。サメがいねーのがせめてもの救いだが。

あたしは、朦朧とする意識の中、溺れまいと必死にびーーの体に
しがみつぐ。

「あははは、英子ちゃんつてば、くすぐつたいです」

一軒微笑ましい光景に見えるだるーが、あたしは必死だ。一步間
違えば普通に死ねるレベルなんだと言うことを理解して欲しい。
この野郎。人の気も知らず暢気に笑いやがつて。

今日の説教は三倍増しだぞコラ。

だが、どんなに困難な状況にも終わりは来る。明けない夜が無い
ように。やまない雨が無いように。

あたしがびーこの掌の上でぐつたりしならがらバスルームから出た瞬間、びーこが唐突に叫び声を上げた。

「どうやら、休息の時間は与えてもらえないらしい。

「英子ちゃん英子ちゃん英子ちゃん。出ましたー、えええん。出ちゃいましたー」

のぼせる体に鞭打つて何とか顔を上げ状況を確認する。

眼の前には一匹のちんけな悪霊。

叫び声を上げるのも馬鹿馬鹿しい、そんな取るに足らない相手。勿論、いつもの大きさでの話だが。

「つたぐ、こんな真昼間つからご苦労なこったな。おーびーー。どうする？」あたしはどうすることも出来ねーぜ」

あたしの姿をこんなミニマムサイズにしちまた原因がびーこにあるとしたら、元に戻せるのもまた、びーこだけ。

加えて、こんな日の高いうちに魍魎の類が現れちまたのも、元を連れればあたしをこんな状態にしちまたのが原因。

「そ、そんなー。私、やっぱり可愛い英子ちゃんよりいつものカッコイイ英子ちゃんがイイですー。うええええん」

びーこのそんな言葉の直後、あたしの体が光に包まれる。

……どうやら元に戻れるらしい。

やれやれ、手間かけさせやがつて。こんな体験、もう一度どーりめんだぜ。

「ふん。いつもの大きさつてのは見晴らしがいいぜ」

あたしは、壁に飾られている一本のサーベルを手に取り構えた。

「きやーカッコイー。やっぱり英子ちゃんはこうでなくてはいけませんよね。でも、服はきちんと着てくださいね、英子ちゃん」

五月蠅せーよ。

そもそも誰のせいでこんな事になつたと思つてんだこいつは。

あたしが止まざる文句をぐつと堪えて、眼の前の雑魚にサーベルを突き立てる。

「びーーー、りれやるよ」

そんなリーマム騒動も落ち着いた頃、あたしがびーーにあるものを手渡した。

「知ってるか？ あたしがガキの頃に流行ったやつなんだが」

「うわー、たま つち！」

「ああ。これなら飼つても問題なし、だぜ。ま、ペットは無理だがこの辺で妥協してくれ」

「でも、英子ちゃんがたま つちを持つているだなんてちょっと意外ですね」

例えばPC上のデジタルペットとか、携帯型ゲーム機のペットゲームの類、はたまたアイボなんて手も考えてみたが、びーーにやっこが一番しつくつくるような気がしたのだ。

そういう、100%あたしの趣味。

つーか、わりーかよ、全シリーズ持つててわりーかよ。可愛いもの好きでわりーかよ。こんなデジタルペットに哀愁を感じいやわりーかよ。

そんなあたしの険しい表情に対し、びーーが慌てて一言。

「嘘嘘。一緒に育てましょうね？ 英子ちゃん

やつぱつペットを飼うなんて無理な話なのさ。

なんつっても、並みのペットよつよつせんせん間がかかるからな、びーーは。

本当、やれやれだぜ。

E
N
D

第十八話 「ダジャレ好きに悪い奴はいない」

第十八話 「ダジャレ好きに悪い奴はいない」

皆さんこんばんは、びーーーです。

誰ですか？ 今、露骨に嫌そうな顔をした人は。
もう！ 英子ちゃんじやなくて残念でしたー。べーーー。

……凄く、虚しいです。

でもでも、独り言くらい許してください。
何か喋っていいと、私、可笑しくなつてしまいそุดから。

だつて、だつてえええー。

だーーーれも、いないんですもん。

しんと静まりかえつた学園内。
誰も居ない教室。
見当たらぬいクラスメイト達。
いつまでも始らない授業。
やつて来ないいちわる先生… あつ、それは別にいいんですけど
ね。

そういうわけで私は、教室で唯一人、ぽつんと席に座つて待ちぼ
うけをしていました。

可笑しいです。こんなのは絶対可笑しいです。
英子ちゃんだったら絶対に、やれやれだぜー とか言つてゐるべ
ルです。

うーん、今日は皆さんお休みなのでしょうか？

皆さん風邪をひいたとか？

それとも学園に行くのが億劫になってしまったのでしょうか？

分かります。私にはその気持ちが良く分かります。

私も田曜の夜などには英子ちゃんに……あれ？ そういえば今
日は、何曜日なのでしょうか？

何月何日の何曜日の何時？

私は、慌てて教室内の時計やカレンダーを探しますが、何故か一
向に見当たりません。

待つて、待つてください。

私はいつからいつののじょうか？ どうしていつのの
でじょうか？

そもそも私は、学園にいるにも関わらず制服を着ていません。部
屋着である諺Tシャツを着ています。

ちなみに今日の諺は「天を怨みず、人を咎めず」です。とつても
ステキな諺ですよね？ ね？

…「ほん。ちょっとだけ話が脱線してしまいましたが、これは
明らかに変です。

もう何もかも変です。あべこべです。
英子ちゃんのパジャマへりこ変です。

だからといって、このまま何もしないでいるわけにはいきません。
例え寂しくても、怖くても、虚しくても、泣きたくても、立ち止

まっているわけにはいきません。

だつて私は、英子ちゃんに頼りつきりの私を卒業すると心に誓つたのですから。

だから私は、涙を拭いて椅子から立ち上がったのでした。

とはいえ、何のプランも無い私。

一先ず学園の外に出てみたものの、やっぱりだれもいません。しんと静まり返つた、まるで映画のセットのような町並み。世界はこんなに広いのに、ここにいるのは私だけ。

私一人に、この世界は広すぎます。

やっぱり、私の隣には英子ちゃんがいてくれないと。

だから私は、私と英子ちゃんのマンションを手指す事にしました。

いつもは英子ちゃんと一人の登下校。

だけど、今日は私一人の帰り道。

誰もいない道路を一人で歩くのは確かに寂しいですが、やっぱり隣に英子ちゃんがいるのが一番寂しいのです。

普段からお嬢様ーとか、天然なんて、さんざん英子ちゃんに馬鹿にされていますが、私だって帰り道くらい知つてます。

英子ちゃんに護られなくても、私一人でも安全に帰れます。

だつて、私以外にはだーーれもいないんですから。

どれくらい歩いたのでしょうか？

時計もないし、そもそも誰もいないので時間を尋ねることも出来

ません。おまけにどれだけ歩いても雲一つ動かない、可笑しな空。

英子ちゃんは、神様を信じていません。

例え神を信じていなくても、地獄はある。それが酔った時の英子ちゃんの口癖です。

もしかしたら私は、その地獄という場所に紛れ込んでしまったのかもしれません。

そんな諦めにも似た思考が、私の脳内を占拠し始めたその時、私の眼の前に見慣れたマンションがその姿を現しました。

ああ、天国はここにあったのですね？

私は、それまでの疲れが嘘のように全力疾走でマンションの入り口へと駆けました。

幾つかの暗証番号と指紋入力のセキュリティを超えて、私は、とうとう私達の部屋へとたどり着きました。

私は、震える手で恐る恐るドアを開きます。

もし、もしもここに英子ちゃんが居なかつたら？

つうん、駄目。悪い方にはばかり考えてしまつのは私の悪い癖。

私は、勢い良くドアを開き、部屋の中へ進入しました。

いない。英子ちゃんがない。どこにもいない。

私は、今日ほどこのマンションの広さを怨んだ事はありませんでした。

そして、最後の一部屋を探し終わり、私は絶望を携えリビングへと戻りました。

「英子ちゃんが、どこにもいません。私は、私は、やつぱり一人ぼつちなんです。世界に一人だけ。ここはきっと、私の地獄なのです

ね」

孤独と静寂。

それは、私に對してあまりにも皮肉な世界。絶望に支配された私は、その場で蹲り声を上げて泣きました。

その声は、正にそんな瞬間に聞こえてきたのでした。

「いや、その考え方はあながち間違つちやいねーぜ、びーー」

ああ、何で懐かしく暖かい声なのでしょうか。

私は、その声に導かれるかのように、ゆっくつとその意識の糸を手放していったのでした。

あたしは、紅く煌くナイフを床に放り投げ、英子の体をソファーに横たえた。

びーーのやつ、何とかこいつち側に戻れたらしき。つたぐ、やれやれだぜ。心配と苦労ばっかりかけさせやがつて。

「セカイーハーディダケ」

何の事は無い。全てはびーーが採つてきたこの怪しげなキノコが原因だ。

まあ、名称は今あたしが付けたんだけどよ。悪くないだろ？

それはそれとして、つまり、事の顛末はこうだ。

いつもの「」とく、その才能と収集癖を遺憾なく發揮し、怪しそ一
20%のキノコを拾つてきました。

あたしが発見したときには、既にそいつを食つちまつた後で、びーーこは床にぶつ倒れながら、うんうんと独り言を延々と呟いている

始末。

そんなびーこの独り言によると、このキノコ、食った人間の脳みそを孤独と静寂の世界へと連れ出しちまうって代物らしい。ある意味天国と言えなくも無い世界だが、どうやらびーこのひとつは地獄だつたらしい。

つーわけで、どう考えてもびーこの迷惑この上ない才能が惹き寄せたこの異端なキノコを解毒ならぬ、取り除くため、あたしは件のシリアルキラーに放つたのと同じ紅の煌きで、びーこの中の異端、つまり、キノコの作用を取り除いてやつたつてわけだ。

脳内の話だつたとは言え、あいつもこれでちつた一懲りただろう。これからは、こういうバカげたフリーダムかつ自由人すぎる行動は自重してくれるとありがたいんだがなあ。

……と、思ったが、やっぱり今回もその望みは薄いかもしだい。

こんな満面の笑みを浮かべて寝ている奴が、反省なんてしてゐるわけねーもんな。

まつたく、先が思いやられるぜ。

END

第十九話 「透明人間は漢のロマン」

第十九話「透明人間は漢のロマン」

「んだよおつ、びーーん、あたしの酒が呑めなにってのかよー」

あたしは、ほろ酔い気分で隣に座るびーこに絡む。

辺りには飲み散らかしたビール缶やホトトギスが散乱している

おだしかつて人の子か たまにはこんな風に呑みたまに時がしたい時だつてある。それだけの話。

「黙田です！」さあ、子供たにお酒をすすめていいあるんですか。と

てからなんですか、からね？」

けろつてーの。減るもんじやなし。

びーい、もう1本持ってきてー

一金くれ、仕方の無い英子をやんなんですか？」今田正也が呑み下さうと、畏々として、「二兄が最後ですからね、

「<--<-->-->」

びーこは小さな溜息をつきつつ、パタパタとキッチンへ向かつた。

さて、後は「オイツをどうするか」だ。

あたしがソイツの存在に気がついたのは3時間前。
あたし達、つーかあたしが酒盛りを始めたちょうどその時の事で

ある。

始めはあたしが酔っ払っただけだと思つていた。
例えば眼の前のビール缶が勝手に倒れたり、つまみが微妙に移動
したり…

で、試しに気配を探つてみると確かに居る。姿は見えねーが確かに
あたし達の近くに、ソイツは居た。

あたしやびーこは靈が見える。だから「コイツは靈ではない。
つまり、残る可能性は… そつ、透明人間だ。

そして、氣になる点がもう一つ。
こいつは一体何を考えてやがるんだ？ つてところ。

相手が透明人間なのはほぼ間違いない。恐らく、びーこに惹きつけられてのこのこやつてきた馬鹿の一人だろつ。
だが、だったら何故すぐに襲い掛かつてこない？
ただでさえあたしは酒なんて呑んじまって、隙だらけな状態だつてのに。

それともまさか、いや、まさかとは思つが… 「コイツはアレを
待つているのか？
だとしたらコイツ…。

そして、それを確かめるチャンスはすぐにやつてきた。

「はいびーぞ、英子ちゃん。本当にこれで最後なんですかね？」
「呑みすぎは、めつですよ？」
「あつ、ああ。分かつたぜ」
「はい、良い子良い子。というわけで、私はお風呂に入ります。英子ちゃん、そのまま寝ちゃ駄目ですかね？ 風引いちゃいますか
ら」

きた。

あたしはびーーのその言葉を待っていた。
さて、奴さんの反応は？

「びーー」と一緒にすんな。あたしは「こんなとこひで寝たりしねーよ
「そうですか？ とにかく、呑み過ぎないようにしてくださー」
そう言つてリビングからバスルームへと向かうびーー。
直後、テーブルがガチャリと音を立てて大きく揺れた。
明らかに誰かが立ち上がったのだという事が分かる。

まさかとは思つちゃいたし、「冗談半分の推察だつたが、悲しいかな
などうやらあたしの推理つてやつは当たつちまつたらしい。
だがまあ、いつなつてくるとやるべき事もやり方もあるのすと決ま
つてくれる。

「ちーて、と。トイレでも行きますかね

あたしは、件の透明人間、いや、透明変態男にも聞こえるよう、
あえてそんな大声で独り言を呟いた後、素早くびーーのケータイに
電話を掛けた。

びーーの体質上、いつどこで何が起こるかわからない。だからこそ、
びーーには常にケータイを常備するよう言い聞かせてある。

びーーとの通話を切り上げた後、あたしは最短距離でびーーの元へと向かつた。

コツ、コツと足音を立てながら、男はある場所へと一步また一步
と近づいている。

これから行う行為。

それこそが男にとつての生きる意味であり、唯一のレゾンデートルであり、この男にとつての全てだつた。

男は自分の特性に対し、大いに自信を持っていたし、狙つた獲物を逃した事、自分の定めたミッションに失敗した事などこれまで一度も無かつた。

そもそも男には敵が居なかつた。自分の存在に気がつく人間は、これまで誰一人としていなかつたからだ。

だからなのだろう。これから眼の前に訪れるであろう桃源郷を想像し、男は、見えるはずの無いその顔を大きく歪ませ、ニヤリと笑うのだった。

そして、男は、その部屋のドアに手を掛け…。

ガチャつという音と共にバスルームのドアが開かれる。
ハツ、掛かりやがつたな？

「ぶアーかめ。残念だつたな、びーこじやなくて」

あたしは、そんなセリフと共に、そこにあるであろう透明人間痴漢男の手を掴み、一本背負いを決め込む。

「うおーら、よつ

バスルームの床に叩きつけられた糞野郎がのた打ち回る。

「まあ、定石だよな。映画なんかでも使い古された手だぜ。湯けむ

りでその輪郭がぼんやりと浮かんでくる、なんてのはな

水に足を取られ、何度か滑りずつこけた後、変態男がよろよろと

立ち上がり、声の主、つまり、あたしの姿をじっと睨む。

しばしの沈黙の後、奴の顔から突如として大量の血液が噴射される。

「お？ なんだなんだ？ さつきのが予想以上に効いたってことか？ まあ、んなのどつちだつていい。あたしにとつちや好都合だしな」

件の透明人間の体は、自らの鮮血によりその輪郭をくっきりと浮かび上がらせていた。

はん。さまーないぜ。これじゃ透明人間でもなんでもねーな。あたしの目の前に居るのは、ただの変態野郎。それだけだ。

「お前、今までもその力を悪用して随分と下らねーことをやつてきたんだろ？ てめー見たいな奴を女の敵つて言うんだろうな。なあ？ もういいだろ。ここらで終わりにしよーぜ。勿論、てめーの所業をじやない。てめー自身をだ！」

あたしは予め準備しておいたナイフを取り、素早く精神を集中させていく。

「月は村雲花に風、月夜に提灯夏火鉢。： 今宵の我が月は、半月」
透明人間なんて名前だが相手はあくまで人外。悪靈と同じくく。相手が人間でない以上、そんな相手に容赦は要らない。

腕を振り上げ、こちらに猛進してくる透明野郎に対し、あたしは狙いを定めて蒼く煌くナイフを一投。

あたしのナイフは見事、奴のどてっぴらに命中。

聞きたくも無い、汚ねー断末魔をあげながら、奴はあたしの眼の前から、消滅した。

やれやれ、一段落つてやつだ。

あたしは、そのままの格好でバスルームから出ると、心配そうにあたしを見上げるびーこがぽつんと佇んでいた。

「おひ、急な作戦だつたが上手くいったな。つーか馬鹿だよなあ。透明な姿で女の風呂を除くとか、馬鹿な男のテンプレみてーなくだらねーことしやがつて。ま、自業自得だな」

「やつぱり英子ちゃんは凄いです。私、一緒にいたのに全然気がつきませんでしたもん。でも、その、英子ちゃん。バスルームで私に成りすましてだまし討ちつて作戦自体はいいと思うのですが。わざわざ裸にならなくとも良かつたのではないか?」

「そうか? 仮にも風呂場に服着たまま入れるかよ。それによ、あの変態野郎はびーこの裸が見たかったんだろう? だったら別にあたしがどうこうしょーが関係ねーじゃん」

あたし何かおかしい事言つたか? 間違つたこと言つたか?

びーこは再び小さな溜息をつきながら言つ。

「英子ちゃん? 英子ちゃんだつて立派な乙女なんですからね。もう少し羞恥心とか女性らしさを身に着けましょーうね?」

そう言つてあたしの胸を凝視するびーこ。

「んだよ?」

「それとも何ですか? 持つものの余裕つてやつですか? 英子ちゃん、ノブレスオブリージュつて言葉知つてます? まったくー、やれやれ、です」

びーこは、あたしにバスタオルを渡しながら、そうオーバーリアクション気味に言つた。

つーか誰の真似だよ、それ。

やれやれだぜ。

E
N
D

第二十話 「人魚は魚類ですか？ いいえ、ナマモノです」

第二十話 「人魚は魚類ですか？ いいえ、ナマモノです」

「あ、あちい…… 死ねる。軽く死ねるな、これは」

あたしは、今、太陽がさんさんと照りつけるまるで砂漠のようないにやいけねーのか。

基本的に、あたしはこの時期の海が嫌いだ。

何が悲しくてこんな糞暑い中、汗を垂らしながら、塩水なんぞ浴

いいか？ 海は泳ぐもんじゅない。叫ぶもんだ。

こう、胸に溜め込んだ色んなもんを、海に向けて全力投球してやるのだ。

海は多くを語らない。だが、様々なことをあたしに教えてくれた。

けどまあ、そんな母なる海つてやつも、一つだけあたしに教えてくれなかつた事がある……。

「えーいーーーちゃん。一緒に泳ぎましょーよー。気持ちいいですよー」

白のワンピース型の水着とサメ型の浮き輪を装備したびーこが、これみよがしに、満面の笑みであたしに向けて手を振つている。はつはつは、びーこの野郎。あんなにはしゃいじゅつてまつたく餓鬼だな。

ああそうさ、泳げないさ。カナヅチさ。で、何か文句あ
る?

あたしはびーこに軽く手を振り替えした後、すぐにパラソルの下に戻った。

まあ 何にしてもこの分なら 誰くは大丈夫そこだ
それにしてもびーこのやつめ、急に海に行きたいなんて言い出し
やがつて。

海なんて、それこそ魑魅魍魎・妖怪・怪異・超常現象の類の宝庫だらーが。

だからこそ、あたしは海を満喫中のびーーーお嬢様を四六時中監視
つていねええええええええええええええええええええええええ
は？ え？ せつきまで浅いところでぼしゃぼしゃやっていた
筈なのに！

あたしは急いでパラソルから飛び出し、浅瀬へと駆け寄る。こう言っちゃなんだが、びーーはあれで結構目立つ。

見間違える事も見失う事もありえない。

そもそも、ここはとつておきの穴場。あたしとびーこ以外に人の姿は無い。

あたしは必死になりながらびーこの姿を探す。

!

最悪だ。

あたしの目に飛び込んできたのは、ぶくぶくと音を立て沈み行く
びーこの姿だつた。

恐らく波にでも流されたのだろう。いや、びーこのことだ。もし
かするとそんな単純な話ではないのかも知れねー。

だが、今大切なのはそんなことじやない。眼の前でびーこがおぼ
れかけてるつてことだ。

遠い。

果たして力ナヅチのあたしがあそこまでたどり着けるだろうか？

違うだろ。

馬鹿があたしは。

辿り着けるかどうかじやない。死ぬ気で辿りつくしかねーだろう
が。

あたしが意を決して、海へと飛び込もうとしたその時、必死の形
相のあたしの横を華麗に通り過ぎ、そのまま海へとダイブする女性
が一人。

さつきまで誰も居なかつたはずなのに。

しかも、何て見事なフォーム。速く、美しく、華麗。

おいおい、あれじやまるで… 人魚じやねーか。

あたしがぽかんと呆気に取られているつちこ、女性はびーこを抱
えてあたしの元へと戻ってきた。

「びーこ無事か？ 怪我ないか？」

「げつほ、げほ。ううう、うええええん、こ、怖かったー。ざぶーん、じばーんつて」

「だからあれほど氣をつけるって言つたじやねーか。つたく、まあ、無事でよかつたぜ。それと」

あたしは改めて眼の前の人魚もとい、びーこの命の恩人に頭を下げる。

「どこの誰かは知らねーが、スマン。助かつた。恩に着るよ。……で、あんた一体何もんだ？」

「え、英子ちゃん！」

「びーこは黙つてろ。んで、ノーロメントってわけか？」「あたしは、ハーフパンツのポケットに忍ばせてているナイフに手を掛けながらそう言った。

分かつてゐるびーこ。仮にも眼の前の人魚はびーこの命の恩人だ。あたしだつてこんなことは言いたくなー。

彼女が居なかつたら、今頃びーこがどうなつていたか分かつたもんじやない。何しろあたしは泳げないから。

だが、だ。

びーこが溺れかけたのも、こいつの仕業だつたらどうする？それにあたしは、さつきからこの女性に対し、人間のものとは違う何かを感じている。

眼の前の女性。

あたしも背は高い方だが、あたしを凌ぐスケールの持ち主で、かつてのびーこの髪型を連想させるセミロング。

年は……あたしより下、びーこより上といった程度だろう。着衣のまま、しかもびーこを担いで泳いでいたにも関わらず息一つ切れていない。

それどころか、終始無言で二口二口顔。

不気味なくらい、ひたすらにあたし達を見つめている。

が、ひとしきりあたし達の顔を見つめ終えた後、彼女は恐らく私物であるうつ小さなホワイトボードを取り出し、手馴れた感じでキュツキュと何かを書き出した。

「英子ちゃん英子ちゃん、もしかしてこの方喋れないのでしょうか？」

「さあな

喋れないだと？」

びーこは極たまにだが、核心をつくような事を言いつ出すから侮れない。

成る程、それが確かにするとこいつは……。

マジックペンの蓋を開じ、再び、満面の笑みであたし達に顔を向け、ホワイトボードを見せる女。

「えーっと、なになに。こんにちワ、わタシの名前はしひです。

わあ、可愛いお名前ですねー」

そんなびーこのリアクションに対し、じへじへと嬉しそうに頷くしーと名乗る女。

と、ポケットからクリーナーを取り出し、再び何かを書き出した。今度はびーこの代わりにあたしが読み上げる。

「びーこちゃん、海はたのシいとこりダケビ、キケンなとこりテもアリマス。もつとをつけヨウね?」

正論だ。

どにかたどたどしい字で書かれたその文章は、びーこに對しあまりに正論だった。が、あたしが気になったのはそんなところではない。

びーこの事を知っているだと?

こいつも、びーこに惹き付けられたアホ共の類つてわけか?

いや、つーかびーこって名前はそもそもあたしがつけた渾名だ。あたしは、びーこの事を本名では一度たりとも呼んでいない。

だとしたら、何だ？

そんなあたしの疑問も、次のしきの言葉で直ぐに解決することになる。

「わタシは、人魚デス。いえ、セイかくには、もと、デスが」

人魚。

流石のあたしも実物は初めてみるな。

やれやれ、何ともまたレアなヤツが惹き寄せられたもんだ。

「で？ その人魚さんがわざわざ何の用だ？ びーこを助けてくれたのは感謝してるが、当然それだけってわけじやねーんだろ？」

人魚は、あたしの言葉に深く一度頷いた後、先程と180度異なり深刻な顔つきでホワイトボードに書きなぐる。

そんな人魚の文章を、今度はびーこが読み上げる。

「ふむふむ。わタシは、エイコさん、あい一きまシタ。へえー、英子ちゃんですか？ 珍しい事もあるものですねー、英子ちゃんにお客さんとか。えーと、エイコさん、わタシを…」
びーこは、そこで言葉を止めた。

結論から言えば、この人魚、やはり口者ではなかつた。

びーこの事を知っているビーチーか、このあたしの事も知っていた。いや、むしろこの場合、田的はびーこより、あたしとことなる。

……「ビーチー、あたしに消されたいらしー。

比喩的な意味でも、あたしの感情任せのセリフでもなんでもなく、文字通り、ホワイトボードにそう書かれていたのだ。

そう、あなたの手で私を消してください、と。

「そんな！ ビンしてですか？ しげちゃん、ビンしてそんな事を言つのですか？」

理解できないといつ風に、びーこが声を上げる。

生憎だが、あたしには何となく事の次第が読めてきた。

これだから、女って生き物は嫌なんだ。

「ヒイコさんは、わタシたちのよくなそんザイのあいだでは、やつ
メイじんなんですよ。モチろん、びーこちゃんモ」

糞が。

元々この手の商売は暗躍が基本だ。あたしは元々田立たず跡を残
さずやつてきた。そのつもりだった。

だが、事びーこのお守役を引き受けたからは、ビンしてもそつ言
つていられない状況が頻発する。あたしもむやみに動きすぎた。田
立ちすぎちまた。

遅かれ早かれ、こうなることは明白だった。

まあ、裏家業としてやつていくには既に致命的だろう。

やれやれ。話が逸れちまたが、つまり、こいつは最初からあた
しに消してもらうことを望んであたし達の前に現れたつてわけだ。
理由は言わずもがなだろう。

人魚の癖に立派に生え揃つた一本の足と、失つた声が雄弁に物語
つている。

これだけ材料がありや、小学生でも分かるレベルだ。

だからこそ、余計にあたしは聞きたくなかった。

さて、と。

そろそろ決断の時だ。

あたしはこいつをどうしてやればいい？　どうするのが一番の正解だ？

「お前の想像通りさ。あたしは、あたしの前に立ちふさがる人外共を問答無用でぶつた切つて、片つ端から無間送りにしてやつた。お前はその噂を聞きつけて、御丁寧にも自らあたしに消されにやつてきた」

眼の前の元人魚は「ククク」と何度も何度も頷いた。深く深く頷いた。

「だめ、絶対に駄目ですよ、英子ちゃん。だつてしいちゃんは何にも悪い事してないじゃないですか。それどころか私を助けてくれました。それに、私はまだちゃんとお礼も言えていないんですから」「だつたら、今すぐ言うんだな…………いや、悪いな、びーー。ちつと遅かつたみてーだぜ」

あたしは、紅く煌くナイフを眼の前の元人魚から引き抜いた。

「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿ばかー、英子ちゃんのばかー」
ぽかぽかとあたしを叩きながら、あたしの胸に顔を埋めるびーー。
力なく、その場に倒れこむ人魚。

「馬鹿とはひでえ言い草だな。まあ、あながち間違っちゃいねーかもしれないが」

直後、人魚が紅い光に包まる。

「え?
え?
えーうう?」

「悪いな。あたしは天邪鬼なんだ」

光はやがて収束し、あたし達の眼の前には、間違う事なき人魚の姿が現れた。

「この紅の力は、蒼と違つて人間の異端を取り除く力だ。」
で使ってみたが、どーやら大方上手くいった見てーだな
一か八か

意識を取り戻した人魚は、自分の姿を見て、驚愕の表情を浮かべながら何度も口をぱくつかせたものの、やがて、ホワイトボードに何かを書き始めた。

「ドウシテ?

「あんたがどうして人間になつたのか、どうして消して欲しいなんて言いやがつたのかはあえて聽かねー。いや、聞きたくない。だがよ、あんたは仮にもびーこの恩人なんだ。ビーせなら生きていて欲しい……と、びーこなら言うはず」

わっともわとお話ししたいです！」

「だとよ。まあ、死ぬほどお節介かもしけねーが、その姿で妥協してくれ。あたしはびーこみみたいに優しかないからな。ほら、声は出ないままだろ？ … つーより、これがあたしの力の限界だな」

眼の前の人魚は、声もなく泣いた。

「まあ、機会があったらまた姿を見せてくれよ、びーーも喜ぶ」

しげがどんな思いで涙を流したのか？
しげがこの先どんな人生を送るのか？

どちらもあたしには分からない。

一度曲がつちまつた自分を、人生を再び軌道修正させるのは、なかなか難しい。

見てくれば確かに元の人魚の姿に戻つたが、一度失つた声は永遠に戻つては来ない。

後は、そう、全ては彼女次第。

色々なものを抱えて、色々なものを失つて、しげはこれからどんな海を泳いでいくのだろう。

あーあ、だからあたしは海が嫌いなんだよ。

END

第一十一話 「図書館で荒ぶる鷹のポーズ」

第一十一話 「図書館で荒ぶる鷹のポーズ」

あたしは、眼の前に詰まれた本のタワーから一冊を抜き取り、適当にページを開いた。

相変わらず、びーこはあたしの隣の席でうんうんと唸つていた。

あたし達は今、とある図書館へやつてきていた。

期待を裏切るようで申し訳ねーが、ここは別に特別な場所じゃない。

どこの町にも一つはあるような、極普通の図書館つてやつだ。びーこの学園での課題をこなすため、あたし達は頻繁にここを利用する。

確かにあたしはびーこのお守兼ボディーガード兼保護者、のようなものではあるんだが、流石にびーこの宿題を手伝つてわけにはいかない。

いかないつづり、正直、あたしにはさっぱりだからだ。

つーわけで、びーこには一人で頑張つてもらわなきゃならねーのだ。

で、その間、あたしが何をしているのかといえば……。

じつ見えて、あたしは本をよく読む。読書が趣味だといつても過言じやねーくらいには読む。

だが、あたしが読む本の傾向は決まっている。

ちなみに、今、あたしの眼の前に積まれている本の一例を上げよ

う。

世界の超常現象、オカルト大全、みずきしげる妖怪百科、世界のモンスターがよく分かる本、そして世界各地の伝承＆民俗学書。

あ？ 誰だよ、今笑った奴は？

…… あたしは至つて真面目にこれらの本を読んでいる。至つて真面目に、だ。

「冗談のようで冗談じゃねー話、これらの本はびーーとの日常生活において、大いに役に立つ。

つまりは、びーーの呪われた才能に惹き付けられた糞野郎供を屠るための、貴重な糸口となる情報源つーわけだ。

事実は小説よりも奇なりなんて言つたが、あたしたちヒーリングや、フィクションすら現実と化す。

あたしは、ケルト神話について書かれた凶器になりそつなほど分厚い本を閉じ、チラリと時計に目を向ける。

あの糞鎧野郎の弱点はねーかと、色々な文献をあたしちゃいるが、未だ有用な情報は皆無。

リベンジの日は、まだまだ遠い。やれやれだぜ。

あたしは一旦休憩するべく、隣のびーーに声を掛けた。

「びーー。じじじでひつと休憩にしねーか？ つーか進展具合はどうよー？」

あたしの声に反応し、びーーがじからに満面の笑みを向ける。が、次の瞬間、あたしの表情はびーーのそれと異なり、たちまち怪訝なものへと変化する。

「おい、何やつてんだ？ びーー。集中のしすぎでとつとつぶつ壊

れちまつたか?」「

そんなあたしの言葉に対しひーーは、手をぱたぱたと動かしながら、怒ったような顔で…… 口をパクつかせた。

何の事は無い。よーするにいつもの事、である。

「びーー、お前… 嘶れてねーぞ。つーより、声が出てない」

眼の前のびーーは何を言つてゐのかは分からぬーが、何やら驚愕している。

恐らく、ええええええええとか、うそーーーーとか叫んでるんだら、

「まあ、これはこれで静かで良いんだがな。試しに、手を叩いてみてくれねーか?」

言われたとおり、何度も手を合わせ拍手をするびーー。
が、やはりその音は聞こえてこない。
成る程。これはつまり。

「びーー、お前音を盗まれちまつたらしいぜ」

犯人は言わずもがな、所謂びーーのファンだらう。いつもの、とびきり熱心な。

「つたく、おちおち本も読んでられねーのかよ。まあいい、あたしは自分の仕事をするだけだ。びーー、あんたは大人しく課題の続きをやって待つてな。いいか? あたしがいねーからつてサボるんじやねーぞ?」

「くくく」と、肯定を示すよつて何度も頷いたびーーは、割と落ち着いた雰囲気でノートに視線を戻した。

どうやら、いつもみてーに泣いたり喚いたりはないらしい。
「こいつも、これはこれでちつとは成長してゐつてことかね?

まあ、今はこれで良い。

今はまだ、あたしに存分に譲られていいんだ。自分に出来る事を精一杯やつていれば、それでいい。

あたしは、真剣にノートと向き合ひ「」の頭を一度ほどほんほんと撫でた後、椅子から立ち上がり、図書館内の徘徊を始めた。

人の多い一階を避け、あたしは郷土展示物コーナーとなっている
三階に足を運ぶ。

いじば、いじの図書館内において一番人気の少ない場所。

あたしのカンでやーか正しければ
この辺りはいそーな気が…
ビンゴー！

あたしの視線の先に漂う小さな緑の発光体。まるで螢の光のよつな一本の発光体。

妖精、しかも俗に言つイタズラ妖精・ピクシーの派生種。
恐らく、螢音つて種類だと思う。そう、けいおん……ほらな
？ わつそくわつき勉強したことが役に立つた。

ちなみに、苦情は受け付けねーぜ。

「おい、妖精野郎。時にはイタズラじや済まれねー」ともある、つてことを勉強してもらおうじやねーか

図書館

仮にも公共の場でナイフを取り出そうもんなら、ちよつとばかり厄介な事になりかねない。

幾らあたしでも、法律は切れない。
無視できない。

仕方なく他に何か得物になりそうなものはないかホケットを弄してみると、出てきたのは貸し出しカード、所謂図書カードだけだつ

た。

……まあいい、イタズラっ子をとつかねむじや充分すばれるせ
どだぜ。

笛音は、相変わらずあたしの周りを飛び回っている。周囲の、たぶん歴史的価値があるんじやねーかと思しき壷や石器なんかをなぎ倒しながら。

「はえーなおい。流石は妖精ってとこか。いつこうとも、『足石』では田で捉えようとするんじやなく、音とか気配とかで感じつけているよな」

あたしがそう言つて放つた瞬間、笛音はびーーにそうしたよつて、田らの音をも遮断した。

音も無く飛び回る笛音。

「コイツ、完全にあたしの事を馬鹿にしてやがるな。

「はん。上等じゃねーか。だが残念だつたな、生憎ピクシーについては予習済みなんでね」

あたしは着ていたジャケットを裏返しにする。

「じついうの、ピクシーレッドって言つんだろ？ イタズラ妖精にかどわかされることをよ。んで、その対処法が上着を裏返す事」

小さなイタズラ妖精が明らかに動搖したのが分かる。

「終わりだな。大事なものなんだ、返してもらうぜ！ やら… よつ

あたしは、若干の力を籠めて図書カードを手裏剣のよつて笛音に向けて放つ。

空を裂きながら、あたしの図書カードは見事悪ガキ妖精に命中。

瞬間、妖精から笛火ならぬびーーの声が飛び出し、持ち主の下へと消えていった。

あたしは、へこやへこやと落とした妖精を、むんずと驚掴みにして言つ。

「本来、あたしの前に立ちふさがり、びーーに害をなす存在は問答

無用で無闇送りにしてきた。が、あたしだって鬼じゃねー。それにガキをいたぶるのも趣味じゃない。つーわけで、今回はこれくらいで勘弁してやる

あたしの手でじたばたしていた妖精が明らかにほつとしたのが分かる。

「ただし、条件が一つ。この図書館がてめーの住処なんだろ？ あたしはな、図書館で騒ぐ輩が大嫌いなんだ。だからよ、そんな奴がいたら、てめーの力で脅かしてやれよ。そーすりや必然的に静かになるだろ？」

あたしは妖精顔負けの悪巧み顔を浮かべながら、そう言い放つた。これで今後のあたしの図書館ライフは安泰、完璧だらう。

……と思つたのも束の間。

「誰ですか！ 図書館内で暴れている人は！」

階下から司書らしき人物の怒声が聞こえてくる。

前言撤回。

どうやらあたしの今後の図書館ライフは間違いなく前途多難なようだつた。
つたく、やれやれだぜ。

END

第一十一話 「ミイラ男に日本でしてながれ」

第一十一話 「ミイラ男に日本でしてながれ」

「ひまわり

いつものようにびーこを引き連れての学園からの帰り。いつものようにマンションのドアを開け、いつものように部屋の中に入ると、そこにはとある不法侵入者が居た。

まあ、それすらこつものことなんだが。

「わー、包帯男さんですね？」

包帯男？ 成る程、そりや惜しいが違う。

「ちつと違うぜ。あれはな、俗に『ミイラ男』って奴さ」

恐らく、びーこに惹き付けられてこんな日本くんだりまでやってきちまつたんだろう。まつたくもつて「苦労な」つた。

あたしは、いつものように部屋の隅に置かれたバッドを取り、構えたものの……ふと、とある考えが脳裏をよぎり、その構えを解いた。

ミイラ男。

こいつちや何だか、雑魚中の雑魚。

特筆した殺傷能力を持ち合わせていないし、動きも鈍く、耐久力も低く、脆い。

言つなれば、あたしにとつて羽虫を潰すようなレベル・感覚であ

る。

だが、びーーことつてはどうだりう~

……つまり、あたしが何を言いたいかといえば。

「びーー。一度いい機会だ。あのミイラ男、お前が屠れ」
「はい！…………え？　ええ？　えええええええ
部屋内にびーーの叫び声が木霊する。つたぐ、うるせーなー。
「言つてたじやねーか、あたしに頼りつきりの自分から卒業したい
つて」

「た、確かに言いましたけど、だつて、だつて
「でももだつても禁止だぜ」

「そんなん。まだ心の準備が出来ていないとこますか、何とい
ますか」

この期に及んで及び腰とは、びーーのやつは相変わらずだ。
だが、ここで変わらねーといつまでたつても一歩を踏み出せない。
びーー風に言つなり、ローマは一日にしてならずつてやつや。
「まあ、そう身構えるなよ。何かあつたら必ずあたしが助けに入つ
てやる。だから、まずは一人で何とかしてみな。びーーの思うよつ
にやつてみればいい」

いつもと違うあたしの真剣さが伝わったためか、びーーは覚悟を
決めたように一度大きく頷くと、あたしたちの前方のミイラ先生を
改めて直視した。

ふん、やっぱりいい眼つきをしやがるじやねーか。

びーーには才能がある。

それはもう、全世界の靈能力者達が揃つてドン引きするくらいの
才能がある。

実用的な業や知識は学園側が提供してくれる。

つまり、今のびーーに足りないのは…… 経験と心構えだらう。それを補う事こそ、つまりはあたしの大切な仕事の一部なのである。

「つーんだ。分かりました。私の実力つてやつを英子ちゃんに見せてあげますからね」

「いいねー、その意氣だ」

びーーはカバンからゴソゴソと大量の退魔関連グッズを取り出し、のろのろとこちらに歩み寄るミイラ先生に向かっていった。

よし、頑張れびーー。

お前なら出来る、はず。

……どうしていつなつた?

あれから數十分。

あたしの眼の前では、とある奇跡が起じていた。

何と、一体だつた箸のミイラが一体に増えたのだ。

なんてミラクル。ああ、やっぱりこの世つてのは不思議な出来事で溢れ返つてやがるつてわけだな? 流石のあたしも、不覚にも感動しちまつたぜ!

つて、アホか!!!!!!

「びーこの大馬鹿野郎！ てめー、ミイラ取りがミイラになつてど
ーすんだよ！…！」

「この諺のこれ以上ナイスで的確な使い方を、あたしは知らない。
恐らく、あたしの人生の中で、もっと的確なタイミングでの使い
方だらう。」

つて、知るかよ……………

あたしもなんで冷静に、なんくだらねーこと考えてんだよ。
駄目だ、なんつーか、駄目だ。

流石はびーこ。あたしの想像の斜め上を、軽々と飛び越えてくれ
る。つーか飛び越えすぎ。むしろそのまま太陽に突っ込んで死んで
るレベル。

まあ、今はこれくらいが限界だらう。

あたしは、包帯ぐるぐる巻きになつたびーこを引きずり、手繩り
寄せ、その包帯を解いていく。

「つふうはああああ。はあはあ、く、苦しかつた、です。ミイラ男、
悔りがたし」

「ギブアップか？ まあ、びーこにしちゃナイスファイトだつたと
思うぜ？」

「冗談。英子ちゃん、私は、今、猛烈に燃えてきちゃいました。逆
に火がつきました」

お、おお。

びーこが燃えてやがる。珍しい事もあるもんだぜ。

あたしとしちゃ、こんな姿を見れただけでも成果はあつたと思つ
わけだが、こーはびーこのやる氣つてやつに期待してみようじやね
ーか。

「一つ、思いついたといいますか、試してみたい事があります」
そう言ひと、びーこは件のミーラ男の全身に巻かれた包帯のほつ
れた一部を手に取つた。

「むうふつふー。覚悟してくださいね、包帯男さん？」

直後、びーごが長く伸びた包帯を強引に引っ張り、一

るべると回転させながら包帯を解き始めた。

イメージとしちゃ、時代劇なんかの悪代官の定番、よいではないかってやつ。

ま、あたしの見た感じとしちゃ、トレイレットペーパーをからから
と思い切り引っ張つてるよ!」にしか見えねーが。

「それにして、どうやら一回、包帯の包帯を全部剥ぎ取つたまおつて帰らし。

たかがミニワ野郎一匹屠るにや隨分とメンドクセー、
回りくどいやり方だが、悪くない。悪くは無い。

そう、それでいいんだ。

最後の一切れまで包帯を剥ぎ取りきつたび一〇。

そして、音も無く、消え去る。

「ミイラ男つてのはよ、あくまで包帯つてのミイラ男なんだよ。この包帯に守られてねーと、この世に魂を留めておけねーってわけ」果たしてその事をびーこが知っていたのか、はたまた偶然だったのかはさておき、これで一先ずミッション達成。

「やつたな、びー！」お前はやつ遂げた。自信を持つて良い

「ふふん。私の実力を持つてすれば当然ですよー。えつへん。ところで、英子ちゃん。この包帯、トイレットペーパーとして使いますか？」

「誰が使うか！ つーか、てめーはあたしを何だと思つてんだよ！ せつかく良い感じに終わつたと思つたのに、ビーチにも締まらねーじゃねーかよ。つたく」

びーこが一人前になる日も、そう遠くは無い。………… はず。あたしは心の底からそう願いながら、びーこの頭を一度二度と撫でるのであった。

END

第一二二話 「ほわほわほわほわ

「わわわわわわわわわわ

第一二二話 「ほわほわほわほわ

「わわわわわわわわわわ

とある日の午後。

この日は、珍しく昼の仕事が無く、びーこを送り出したあたしは唯一人、クーラーのガンガンに効いた部屋でガツツリと昼寝をしていた。

だが、それがいけなかつた。

どうやらあたしは、そんな冷房全開な地球に全く優しくねー部屋で、下着オンリーな姿で寝てしまつたらしく……

あたしは、今、猛烈な腹痛に襲われてゐる。

「だあーーー、くつくつ。腹丸出しで寝ひまつて腹を壊すなんて、餓鬼があたしは！」

全身に脂汗を滲ませながら、あたしは震える足でトイレへと直行する。

普段、ちょっとやそつとで体調を崩したりしねーあたしが、よもやそんな下らない理由で脆くも崩れちまうことになるとは……。

これはあれか？ エゴが盛んに叫ばれてる昨今にあつて、それを全くガン無視し続けてきたあたしへの罰か？ 天罰つてやつなのか？

いーや。ねーな、それは。

天罰？ はん。馬鹿言つちゃ いけねーよな。そもそも、まともな神様なんてこの世にはいねーんだから。居るのは、そつ…。

無駄に広い部屋を走り抜け、ようやくトイレへと到着したあたしは、光の速さでドアノブに手をかける。

… が、ドアノブを回そうが、引こうがビクともしないドア。可笑しい。確實に可笑しい。

びーこは当然まだ学園。と、なると残る可能性は二つ。ドアの故障、もしくは…。

「よーし分かった。ドアの故障だらうが、馬鹿が潜んで居ようと関係ねー。悪いが、あたしもギリギリなんだよ」

お腹とか、人としての尊厳とか、お腹とか、乙女の矜持とか、お腹とか。とにかくギリギリなんだ。

あたしは懐からいつものナイフを取り出すと、なりふり構わず振り上げる。

ドアなら、例えあたしが粉みじんにぶつ壊したとしても修理できる。

だが、この世の中には決して修理できぬーものもある。

そんなあたしのナイフがドアに降りかかるうとしたその瞬間、押しても引いても決して動かなかつたその天国へのドアが、突然開かれた。

そして、その中からぬーと現れた人物… それは、赤いリボン・おかっぱ頭の一人の少女だった。

「………… 私、トイレの神様」

「でもトマトの花が咲いてるよ。」
「うーん、まだ早いかな。」

レーベンの「死の歌」

こんな奴花子で充分だ。むしろトイレの神様とは真逆の存在。だが、今のあたしは例え相手が花子だろうが、山田だろうが相手にしている余裕は無い。一ミクロも無い。

全身から滲み出る脂汗は止まらず、眼は血走り、呼吸は荒く、震えが止まらない。

焦るなあたし。——が踏ん張りど——だぜ。

「よ、よ、よし。てめーが誰かなんてあたしは気にしないし、追及しない。な? だからだけ、今すぐそこからだけ。いえ、どいてくださいお願いします」

あなた、エイムみたいなの?」

必死すぎて訳の分からないことを口走るあたし。

そんなあたしに対して、ボーカーフェイスを崩さず花子が一言。

「.....」
1番、花子。トイレの神様歌います。フルコーラスで

なん、
だと？

必死の形相のあたしを意に介さず、眼の前の花子は滅茶苦茶音痴な歌声で、かの有名なフルコーラス約10分の曲を歌い始めた。

もはやナイフすら持つ事が出来なくなつたあたしは、その場で座り込み、ただただひたすらに、聞きたくも無い歌を聞き続ける。

10分。

恐怖。ホラー。戦慄。激痛。

あたしは、かつて、これほどまでの恐怖を感じた事が無かつた。

それは、地獄のような10分間。永遠とも思える長い長い10分間。

失う事への耐え難き恐怖と、苦痛。そして、全てを諦め、開放してしまいという欲求とのせめぎ合い。

ああ、流石は「聴く人誰もが泣ける歌」だぜ。あたしも涙が出てきそう。

だが、明けない夜がないように、止まない雨がないように、地獄のフルゴーラスはやがて終わりのときを告げる。

ノリノリで全てを歌いきつた花子は、ゆっくりとマイクを下ろす。「…………ふゅー、」静聴ありがとうございました

「…………」の野郎。もう我慢の限界だ。何もかも限界だ。色々と。あたしは、何とかふらふらと立ち上がる。

「…………え？ あなた、トレイの歴史を知りたいの？」

何やら、誰も尋ねちゃこねーのに、トレイの歴史とやらを嬉々として語り出した花子。

まずい。

このパターンはまずいぜ。今度は10分じゃ確實に済まない。

ここは、一か八か勝負に出るしかない。

ナイフも握れず、ましてや全身に力も入らねー、限界状態の中、そんなあたしが出来る事。

「あつ、あんなところで植村花菜がトイレの神様歌つてやがる！」
あたしは、感情の無い棒読みでそう告げながら、咄嗟に窓の外を
指差す。

奥の手がこんな子供だましとは、我ながら何とも情けない。だいたい、こんな手に引っかかるようなら苦労は…。

あたしは、窓辺へとやつて来た花子をスルーし、最後の力を振り絞つてヘブンへと駆け込んだ。

「……だから、こうでもしないと、誰も私なんかと遊んでくれないから」

「何だそりや？」
　　「餓鬼かてめーは！」
　　「ああ、餓鬼かー」

びーこにそうするように、あたしは今、花子に説教と言う名の人
生勉強の時間を与えていた。

い
。

と言つが、コイツの場合は妖怪というより幽靈に近い存在。それも地縛靈、憑物の類だろう。要は場所に憑くタイプつてわけだ。

まあ、どうしてコイツがそんなもんになっちゃたかは知りたくもないし、むしろ興味が無い。

「つーか、遊んで欲しかったのかよ」

「うん。……ねえ、また遊びに来てもいい?」

「駄目だ」

そんなあたしの言葉を受け、眼を潤ませながら頬を膨らませる花子。

おいおい、勘弁してくれ。そんな顔であたしを見るなよ。
つたぐ、しょーがねーなーもつ。

「ただし、トイレ以外の部屋でなら歓迎してやる。見た感じびーこ
と同じくらこの年だし。あいつの遊び相手にや丁度いいかもしけね
ーな」

また、この部屋が一段と騒がしくなりそうな予感がして、あたし
は小さな溜息を洩らすのだった。
はあー、やれやれだぜ。

END

第一十四話 「あの日見たトカラウマの名前を僕達はまだ知らない」

第一十四話 「あの日見たトカラウマの名前を僕達はまだ知らない」

得てして、やつらは突然やつてくる。

あたしらの都合や予定をオール無視して、唐突に現れやがる。

あたしは、今、ひたすらにだだつ広く、何も無い、寂れた荒野に佇んでいる。

地面があるし、風も吹いてるし、太陽も沈みかけてる。

ここは恐らく現実世界のどこか、なのだろう。とはいって、ここが現代の地球であるかまでは保障できねーが。

まあ、いざれにしても、ここがどこかなんて大した問題じやない。ここにあたし達を招いた不届き者をぶつ倒さねー限りは、恐らく脱出不可能なのだろう。

これは、そう、あの首なし鎧ヤローと同じパターン。

こんな事が出来る輩は必然的に限られてくる。

それはつまり、相手は伝承クラスだという事を示唆しているに他ならない。

あの鎧ヤローと同じか、もしくはそれ以上の敵。

あたしは、全身から嫌な汗が滲み出でるのが分かつた。

……つと、そうだ。びびつてる場合じやない。びーこは？　あい
つはどこだ？

キヨロキヨロと辺りを見回すと、無骨な小さな石檻を発見。急いで駆け寄るあたし。

「びーこ！ 大丈夫か？ 怪我はねーよな？」

「うええん。英子ちゃん、私がついたらいいにいて

「ああ分かってる。あたしも同じだ。つっても、行きはよいよい帰

りは地獄。恐らく、楽に帰してもらえるとは思えねーがな」

「英子ちゃん、そ、それって上

ひー こかそへ書しかけたとき あたし達の真横に
スンという重音を立て何かが落下。

石? いや、鳥? 何で、鳥像がこんな何も無い荒野に落ちてゐるんだ?

あたしが逡巡するうちにも、加えて2羽の鳥の石造があたし達の立ち位置から少し離れたところに落下。

それを見たあたしの全身に、電撃にも似た衝撃と恐怖心が一気に

駆け巡る

嘘、
だろ？

量天ノ

あたしは、未だにきょとんとしたままのひーこに向かって大声で叫ぶ。

び——「お—— 目を開じろ——！ 今すぐだ——！ いいか？ 絶対にこのおを見るのはいやね——ぞ！ その牢の中では目を瞑つて伏

せてろ、いいな！！

力の限りそう叫んだたしは、いつの間にかあたしの右腕に納まつていた妖刀秋艶を携えて、闇雲に走り出した。

間違いねえ。

あれは石像なんかじゃ断じてない。あれは……「石」されちまつた生きた鳥、だ。

伝承クラス、石化能力。

こんな事が出来る奴は、限られてる。

「…………ねえ、こっちを見てよ？ ねえ、見て？」

荒野に響く不気味な女性の擦れ声。

確定的だ。間違いない。

あたしは、絶対にソイツの顔を見ないようにしながら、その声の方向に近づく。

聞こえてくるのは、シャーシャーといつづ蛇達の唸り声と女性の恨み節。

見えてきたのは、全身黒ずくめ女性の体。

ああ、こいつ……「メテユーサ」だ。

ギリシャ神話に出てくる怪物三姉妹の一人。

その顔を見たものを石へと変える化け物。

間違いなく伝承クラスの相手。

あたしの脳裏に、前回の情けねー惨敗の様子が想起される。

いや、違うだろ？ あたし。

もう、一度とびーこの笑顔を手放したりしないって誓つたじゃねーか。

つたく、やれやれだぜ。

あたしは、一度自分の頬を思い切りバチンと叩き、気合を入れ直

した後、眼の前の相手をいかにして倒すかという思考へと切り替えた。

伝承クラスの相手というのは、その存在が有名であればあるほど、その逸話も多く残されている事が多い。

そして、このメテューサに関しては幸いな事にその倒し方まで御丁寧に知れ渡っている。まあ、小学生でも知ってるような超有名な話って奴だ。

何を隠そう、この間図書館でコイツに関する文献を読んだばかりだからな、あたしも勿論知っている。

ギリシャ神話だと確か、ペルセウスのやつは直接やつと田を合わせず、青銅の楯にメテューサの姿を反射させ、倒したって話だ。なるほどなるほど。

…………… つて、ねえ——よ——！ んなもん常備してるわけね——だろが！！！

糞、何でこつた。ビーすりゅいい？ 何か代替になるようなもんはねーか？

あたしは、急いでポケットを『んじん』と探つてみるものの、打開策は無し。

こういつとき、女性らしく手鏡の一つでも持つてりゅいいんだろうが、生憎あたしにはそういう女性らしきつて奴が欠如しちまつてるらしい。

あたしはひたすら地面を睨みながら、考えを巡らせる。

が、相手はメテューサ。そうやすやすと考える時間は『んじん』じゃない。

あたしの足元には數十匹もの蛇の群れが忍び寄っていた。

「うげえ。あたしは別に爬虫類が駄目ってことはねーが、ここまで

来ると関係ねーな。なんともおぞましい光景だぜ」

たかだが蛇くらいで恐れをなすあたしじゃねーが、いかんせん数
が多すぎる。

ザクザクと切り捨ていくものの、一人ではどうしても裁ききれ
ない。

「いッツつ。： いつてーなコンチクシヨウー。」

業を煮やしたあたしは、奴の足元を見ながら一気に接近する。

勿論、具体的なプランは何もねーが

メデューサの頭部の蛇達が騒ぎ立てやかましい。

構わず、あたしは右手の秋艶を振り上げる。

が、奴の両手の尋常なくらいに鋭い爪により、あつさりと防がれ、
逆に奴の頭部の蛇達からカウンターを喰らう始末。

「ちっくショ。蛇が伸びるなんて聞いてねーよ

駄目だ。

相手を正面から見据えられずに、近距離でやり合おうなんて自殺
行為に等しい。

あたしは、急いでバックステップをとり、メデューサとの距離を
稼ぐ。

やつの移動速度が人並みなのはせめてもの救いだろつ。

しかしこの状況、最悪だ。

： やつきので右肩から右腕にかけて結構深い傷を負つちました。

近距離では長く殺人的に鋭く伸びた爪に加え、頭部の蛇達を伸ば
しての攻撃。

遠距離では、頭部の蛇を解き放つての攻撃。

その上当然、奴の顔を見たら一発アウト。

いづなつてくると、必然的に相手と距離をとつつ打開策を練る

しか方法は無い。

あたしは、メデューサから放たれた蛇の群れ達を真っ一いつにしつつ、毒づく。

「糞ッ。こんななんじや拉致があかねー。相手の顔を見ずに戦うつてのがこんなにもやりづれーもんだとは思いもよらなかつたぜ。さつさから防戦一方じやねーか。かと言つて、注意を欠いて奴の顔を見ちまつたら一巻の終わり…」

まずいな。

あの蛇、やつぱり毒を持つてたらしい。恐らく神経毒の類だろう。さつきから頭がふらふらするし、感覚がなくなってきた。気を抜くと意識を持つてかれちまいそうだ。

このまま持久戦に持ち込まれれば、石にされるまでも無くアウトだろ。

まあ、考えようによつちやあ、奴の蛇達に即効性の致死毒が無かつただけありがたいと思つべきなのかもしけねーが。

「ねえ、見て？ こつちを見て？ わたしの顔を、見て。綺麗でしょ？ ねえ？」

「あああ、うつせー。見るわけねーだろが！ みすみす石こうにされてたまるかよ」

やはりというか、当然というか、奴から放たれた蛇共を何匹葬つたところで、奴本体にダメージは無いらしい。

かといって、あたしの技量で奴に接近戦を挑めば…。

まじーな。これは本格的にまずい。考えが煮詰まつてきちまつた。加えてあたしの体力もそろそろやばい。

そんなあたしのダメージに反して、奴にはほぼダメージは入つて

ないという反則的な素敵仕様。

これはもう、一発逆転を狙わねーと勝ち田は無い。

あたしは、苛立ちながら秋艶に付着した雑魚蛇共の鮮血を振り払う。

どうする？ どうするあたし。

いつも、刀を青銅の楯代わりにして、刀に奴の姿を映して戦うか？

いや、無茶だ。つーか、この妖刀は色んな呪いやら負のオーラを溜め込んでしまつていて、お世辞にも美しい刀身とは言えないからだ。妖刀… 妖刀？

………… それだ！ その手があつた！！

いける。これなら、一発逆転つてやつを狙える。

むしろ、あたしが今の技量、今の残された体力で奴を葬れるとしたらこの手しかない。この方法に賭けるしかない。

あたしは、今の位置よりさらに後方へと移動し、メデューサとの距離を十二分に保つ。

やつの足元の姿と音を頼りに、奴の正面へと仁王立ちするあたし。さあ、じつからが本当の勝負だぜ、蛇野郎。

「月は村雲花に風、月夜に提灯夏火鉢。： 今宵の我が月は、満月！ 嘰らえ、メデューサ！！！」

あたしは、紅く煌く我が妖刀秋艶を、メデューサ目掛けて全力で、投げ放った。

奴の顔目掛けてグングンと速度を上げ飛んでいく秋艶。これは、いけるか？

が、案の定、奴はあたしが放った妖刀を軽々と…… 「掴んだ」

だが、全ては予定通り。これでいい。これがいいのさ。

「…… 扱んだな？ 終わりだ、蛇野郎」

カラソと、掴んでいた秋艶をその場に落とし、小刻みに震えながら見る見るうちに青ざめていくメテユーサ。

「いや、いや、いやああああああああ。やめて、やめて、ねえ、やめてよ、やめてええええええええええええええええええ！」

その声が完全に枯れ果てるまで叫び尽くした後、メテユーサは、その体を… 石へと変えた。

「ふいーーっ。何とか上手くこつたみてーだな。これもまあ、あたしの予習の賜物つてやつだぜ」

キーワードは、メテユーサは女神アテナの怒りを買った不幸な女だったという事。

とある文献によると、奴は元々髪の美しい普通の人間だったそうだ。

が、女神アテナと美を競おうとして神の怒りを買っちゃった。その罰であんなバケモンにされちまつたつてのが定説。そう。

そんな壮絶な過去を持つメデューサだからこそ、今回あたしの反則技が使えた。

何を隠そう、あたしの妖刀秋艶は、「使用者対してトラウマを見せる」っていう曰くつきの呪われた刀だ。

勿論、その効果はデュラハンとの戦闘時、あたし自身嫌と言つぽど経験済み。

相手は、神様によつてバケモンに変えられた不幸な女だ。
そりや、トラウマの一つや二つあって然りだらう。
ましてや、そのトラウマの一つが、今の自分自身の姿である可能性は極めて高かつた。

そう、奴は秋艶によるトラウマ、つまりは自分自身の姿＝メデューサの姿を見て、石化しちまつたんだ。

石になつたとは言え、相手は伝承クラス。いつ復活するとも限らない。

だからこそ、ここは一つ全力を持つて完膚なきまでに屠つてやるのが、あたしなりの奴らに対する礼儀つてやつだ。

「色即是空、空即是色…… 消えな、この我楽多が」

あたしは奴の足元の秋艶を手にし、そして、眼の前の石像を24分割。その姿を石像から石こう片へと変えた。

「やれやれ。たかだか一回トラウマを見せられたくらいで、潰れるんじやねーよ」

あたしなんて、こいつを使つよくなつてから毎晩つなされてる

つての」「…… めつと、びーーには内緒だが。
『じうだ？ びーー。あたしはやつたぜ。』

そのびーーは、『ひつせり奴が屠られた事で牢から解放されたらしく、』
『ひからくと駆けて来る。』

おじおじ、そんな全力で走ると転ぶだら…… つて、あーあ、言わ
んじつけ無い。

それにして、わつきからやけに田が震む。

……『ひつせり、今更ながら蛇の毒が回つたらしく。』
何だよ、奴を消しても、あたしの体内の毒は消えねーのかよ。

まあ、いいか。

あたしは、びーーのやみな姿を見ながら、ゆづくづく、ゆづくづく、
その田を…… 閉じた。

第一一十五話 「サボりたい時がサボり時」

第一一十五話 「サボりたい時がサボり時」

目を開けると、眼の前には体温計と氷枕を持つたびーーが、心配そうにあたしの顔を覗き込んでいた。

何だ？ 何だこの状況？

何であたしの部屋にびーーがいるんだ？ つーか、あたしは何やつてんだ？

冷静に周りや眼の前のびーーを観察すると、びーーはあたしはそのびーーに看護されていたのだという事が分かる。

直後、あたしの脳内にメテコーサとの死闘が一気に蘇る。

ああ、そうか。びーーはあたしはまた、びーーの奴を心配をせちまつたらしい。

状況が飲み込めたあたしは、眼の前で何故か二口二口しているびーーに語りかける。

「よう、びーー。わりいな、また手間掛けさせちまつたか」

「なーに言つてるんですか英子ちゃん。私が英子ちゃんの看病をするなんて当たり前じゃないですかー。水臭いなーもう」

嬉々としてそう語るびーー。そんな彼女に、あたしは更に突っ込んで質問する。

「そうか？ とにかくでびーー。あたしはどうぐらいい寝てた？」

「そうですねえー。英子ちゃんがあのメテコーサさんをやつづけてから丸々一日ですね。でもでも、安心してください。蛇さんの毒は一過性のもので、後遺症や命に別状は無いみたいですよ？ それに、

私がずーっと看病してましたから。えつへん

…丸々一日か。流石はバケモン。いや、相手のレベルを考えれば、むしろ一日程度で済んだのが不思議なくらいだ。
でもそつか、あの神経毒は抜けたのか…。

だが、あたしが声を大にして言いたいのはそんな些細な事じゃない。それは勿論

「びーー」お前今、一日中あたしの看病をしてたって言つたよな?
あたしの認識が間違つてんのかもしれねーから一応確認しどくが、
昨日も今日も平日だよな? な?」

そんなあたしの問いかけに対し、露骨に視線を逸らすびーー。
「あ、あいどんのー。私、ガイコクジンだから日本語、ワッカリマ
セーン」

成る程。何て分かりやすい奴。

つまりはびーこめ、学園、サボリやがつたな?

「ふざけんな! てめーはそんな見た目に反して、日本語しか喋れ
ねーだろ? がー!」

あはは、と苦笑いのびーー。

と、まあ、本来ならこのまま続けて説教モードに突入したいところではあるんだが、いかんせん事情が事情だ。

今回は、あたしにも非はあつた。実際にいつして看護されてるわけ
だし。

それに、びーこの気持ちも分からなくは無い。

「私は、まだまだ英子ちゃんのように強くありません。いくら英子ちゃんに護られっぱなしの自分を卒業したいと思っていても、現状はまだ以前と何も変わっていない。だから、だからこそ。その英子

ちゃんが怪我をしたとやへり、私に護りせて欲しい。やつ思つた
んです。」

やつ言つてその手を潤ませるびー」。

……ち。

やつぱり分がわりーな。」やつのは苦手なんだよ、あたしは。

あたしは顔を見られないようにあえてびーこと逆の方を向いて言
う。

「びー」。氷枕、取り替えてくれるんだろ？ それ
「あ、はい。勿論です！ 私が用意したんですよ？ 私が
「はいはい。分かったからとつと取り替えてくれ」

ま、あたしもこんな状況だつたしな。

びーこの馬鹿親、失礼、親バカな両親があたしの代わりを寄越し
たんだろうが、こいつはそれを拒否して、丸一日あたしの看病をし
てたつてわけか。

「この包帯もびー」が巻いてくれたのか？」

「えへへ。授業で習いましたから。どうですか？ 結構上手でしょ」

「……ところでびー」。今日の授業予定は何だつたんだ？」

「はい。ひたすら校外マラソンで体力づくりです。もう、ズル休み
したくもなりますよね？ …… あつ」

つたぐ、しょーがねー奴。

…… 今回だけは、大目に見てやるけどな。 本当、やれやれ
だぜ。

第一一十六話 「違つよ、変態とこいつの紳士だよ 「ただいま」

第一一十六話 「違つよ、変態とこいつの紳士だよ
「ただいま」

……ふう。

今日も一日無事終了。

びーこの学園からの送迎を終え、何も無い平穏な一日つでやつの
ありがたみを十二分に噛み締めながら、あたしはソビングのソファ
一で横になつた。

メデューサとの戦闘から一日。

あたしは、辟易していた。

原因は、恐らくアレだろ？ そう、メデューサの「毒」だ。
びーこの手前、あたしはすっかり「完治」したものとして、空元
氣で取り繕つちゃ いるものの、その実中身はガタガタだつた。

確かに、メデューサの蛇による神経「毒」は一過性のものだつた。
痺れるような痺痺感覚は、今となつてはすっかり消えている。

では何が問題なのか？

それは、呪いといふ名の「毒」

あたしは、奴を屠るのにあたしの妖刀秋艶の力を使つた。奴にト
ラウマを見せ、石に変え、屠つた。

それは、今のあたしが奴を倒せる唯一の方法だつたし、起死回生
一発逆転の一手だつた。

だが、それがいけなかつた。

あらうじとか、秋艶はメテコーサのトライカムを記憶しきまつたら
しい。

あれから一日。

あたしの体内には、秋艶を通じてメテコーサの「毒」ヒトトライカ
ムが流入してきてい。

……まあ、世の中そういう上手に話はねーって事だな。

これが唯の毒なら治療法もあるだろう。病気なら治す術もある。
だが、それが妖刀の呪いつてやつなら、それが対価だというならば、
あたしにはどうする事も出来ない。甘んじて受けるしかねーってわ
けだ。幸いにも、あたしは他の人間よりちょっとばかり丈夫に出来
てるからな。文句は言えねーってわけだ。

という事で、現状どうすることも出来ないあたしはソファーにも
たれながら、アルコールとこう召の自傷性物質をあおり、やがて、
眠りの世界へと身を落としていくのだった。

「英子ちゃん英子ちゃん英子ちゃん」

いつものスットンキヨーでストレスフリーなびーこの天真爛漫な
声が部屋内に響き渡る。

……どうやら、こつの間にか寝ちまつたらしい。時間にして一時
間くらいだらうか？

頭が痛い。
体が重い。

そして「」の虚空感。体調は、依然として最悪だった。

あたしは、喉の渴きを潤すため、田の前の「ネラルウォーター」のペットボトルを取り、一気に飲み干す。

すっかりぬるくなってしまった純水が、一瞬にしてあたしの全身を巡るのが分かる。

と、その時、先ほどまで「」であたしの名を連呼していたびーこが、ぬつと顔を出す。

「あ、英子ちゃん起きたんですね？ むふふ、丁度良かったです。私、凄いものを拾っちゃいました！！」

頭が痛い。

あたしが眠っている間、びーちゃんは一人で散歩に出ていたらしい。その上、その收集癖を遺憾なく發揮し、また良からぬものを拾ってきたらしい。

あたしは、一本目の「ネラルウォーター」を口にしながら、祈るような気持ちでその成り行きを見守る。

「じゃじゃーん、見てください英子ちゃん！」

「…………ふ…………」

あたしは口に含んだ水を一気に噴射させながら、じうきんだ。

「なんじゃーりやああああああああああああ

あたしの眼の前に現れたもの、びーーが拾ってきたもの。それは、一匹の白い馬。いや、一角の白い馬。

つまりは、ゴーリーーンだった。

「ちょ、おま、びーー。拾つたってお前、何捨て犬や捨て猫を拾つたみたいな空氣でさりとて言つてんの？ 拾つたとかそういうつくれ

ルじゃねーだろこれ

「うんうん。いいリアクションですねー、英子ちゃん。それでこそこそ私も拾つてきた甲斐があつたというものです」

分かつてない。こいつは何にも分かつちやいない。

ゴニコーン。

一般的なイメージとしちゃ、美しく氣品のある一本角の白馬つてのが有名だろ？

だがその実、こいつらは凶暴かつ好戦的な性格で、とてもじゃねーが人が飼いならす事は不可能とされている。

……が、どういうわけか、ゴニコーンはえらく大人しくびーこの側に寄り添つてゐる。

むう、じつして見ると何とも絵になる光景だぜ。つてんな事言つてる場合じやねーな。

「いや、まあ、流石のあたしも実物を見たのは初めてだからよ、想定外に驚いちまつたつてのは確かだ。でもな、びーこ？ お前、このマンションがペット禁止だつて知つてるよな？ それに、あたし達はペットは飼えないって事は、びーこも痛いくらい知つてるはずだよな？ な？」

「どうか、そもそもどうやってここまで運んできたんだよー。つて疑問は、なんつーか、怖くて聞けなかつた。

「そ、そんなの分かつてますもん。こ、この子は、その…… そうです。私のお友達なんです！」

拾得物からお友達にランクアップしたゴニコーン。

それにしても、部屋の中に馬がいる光景つてのは何ともシユールだ。いつもの部屋がまったく違つて見えるぜ。

それに、でかい。でかいんだよ。近くで見ると異様な迫力がある。

「それに、この子はとっても大人しくていい子なんですよ？ ほら、折角ですから英子ちゃんも撫でてみてくださいよー」

何が折角なのかは甚だ理解しかねるが、実際のところ確かに、興味はある。何と言つてもリアな幻獣だからな。

というわけで、一先ずあたしもびーーにならひてゴーラーンの体を撫でてみる事に。

まあ、確かに負のオーラは感じられない。だからと言つて油断しているわけじゃねーが。

「そういうや、ゴーラーンってやつは処女に弱いんだったっけか」
正確には、弱いというより、好き。言つなれば、処女好きの変態馬つづーわけだ。

「処女？」

「ああ、いや、まあ、あれだ。穢れの無い乙女に弱いんだぞ。」
いつらは

チツ、何を焦つてんだあたしは。つたぐ、やれやれだぜ。
「んで、もう気が済んだだろ？ とつとと元の場所に戻してきなさい」

「乙女だったら、英子ちゃんだって充分乙女です。言葉遣いは改善の余地アリですけど、趣味はとっても乙女チックじゃないですか」
露骨にスルーしやがつた。しかも改善の余地アリつて何だよ。五月蠅せーよ。その上、あたしの趣味にまで言及しやがつてこいつは。
……いいじゃねーか、別に。

「ふん。あたしは、その、駄目だな。うん、駄目だ。あたしは、ほら、大人な女だから。びーーに比べりやーな。色々と穢れちまつてるので。染まつちまつてるのさ、色々と。… 分かるだろ？」

必死にあたしがそう弁明しているにも関わらず、件のゴーラーンは何故かあたしの方に歩みよってきて、その顔をあたしに近づけてくる。

憎たらしくぐらぐらに台無しだ。

「何故でしょ、その割にその子、すこじこ英子ちゃんに懷いちやつてる気がするのですが」

そう言つてジト目であたしを見つめるびーー。

いやいやいや、つーかこの場合あたしはビービーコアクションするやいんだよコンチクシヨウ。

「さつすが英子ちゃん。この中のこの女。やっぱ英子ちゃんは凄いです」

仕舞いには、ゴーローンはソファーの上のあたしの膝の上にその頭を乗せ、安心しきつた顔で… 寝やがつた。

……聞ひな。何も聞ひな。

もういい。何かもうどうでもいいわ。

疲労困憊だつたあたしは、そのまま、ゴーローンを膝の上に乗せたまま、再びまどろみの世界へと片足を突っ込んだのだった。

朝の日差しが、あたしの体を照らす。

小鳥の轉りが、あたしの耳を刺激する。

朝の澄んだ空気が、あたしの体を再起動させる。

それは、妙に目覚めのいい朝だつた。

「何だ、またあたし、ここで寝ちまつたのか。つーか、今、何時だ？」

あたしがキヨロキヨロと首を動かし時計を探していると、すっかり制服に身を包んだびーーが現れた。

その姿を見る限り、ビーハヤウモウタグ登校時間である事は間違いないらしい。

「お早'ハ'ヤウコます、英子ちゃん。昨日は良く眠れましたか？」

昨日?

びーこのその言葉をきっかけに、昨夜の記憶が一気に蘇る。

「そうだ、コーポーン。あいつはビーハヤウした?」

「勿論帰りましたよ? だつて、ペシトージャなくて私の友達ですから。また遊びに来るつて言つてました」

帰つた?

何て人騒がせな幻獣だ。それはそうと、結局あいつは何しに来たんだ? 単にびーこに拾われただけ? それとも本当にびーこのお友達つてやつだつたのか?

「知つてますか? 英子ちゃん。コーポーンセんせの女守護者。

その角には不思議な力があるとされています」

「ああ、それくらこはな… そつこや、何だか妙に体が軽いな。気分も悪くねー」

「英子ちゃん、あの刀を使つよつになつてから毎晩つなされていますよね?」

なんてこつた。

知つてたのかよ、びーこの奴。まあ、今田みたいにソファーデ寝ちまつ事もあるからな。そりや分かるか。

「名探偵びーこを見ぐびつてはいけません。英子ちゃんに關する」となら、わからぬ事など殆ど無いのです!」

いや、どうでもいいが、そこは別に言つ切つてもいいんじやねーか? 言葉の綾だし。

「それと英子ちゃん、英子ちゃんの刀、見てみてください」

そんな意味深なびーこの発言を受けて、つらられるよつこして部屋の片隅に眼を向けると…

……！

「これは、秋艶？」

実のところ、あたしの秋艶はメテユーサとの一戦で、その柄の部分を破壊していた。

そりやそりや。あんな殺人的に長い爪で握られれば、いくら妖刀

といえど、全くの無傷ではいられない。

だが、その柄が見事に修復されていた。いや、修復といつより全くの別物と言つても過言ではないだろう。

これまでの黒い柄と打つて變つて純白の白い柄。
ユニコーンの角で作られた穢れの無い白い柄。

「おいおいマジかよ、これ」

「ユニコーンさんからのお礼だそりですよ？ 一晩その膝を貸して
もらつたお礼」

これまでの妖刀とはまるで逆のオーラ。

いや、もはやこれは妖刀なんかじゃない。これは……。

「びーー、お前……」

「英子ちゃん。確かに私の中に在る力は、色んな良くないものを惹き付けてしまいますけど、たまにはこういう事も出来るんですよ？」

あたしは、思わず涙目になりそうなのをぐつと堪え、びーーを見つめた。

びーーは、ちゃんと自分の力と向き合つていい。理解しようとしている。いや、既にその力を徐々に制御してきている。

あたしこいつては、その事実が何より嬉しかった。

きっと、今のびーこなら、この先その力を才能を、完璧に制御し理解出来る日も遠からずやってくるのだろう。

きっと。

END

第一一十七話 「饅頭怖い」

第一一十七話 「饅頭怖い」

「お、危ない危ない。賞味期限今日までじゃねーか」

あたしは冷蔵庫の奥深くで眠っていた、とある菓子箱を引っ張り出した。

××饅頭。

恐らく、以前びーーじが気まぐれで買つてきて、そのままずっと冷蔵庫に放置していたものだらう。

賞味期限は今日まで。

別にあたしは、いちいちそんな細かいことにじだわっちゃいねーが、一応期限は期限。

ーーのまま再び冷蔵庫奥深くに戻しあまつと、次に再び田の田を浴びるのは何時になるか分からない。

ま、こつじうのはとつとと食つちまつに限るつて話だ。食い物を粗末にするのはあたしの流儀に反するからな。

とじう事であたしは、びーーじを呼んで在庫整理に取り掛かったのだった。

「わあー、お饅頭ですか。1、2、3… 全部で12個もありますよ、英子ちゃん。半分に分けましょう」

あたしは甘いものが好きってわけじゃない。

女が皆、甘い物好きだって言つるのは大きな勘違いだ。

むしろあたしは辛いものが好物。

「Mタバスト」は常に持ち歩いている。

「いや、その気持ちは有り難いんだが、そんなには食えねーよ」

「えー、何ですかー。はつ、まさかダイエット！？」

「生憎だが、んなもん生まれてこの方一度もしたことねーな」

あたしのそんな発言がよほど可笑しかったのか、びーこはジト目

であたしを見つめた後、溜息混じりに言ひ。

「それはそれで何だかずるい気がします。つーんだ、いいですよーん。あたしが英子ちゃんの分も食べちゃいますから」

そう言ってびーこが手をつけようとした瞬間、ぽんつと「うおよ

そ超常現象的な怪音を轟かせながら、一匹の緑の発光体が現れた。

「な、な、何事ですか？」

緑の発光体。

デジヤヴか？　いや、違う。あたしはつここの間、これと似たよ

うなものと遭遇している。

確かあれは図書館だった。

そう、つまりこいつは、ピクシーだ。

「この間あたしが出会ったのは音を盗むピクシーの亞種だった。

緑色の服に緑色の帽子。だが、どうやら今回のことのは、純種のピクシーらしい。

「妖精風情が何の用だ？　つたぐ、てめーらは憲りのつて事を知らねーのかよ」

「英子ちゃん英子ちゃん、この子、何だかすつゞく怒りますよ？　勝負しろって言つてます」

「ああ？　…　そつか。ふん、この間のヤツの弔い合戦つてわけか？」

まあ、別に殺しちゃいねーが。

つまりこいつは、この間あたしが灸をすえてやつた図書館のピクシーオーのお仲間つてやつらしい。

いいじゃねーか。あたしはそういう骨のある奴は嫌いじゃない。

「いいぜ。そういうことなら受けたで、何でやる？ その意気に免じて方法は任せたが」

その瞬間、あたし達の眼の前のピクシーや、その本文とも言つべきイタズラっぽいにやけ顔を覗かせながら、パチンと指を鳴らした。……が、特に何かが起こったわけでもなく。

「何だ何だ？」

「ふむふむ。英子ちゃん、この子が言つには勝負方法は激辛ロシアンルーレットだそうです」

「げ、激辛？ ロシアンルーレット？」

相手が相手だけに、単なる戦闘行為になるとは思つちやいなかつたが、予想外な何とも俗っぽいその返答に、あたしは困惑を隠しきれなかつた。

「えーっとですね、わざのでの、このお饅頭さん達の半分を激辛に変えちやつたらしいです。それを三人で一つずつ食べていって、最後まで残つていた者が勝者だそうです。と言いますか、えー、私もやるんですかー？」 ぶーぶー

これまで様々な妖怪、魑魅魍魎、伝承、モンスター達との勝負を受けてきたが、間違いない、今回が歴代ワーストワンの勝負になるであろうことは眼に見えていた。

つーか何だよそのゴールデンのバラエティー番組みてーな勝負は。ガキか！ や、ガキか。

まあいい。一度引き受けたと言つちまつた以上、例えどんなくだらねー勝負だろと途中で投げ出すのはあたしの流儀に反する。それに、何と言つてもあたしは辛党だ。ちょっとやせつとの辛をじやびくともしねーのさ。

「その勝負乗った。で、順番はどうする？ 異論が無けりやあたし
から始めさせてもらうが。それと、念のために一応シャツフルさせ
てもらうぜ」

あたしは、念には念を入れて眼の前の12個の饅頭をシャツフルしつつ、皿に並べる。

眼の前に整列する12個の茶色いパンドラ。

その見た目には僅かの差異もない。やはり見た目での判断は困難である。ピクシーの言葉が眞実ならば、12個中その半分が激辛。当然ながら確率は二分の一。50%。

わへ、どうあるへ。あたし。

じにせいいち激辛党員として、辛さって奴の氣を探るんだ。

なあーに 精神統一し 明鏡止水の心で望めはすと見えで
くるわけねーだろが!!!!

馬鹿があたしは。

そもそも何だよ、辛さの気つて。んなもんねーよ。
何わけわかんねー思考を繰り広げてんだよあたし。
ま、まずいぜ。

あたしとしたことが、すっかりピクシー・レッド状態じゃねーか。
ペースを乱されまくりじゃねーか。やるなピクシー。

「うなつたら、君は己の直感のみを信じて特攻するしかない。」

あたしは、一番端の饅頭を掴み、一気に頬張った。

「ふつ。何だよ、何ともねーじゃねーか。」つやヤー……ふつ、つぐ

ぐえええええええ、「ゴフツ」

あたしは、氏んだ。

あたしの中に残された一握りの乙女としての矜持と、ボディーガードとしての意地と根性で何とかびーこの前での全リバースだけは逃れたものの、まるで全身に電流が流れるかのような常軌を逸した辛さ、いや、むしろ痛覚と言つても差し支えないそれが、あたしの全身を蝕む。

辛いといつより痛い。辛いといつより熱い。辛いといつより呼吸困難。

あたしの体を幾重もの苦痛が一気に駆け巡る。

そんなフローリングでのた打ち回るあたしに、びーこが一言。
「まーつたまた英子ちゃんつてば、お茶目さんなんですから。幾らなんでもそれはオーバーリアクションですよ」

満面の笑みでぱくりと一口で平らげるびーこ。

「んー、美味しい。これは緑茶が欲しくなりますね」
流石はびーこ。この程度の確率、びーこにとっちゃまだまだ序の口なのだろう。

この手の勝負事はあたしよりびーこの方が上手だ。
ありとあらゆるものを惹き付けちまつてことは、ある意味、運否天賦も惹き付けることが出来るつて事。
何を隠そう、びーこはあれで運がいいのだ。

つーか逆にあたしは運が無いからな、壊滅的に。それを失念して
いた以上、最初つからあたしに勝機は無かつた。

声は出ないし、全身の震えと発汗の止まらないあたしは、素直に
一人の勝負の成り行きを見守る事にした。
……情けなく床にうずくまりながら。

続いて件のピクシーの番。

奴は、血の身長の三分の一もあらつかといつ饅頭を数秒とかからずペロッと平らげた。

「すげーなおい。

あの小さな体のどこにそれだけの量が入ったのだろう。

そして、どうやら奴もセーフ。

これで確率的には9分の5。

確率的には厳しいが、びーーーの超運つてやつを見せてくれ。

「んぐんぐ。あ、すみません。一気に三つも食べちゃいました。で
へへ」

「なん、だと？」

「ここにきて、撃破りの三つ一氣食い。びーーー、なんて恐ろしい子。

やはり、びーーーの前にして確率などとこいつものはその意味を成していないのだ。

今日ばかりはびーーーの神がかり的な才能に感謝しねーとな。

さて、確率は6分の5。追い詰められたピクシーは、あたしと同じく全身を小刻みに震わせ、滝のような汗を流している。奴にしてみれば、完璧に想定外な展開なのだ。

「おい、どうしたイタズラ妖精。ま、さ、か、ギブアップなんてしないよな？」

あたしは床に這い蹲りながら、擦れた声でピクシーを煽る。ぶつちやけ威圧感はゼロである。

が、律儀にもそんなあたしに煽られるよつて妖精は茶色をしたパンダに一気に喰らいつく。

あたし達の眼の前で、茶色の虹を咲かせる哀れなピクシー。

あーらり、ご愁傷様。

ピクシーはびーーの強運の前に散つた。

「やれやれだぜ、実に不毛な時間だつた。時間の無駄使いつてのはいうこと言つんだらうな……まあ、初手で散つたあたしが言えた義理じやねーけど」

何にしても、今回はびーーの独壇場だつた。

真面目な話、びーーがより幸運だけを惹き付ける事が出来るようになれば、その体質も今より改善されていくのだろう。

今回はその兆しが見えただけでも、あたしにとつてはまるで無駄な時間だつたつてわけじやねーのかもしれない。

あたしがそんな事を考えていたとき、横に居たびーーがポツリと言つ。

「残り5個。英子ちゃんも妖精さんもギブアップみたいですし、勿体無いから私が食べちゃいますね？」

「は？ おいおい、何を言つて…」

あたしが止めるまもなく、ひょいひょいと一気に全てを口に運ぶびーー。

1個でも氐ねるつてのこ、5個も食べ切つたら…。

が、そんなあたしの心配を余所にケロリとした顔でお茶を啜るびーー。

……え？

「び、びーー? む前、何とも無いのか? 辛いだろ? 辛いよな?
?」

「いえいえ。普通に美味しかったですよ?」

あ、ヤバいな。今のびーー、後光が射して見えるぜ。

つまりは、幸運でも何でもなく、唯単にびーーの味覚が可笑しい
つてだけの話。

つたく、相変わらず予想の斜め上を行く奴だぜ。

END

第一十八話 「ポルポルはかく語りき」

第一十八話 「ポルポルはかく語りき」

夜。

突如としてマンション内に響く渡るびーこの叫び声。
絹を裂くような女性の叫び声つてやつは、きっとこいつの声の事
を言つんだろう。

あたしは、ソファーから飛び起きると全速力で声のする方向、キ
ッチンへと向かつた。

「どうしたびーこ！ 何があつた！」

その光景を見た瞬間、あたしは思わず言葉を失つた。
ありのまま、今、あたしの眼の前で起こつたことを話すぜ。

あたしがキッチンにたどり着いたら、びーこが、冷蔵庫に食われ
ていた。

な……何を言つてゐのかわからぬーと思うが、あたしもさっぱり
分からぬ。

催眠術だとか、妄想だとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつとも恐ろしいものの片鱗を味わつた氣分だぜ。

と、まあ、悪ふざけはこの辺にしておくとして、あたしは改めて眼の前の現実つてやつを直視した。

物が長い年月を経ると意思を持つたり、力を持つちまつて現象はあまりに有名。いわゆる九十九神つてやつだ。

だが、今回の場合相手は冷蔵庫。しかも最新式。100年はおろか1年だってまだ経っちゃいねー新品だ。

つまり、あたしの眼の前のコイツは、九十九神などではなく単なる憑物の一種ということ。

そしてあたしは、コイツを見た事がある。

白くて、でかくて、壁のようなその巨体。 そう、ぬりかべだ。

時代が変化するよつて、妖怪達もまた、時代に合わせその性質を変える。

この間の猿がいい例だ。あいつらは本来睡眠中に見るコメを食う存在だつたが、びーこを襲つた猿は人の夢を喰らつた。

それが何を意味するかは割愛するが、つまりはそういう事だ。

そして、このぬりかべという妖怪。こいつもまあ、有名な妖怪だけに知らぬ一奴はないだろう。

大昔のぬりかべは突然路上に現れて、人々の行く手を阻害するつて妖怪だった。

が、こと現代においては人ン家の冷蔵庫に寄生し、その中身はおろか近づく人間を食つちまうつてんだから始末におえない。

さて、こひで一つ問題だ。

この冷蔵庫ぬりかべに食われたびーこを助け出すには、一体どうすればいいか？

：

答えは一つ。

A ぬりかべそのものを祓うこと。

B 寄生している冷蔵庫そのものを物理的に破壊する事。

あたしはびーこと違つてシスターの卵でも除霊師でも、退魔師でも、霊能力者でもエクソシストでもシャーマンでもない。

あたしは、単なるびーことお守兼ボディーガード兼保護者みんな存在だ。

そんなあたしに出来るのは、あたしとびーの田の前に立ち塞がる糞野郎共を揃つて無間送りにしてやることだけ。つまりは、ぶつた切るだけだ。

だから、最初からあたしの答えは決まつてゐる。

びーこはあの冷蔵庫野郎に食われちまつてゐる。
奴に食われたつてことは、つまり、冷蔵庫の中に居るつてことか他ならない。

びーこの体力にも限界がある。短期でケリをつけるしかない。
しかも、奴の体は冷蔵庫とぬりかべの強度と体躯の合わせ技。いつものナイフやバッジじゃ傷一つつかねーだろつ。

と、なると、方法は一つ。

「色即是空、空即是色…… いいぜ、ぶつた切つてやるよ、我楽多野郎」

あたしは右手に秋艶を召喚し、精神を集中させる。

とまあ、意氣込んで見たのはいーものの、いーからが問題だ。

さつきも言つた通り、あたしに出来るのは奴をぶつた切つてやる
ことだけ。だが、それには一つ、大きな問題が立ちふさがつていた。

A 奴はウンザリするくらい固いつてこと。

B これが一番の問題なんだが… 奴は、中にびーこを取り込んで
いるということ。やれやれ、なかなか大胆じゃねーか。

結論。

中のびーこを傷つけず、冷蔵庫ぬりかべだけを秋艶で一気に両断、
ぶつた斬ること。

あたしの妖刀秋艶は、元々、あの程度の壁妖怪くらいなら、たやすく切り刻めるだけの潜在能力とスペックを持つている。

だが、妖刀はあくま妖刀。あたしがその力を最大限まで引き出すことと、その力を制御する事は別問題であり、その実難しい。それはあたし自身、これまでの経験で嫌と言つほど理解してきたことだ。

本来ならば、こいつはあたしなんかにや手に負える代物じゃない。

： が、今は違う。

そうだ。この刀は既に妖刀なんかじゃねーのや。

あの女好き変態ユーローンの力を経て、秋艶は生まれ変わった。

正直に言つぜ。

あたしは、今、わくわくしている。

これは、生まれ変わった秋艶の力を試す絶好のチャンスってやつだ。

失敗すれば、びーこはただじやすまねーだろ? し、勿論あたしもただではすまないだろ?。

危急存亡の秋。だが、だからこそ、試す価値がある。

斬りたいものだけを、斬るべきものだけを斬ること。力のコントロール。気配。呼吸。居合」と氣合。

： さて、準備はいいか？ あたしは出来てる。

「さあ、秋艶。じゃじゃ馬だつたお前の、生まれ変わったその姿をあたしにみせてみな」

そう告げた後、あたしは、秋艶を構え、眼の前の壁妖怪を躊躇うことなく……斬つた。

ぬりかべは、鈍い音を立てながら、左右に真つ二つに分かれた。中からは、冷蔵庫から生まれた冷蔵庫太郎もとい、困惑した様子のびーこが姿を現す。

「え？ ええ？ えええ？」

……ふうーつ。

どうやら、びーこは五体満足。傷一つ無い様子。やれやれだぜ、流石のあたしも肝が冷えた。

「あの、私、お夕飯を作ろうと思つて冷蔵庫に近づいたら、そのまま

「食われちまつたつてわけか。一応聞くが、怪我はねーか？ まあ、

中に入つてたのは短時間だつたみてーだし、凍えるほど冷えたつてこともねーよな

「はー！ 私は大丈夫です。この通りぴんぴんしますから。ありがとう！」ぞこました、流石は英子ちゃん！」

どうやら、全てうまくいつたらしい。やれやれである。本当に。

「そりや良かつた。ま、冷蔵庫は後で買い直そうぜ」

「それに、今日のお夕飯もですよ？」

そう言つてびーこが指さす先には、哀れにも粉みじんになつた様々な食材達が、キッチンの床一面に広がつていた。

冷蔵庫ぬりかべだけをぶつた斬つたつもりだつたが、やれやれまだまだ力のコントロールが足りていなかつたらしい。

だが、この刀をいづれ使いこなせるよになれば、伝承クラスの敵、そしてあの首なし鎧野郎へのリベンジの日も近いかもしれない。

あたしは、まだまだ強くなれる。いや、強くならなきゃなんねーんだ。

是が非でも、な。

END

第二十九話 「好き嫌いは大人だけの特権」

第二十九話 「好き嫌いは大人だけの特権」

基本的に、びーこは偏食家だ。

一人暮らしをしている以上、あたしもびーこも料理の腕はそれなりに持っている。

毎日とはいからまでも、あたし達は交代で料理当番を受け持ち、自炊をしている。

で、何を隠そう今日はあたしの当番。

ちなみに、今夜のメニューはハ宝菜。
中華はあたしの得意料理だ。

「で、だ。びーこよ、言いたい事があるならハッキリ言えよ。つーか、そんな眼であたしを睨むな」

「英子ちゃん、ふざけているんですか？」

どちらかと言うと、ふざけているのはびーこの存在そのものだと思うのだが、あたしは黙つて話の成り行きを見守る。

「酷いです。酷すぎます」

： 勿論、あたしの料理の味の話なんかじゃない。

「こんなに、こんなにたくさんのお野菜さん、私、食べられないですもん。絶対無理だもん！」
だもん。じゃねーよ。

びーこは、涙目になりながら、あたしにそう訴えかけた。

訂正しよう。

びーこは偏食家というより、好き嫌いが激しいのだ。要は、単に野菜嫌いなんだ。典型的な餓鬼なのさ。

何の因果か、一応、あたしはびーこ の保護者的な役割も担つている。

とは言え、あたし自身、これまで人に自慢できるような人生を送つてきたわけじゃ断じてない。

間違。むしろ、ろくでもねー人生を歩んできただけに、他の人間に道徳を説くようなそんな崇高なマネは出来ない。

だがまあ、好き嫌いをなくしてやるくらいは、あたしの請け負える範囲内にあると思えた。

「人は誰しも一つや二つくらいは苦手なもんってのはある。だがびーこ、てめーは駄目だ」

あたしは、ビシッと眼の前の皿を指さしながら言つ。

皿に残った野菜の数々。

「びーこの場合、どう見たって一つ一つの範疇じゃねー。野菜という野菜が嫌いとか、舐めてんのか！」

「だつてえー」

「でももだつても禁止だぜ」

：さて、問題はここからだ。

野菜嫌いの人間に野菜を食べさせるにはどうすればいいか？

定石としちゃ、野菜をそれだと気づかせないレベルに調理し、料理に取り入れるといったところだろうが、生憎あたしにはそこまでの腕は無い。

こと料理の腕に関しては、圧倒的にびーこの方が上。しかも、自身は野菜嫌いの癖に、あたしのために作る料理に関しては、極普通に野菜を使つたりするから余計達が悪い。

つてなわけで、このままあたしが上から目線で説教を続けたとこ

うで、恐らく効果は薄いだわ！」

「じーじーは一計を案じて、びーーの好きそつた諺や名言の力を借りて説得してみる事にしよう。

「ちなみにだが、今日のびーじーの諺Tシャツは「焼肉定食」……つか、もはや諺でも四字熟語でもねーじゃねーか！ どに売つてんだよ、そのTシャツ。

「正義なる事が、魂の健康である。バイナイチングール」

「また唐突ですねー、英子ちゃん。ふふん、私、その名言なら知つてますよ？ でも、それがなにか？」

「むしろ、こつちが聞きたい。」

駄目だ。あたしはびーこと違つて、諺好きつてわけでも四字熟語辞典を読むのが趣味つてわけでもない。

咄嗟に頭に浮かんだのがこれだつたのだ、深い意味なんて勿論無い。

「当然、作戦は失敗だ。普段やりなれないと、これだけらいけねーよな。」

「しゃーない。やつぱり正攻法でいくしかねーか。」

「まあ、あたしが何を言いたいかつて言つとだな、一人前つづーか、仮にもシスターの卵なら好き嫌いすんじゃねーよって話」

「むむむ、それは差別ですよ英子ちゃん。シスターでありますと、何であろうと、人間誰しも好き嫌いの一つか二つはあるものです」

「ドヤ顔でそんなセリフを吐くびーじー。つーかそれ、まんまたしがさつき言つたセリフじゃねーか。これだからゆとり世代つてやつは…。いや、あたしもバリバリゆとり世代だけどぞ。」

「やれやれだぜ。知つてるか？ びーじー。食べ物を粗末にする奴は、勿体無いお化けにとり憑かれちまうんだぜ！」

「ふつふつふー。何を言い出すか思えば英子ちゃん。それは釈迦に説法といつものです。そんな子供だまし、他のお子ちゃんは騙せても、」の私は騙されませんよー。」

いや、お前も十分子供だけどな。

だが事実、勿体無いお化けなんて類の妖怪は存在しない。

正確に言つと、今は存在しない、妖怪だ。

ぬりかべの例がそうだったが、時代が変化するように、妖怪達もまた、時代に合わせその性質を変える。

この飽食飽物の現代。勿体無いお化けは、その居場所をなくした。存在の意義をなくした。

逆だ、と考える奴もいるだろ？が、それは大きな間違いだ。

あたしの柄、じゃねーから、エロがうんたらとか、そんな警鐘を訴えるつもりは毛頭ねーが、簡単に言えば時代が妖怪を殺したんだ。価値観の変遷。本質を失った妖怪は、消えるほか無い。

と、話が聊か脱線しちまつたが、今はあくまでびーこの好き嫌いの話だ。

あたしだつて何の意味も無く突然こんな子供騙しなセリフを言い放つたわけじゃない。

びーこにゃ言つてねーが、あたしはと今回のミッションを成功させたため、とある協力者を呼び寄せていた。
さてさて、上手くいきやいーんだがな。

「あのなあ、びーー。あたしはただ単に野菜嫌いを咎めてるってわけじゃねーんだよ。そりや勿論克服はしてもらひてーが、問題はそこじゃない。お前には、いや、お前だからこそ、そういう意識つてやつを持って欲しくねーのや。……と、勿体無いお化けも言つてるば

そう言つてびーーの後ろを指差すあたし。

「え？」

つられて振り向くびーー。

足元まで延びた黒髪、白い三角頭巾に白い顔、白い肌に、さながら貞子のような格好をしたその人物は……。

「………… 私、勿体無いお化け」

「ほ、ほざきやああああああああああああああ」

突如として背後に出現したその悪霊。居るはずが無い、子供騙し、だと思っていた分、その精神的反動は予想以上に大きかつたらしく、びーーには、白目をむいて気絶してしまった。

「あーーらり、御愁傷様。こりやちょっとやりすぎたかな？ つーかお前、その格好似合いすぎだ」

「………… そうかしら？」

あたしが協力を仰いだ人物、それは例のというか靈の、トイレの花子だ。

協力つづーか、遊びに來たがっていた花子に対し、どうせならと、いう事でこんな格好をさせたわけだが。

「ああ。効果は抜群だつたな」

「………… でも、これで好き嫌いが治るかどうかは微妙だと思つ

の」

まったくもつてその通り。

ちょーっとばかり荒療治すぎたかなと反省しつつ、あたしはびーーをソファーへと運ぶのだった。

END

第三十話 「Calling Me」

第三十話 「Calling Me」

またまた今晚は、びーーです。

こんな登場の仕方もかれこれ3度目と「う」とで、いい加減新鮮味に欠けるなーと思う今日この頃。

私は今、一人でお留守番をしています。

あつ、誰ですか？ 今、お前一人で大丈夫か？ つて言つた人は。 答えは勿論： 大丈夫だ、問題ない！ です。 え？ ネタが古い？ えー、私の中では未だに絶賛大ヒット中のネタなんだけどなー。

でもでも、私だって子供じゃないんです。 お留守番くらい出来て当然です。

…… はあーーつ。

いい加減一人語りも飽きちゃいました。 あーあ、やつぱり一人は退屈です。

英子ちゃん、早く帰つてこないかなー。

唐突に部屋の電話のベルが鳴つたのは、丁度私がそんな事を考えていたときでした。

英子ちゃんにはいつも馬鹿にされてしまうのですが、私はこの電話のベルの音が苦手です。

部屋中に鳴り響く金属製のベル音が、びつしても好きになれます
ん。

ちなみに、この部屋の電話はダディの趣味のアンティーク調の木
製電話。確かに部屋の雰囲気にはぴったりなんですねー。

でも、何より苦手なのが…… 真夜中に突然掛かってくる電話。

英子ちゃんは、私には滅多に電話してきません。

『そもそも一緒に住んでるんだし、お前がどこにいて何をしてる
かなんて、大体想像出来るからな。電話する意味なんてねーだろ』『
というのが英子ちゃんの言い分です。うーん、それはそれで嬉しい
ような寂しいような…… ってそんなこと考へてる場合ぢゃないです
ね。

私は慌てて電話の受話器をとりました。

「はい、法楽です」

「あ、もしもし? オレオレ、オレだよ」

随分慌てた様子の、何だか聞き覚えのない男性の声。

「あのー、どなた様でしょうか?」

ちょっとだけ思案した後、受話器の向こうの相手様はこう答えま
した。

「いやいや、お父さんだよ。実は交通事故起こしちゃったが、早急
にお金が必要なんだよ。お母さんに代わってくれるか?」

まあ大変!

……なーんちゃんて。このびーーー、見くびつてもうつては困り
ます。幾ら私だつて、それが嘘だつて事くらい分かりますからねー。
だつてだつて、日頃英子ちゃんに、ウンザリするほど言われてい

ますから。

『お前は騙され易くて信じやすい。詐欺被害者の素質がある』だなんて失礼な話ですよね？ ね？

それにして、これはこれは型通りのオレオレ詐欺さんですね。

私は、小さなため息を漏らしつつ、そのまま受話器をそつと戻すのでした。

その時です。

まるでタイミングを見計らつたかのように、再び電話のベルが部屋中に響き渡りました。

私は、大きく深呼吸して、気分を落ち着かせてから再び受話器をとります。

「はい、法楽です」

「…………」

あわ、あわわわ。今度は無言電話さんです。

「……」

何故タイミングが重なるんでしょうか？

そもそも、この部屋の電話が鳴ることは殆どありません。それなのに、たまに鳴つたと思ったらこの有様です。英子ちゃんだったら、こうこう時じうやつて対処するのでしょうか？ そういうえばこの前は、相手さんに向けて大音量でお経を流していたような…。

私は、苦笑しながらそのまま受話器をそつと戻すのでした。

あっ、そうそう。因みに、先ほどから私が口にしている「法楽」

という名前。これは、何を隠そう英子ちゃんの苗字なのです。

普段はこの苗字を使うというのが、この家の私と英子ちゃんのルールなんです。この方が何かと都合がいいからって。

と言つても、英子ちゃん曰く『そもそもあたしの場合は名前も苗字も偽名』なんだそうですが。

「へーん、英子ちゃんの本名? それって知りたいような知りたくないような。

私の場合、英子ちゃんと知り合つてからずっと英子ちゃんつて呼んでますし、今更他の呼び方をするのも何だか変な気がします。

一度ある事は三度ある。

何だかもう一度くらい電話が鳴るかもしれない。私のカンがさつきからそう囁いています。自慢ではありませんが、私のカンつて良く当たるんですよ? だつて、ほら、ね?

一人っきりの部屋に良く響く三度目のベルの音。私はちょっとだけうんざりしながら受話器をとりました。

「はーい、法楽です」

「…………」

これはちょっと予想外。またまた無言電話さんです。今夜は悪戯電話のバーゲンセールなのでしょうか?

何だかちょっとだけ怖くなつた私は、ガチャンと大きな音を立てすぐに受話器を置いてしまいました。

はあ。どうしよう。どうすれば良かつたんでしょうか?

何故ででしょうか、何となくまた掛かってきたそんな予感がします。ここは一つ、英子ちゃん流に私もお経でも流してみましょうか? でも英子ちゃんにみたいに上手くやれる自信はありませんし… だめだめ、ここで弱気になつてはいけません。私には私なりのやり方が、私にしか出来ないやり方がある筈です。

やはり、このままお互に一方通行ではいけないと私は思つのです。次、もしもまた電話が掛かってきたら、私の思いのたけをぶつけてみようと思います。お互に納得して理解しあえれば、きっと

それが一番の解決方法に違いありませんから。

私がそんな決意を新たにしたその時、予想通り四度田のベルの音が部屋に響き渡りました。

仮にも私はシスターの卵です。だからこそ、私は私の言の葉を信じて突き進むのみなのです。

「法楽です」

「……………ワタシ、メリーサン。今、」

あれ？ 今何か仰つたような？ でも一度決意した私は簡単には止まりません。

「いいですか？ あなたの無言電話がいかに相手に迷惑をかけているか、どれだけ不安にさせているか分かりますか？ あなたには思いやりが足りていません。相手の立場や気持ちになつて考えてみてください。あなたたつて誰かにいぢわるされたら嫌でしょ？ 私は嫌です。でもでも、英子ちゃんつてばいっつもいぢわる言つんですね？ 酷いですねー？ 誰にだつて好き嫌いくらいありますもんね？ つてごめんなさい、少し話が逸れちゃいましたね。つまりですね、私が何を言いたいかと言つとですね、ほんの少しでも、人間同士がお互いに思いやる気持ちを持つことが出来たら、この世界から争いや犯罪、戦争だつてきつと無くなると、私はそう信じています。だからこそ、まずは私達が気持ちを通わせ、互いに思いやることが出来たらきっと素敵で素晴らしい一步になると思いませんか？

だからもう、無言電話なんて止めましょう？ ね？ ね？

「え？ HH。ハイ。す、スマスマセンデシタ」

やつた！ やりました。私の言の葉が受話器の向いの無言電話さんの心を動かしたんです！ 流石私です。どうですか英子ちゃん！ 私だって日々シスターとして成長してるんですよ？

私は、今日初めて気分良く電話器を置くことが出来たのでした。
ちやんちやん。

「びーーー。無事か！…………って何だよ、全然何ともなさそー
じやねーか。あたしの勘違いか？」

先ほどの無言電話さんから約10分後。何故か息を切らした英子
ちゃんが大慌てで私達のマンションへと帰つてきました。

「おかえりなさい英子ちゃん。どうしたんですか？ そんなに息を
切らせて」

「あー、いや。なんつーか、びーーに魅せられて引寄せられた馬鹿
の気配がしたよな気がしてや、急いで戻つて来たんだけどな」
「私は何ともありませんでしたよ？ 心配性さんですねー、英子ち
ゃんは。でもでも、それより聞いてください。私、無言電話さんを
改心させちゃつたんですよ。ジーです、凄いでしょ？」
「…………はあ？」

いひして、私のお留守番は幕を閉じたのでした。

「こんな私でもこんな形で世の中のお役に立てるのでしたら、たま
にはお留守番も悪くないですよね？ ね？」

END

第三十一話 「とあるカボチャ男への追憶」

第三十一話「とあるカボチャ男への追憶」

「ハッピーハロウィーン……」

「あー、はいはい」

「もう！ 英子ちゃん、何ですかそのローテンションは？ もうとアゲアゲで行きましょうよアゲアゲで」

いつの間にやら10月も最終日となつた今日。

やれやれ、月日が流れるのは早いもんだ。気を抜いたらこのままあつという間に年末になつちまつぜ。

そんな10月31日。

今日が何の日かすぐにパソコンと来る日本人は、やつぱり少ねーと思う。

そう、日本人にとっては未だになじみの薄いイベント……「ハロウイン」つてやつだ。

だが、イベント大好きお嬢様体质のびーこにとつて、やはりこんな企業の思惑が見え隠れする西欧被れなイベントも見逃せるものではなかつたらしく、先ほどから嬉々として部屋の飾り付けを行つている。

一方のあたしはとえいば、そんなびーこのハイテンションつぶり（つーかアゲアゲつて何だよ）に、若干辟易しつつも一人、酒を煽つていてる。

ちなみに、今夜はかぼちゃワイン。……まあ、そんな酒をチヨイスしちまうあたり、あたしもあたしで実はこのイベントを密かに楽しんじまつてるのかも知れねーが。

あたじがぐるぐると動き回るびーーこを眺めながら、そんな事を考
えていたとき、唐突に部屋のチャイムが鳴り響いた。

「あー。来ました来ました。はーはー、わよつと待つていてぐだ
せーねー」

そんなセリフを残し、嬉しそうに玄関へと向かうびーー。

やれやれ、更に騒がしくなるのか。

しかじびーーの奴、あんなにしゃせやがつて。野菜嫌いの癖し
て、こんなに部屋中カボチャで飾つて何が樂しそうなんだよ。ハロ
ウインツセマツサ、少なくともあたしには何が樂しいのかこれつぽ
つちも理解出来ねーイベントだぜ。

… ま、びーーが楽しんでんない、それはそれでいいんだがな。

が、そんなあたしの思惑とは裏腹に、玄関から聞こえてきたのは
綿を巻くよつなびーーの叫び声だつた。

あーあ、やつぱつじうなりやがつたか…。

こんな日にして、しかもこんな風に部屋を飾り付けてりや、そんなも
んどうぞ襲つてくださいと、魑魅魍魎どもに言つてゐる様なもんだ。
びーーには悪いが、こんなのは奴らを引寄せやすくしてゐるに他
ならねーんだよ。

あいつの気持ちも分からなくはねーんだけどな…… いや、やつ

ぱり甘やかしすぎかもしれない。

けどまあ、説教は一先ず後回し、あたしは急いで玄関へと向かつ
た。

「いーいーみんなさー、英子わやん。私、捕まつわやいましたー」
「だと思つた」

あたしの目の前には、びーーに包丁を突きつけ拘束中の「かぼちや野郎」が一匹。

「いっは御誂え向きだぜ。いや、今日だからいいや、か。

一見すると、カボチャ頭にマントを装備した子供に見えなくも無い。だが、そもそもただの子供が、わざわざこんな日のこんな時間にこのマンションにやつてくるはずが無い。

ジャックオーランタン。

彷徨える魂、つまりは正真正銘のハロウインの化けモンつてやつだ。

出るべくして出た。呼ばれるべくして呼ばれたって感じだな。真意のほどは、こいつ自身にしか分からねーが。

「いずれにしても、だ。あたしの目の前でびーーを人質に取るたあ、いい度胸じやねーかよ、カボチャ野郎」

「キヒヒヒヒヒ、トリック・オア・トリート…」

右手にカボチャも簡単に両断出来そうな出刃包丁。左手にランタン。

ランタンに照らし出された出刃が不気味に光っている。つたく、そもそも何で出刃なんだよコイツ。

「あー、はいはい。お菓子をくれなきやイタズラするぞってか?

：「気がついてるか? びーーを人質に取った時点で、お前の行動は既にイタズラの範疇を超えてちまつてゐるや」

「トリック・オア・トリート!…」

「……」

：「成る程。覚悟は出来てるってわけか。

デジャブか?

あーあ。

一体いつからあたしはこんな役目をするよつになつちまつたんだ

? つたぐ、じつじは慈善事業やボランティアじゃねーってんだ。

「パンプキンパイを切り分ける位なら、これで十分だぜ」

あたしは懐からいつものナイフを取り出し、精神を集中させる。

「月は村雲花に風、月夜に提灯夏火鉢… 今宵の我が月は、満月！」

いいぜ、ぶつた切つてやるよ… それがあ前の望みならな…」

あたしは、蒼白く光をナイフを携え、びーこに囁く。

「びーこ、絶対動くんじゃねーぞ。こんな茶番、とつとと終わらせよーぜ」

「はい。私は、いつだって英子ちゃんを信じますから

どうやら、びーこの覚悟も決まつたらしい。それを態度で示すかのように、そつと目を瞑るびーこ。

あたしは、びーこが目を閉じると同時に、一気にカボチャ野郎に詰め寄り、そして、奴の体に蒼く煌くナイフを突き立てた。

奴に、抵抗や回避のそぶりは全く見られなかつた。糞、やはり、最初からこれが狙いだつたのだろう。

あたしの一撃を受けたカボチャ野郎の体は、声も上げずに消滅した。最後の一瞬、あのかぼちゃ頭が少しだけ微笑んだような、そんな風に見えたのは、恐らくあたしにも酔いが廻ってきたためだろう。

そして、後に残つたのは奴が被つていたカボチャのみ。

「馬鹿野郎が。やり方なら他にもあつただろ?」

あたしは、玄関に転がつたカボチャヘッドを見ながら、ぽつりとそんな事を呟いてしまつた。

「英子ちゃん、それってどういふことですか?」

そんなあたしの独り言を、耳聴く聞きつけるびーこ。

「…こんな話を知つてるか? ジャックオーランタンって悪霊は

元々唯の人間だつたんだ。だが、命知らずのそいつはあるうことが悪魔にイタズラを働いた。結果としてそいつは、悪魔とある契約を結んだんだ

「はあー、悪魔さんにイタズラをしちゃうなんて、随分と勇気のある方ですねー。英子ちゃんみたい。それで、契約とは？」

「勇気と好奇心は別モンだぜ。悪魔を罠に陥れて結んだ契約、それは、自分が死んでも地獄へ落ちないようにならつてものだつた」

「えー、そんなのズルイー」

「まあな。だが、歴史上悪魔と契約を結んで上手くいった奴なんて殆どいない。こいつの場合もその例外じゃない。だいたい、悪魔と契約した奴がすんなり天国に入れると思うか？　死後、当然の如くそいつは天国に入ることを許されなかつた。だが、契約上地獄にも入れない。後は察しの通りだ。カボチャで哀れなそのツラを隠して、ランタンの火を頼りに安住の地を探して永遠に彷徨う

「何だか可哀想な話ですね」

びーこは、カボチャヘッドを指でツンツンとつつきながらぱつりとそう呟いた。

「あいつの持つていた出刃包丁。ありやフェイクだ。見せ掛けだけの殺傷能力の無いおもちゃだつた。それに、びーこに対する惡意がまるで感じられなかつた」

「英子ちゃん、それって」

「さあな。さつきの話もただの一説だし。眞実は奴のみぞ知る、さ」
天国にも地獄にも逝けず彷徨う魂。あいつが何者であれ、どんな思惑があつたにしても、やはり、あたしが出来るのはあいつを無闇送りにすることだけだつた。それは変わらない。

「生半可な気持ちで悪魔なんぞをからかうからこうなるのさ。いずれにしてもいい勉強になつたろうか…　それを生かす機会がねーつてのが哀れだがな」

リビングへと戻ったあたし達を待ち受けていたのは、ほろ酔い姿の花子だった。

「あっ、花子ちゃん！　来ててくれたんですね！」

「…………　遅い、二人とも遅いわ」

「…………　こいつ、いつの間に？　とは言え、最初からこいつが玄関から呼び鈴鳴らして入ってくるとは思っちゃいなかつたが。つてか、あたしのカボチャワインを一人で何本空けてんだよ！　この野郎、勝手に飲みやがつてええ。」

「くうら花子！　どこから現れやがつた！」

「…………　何いつてるの？　最初から居たわ」

「はあ？　どこにだよ」

「トイレ」

「だーかーらー。人んちのトイレに籠るんじゃねーって何度も言つてんだる！　つーか、それは居たとは言わねーから？」

「…………　トリックオアトリート」

「お前もかよ！　つてか、あたしの酒でいい感じに酔つ払いやがつて。それにしても、ハロウインなんて西欧のイベントを楽しむニッポン妖怪つてどうなのよ？　イデオロギー的に考えて。」

「でもでも、さつきの英子ちゃんのお話から考へると、トリックオアトリートってセリフも何だか皮肉な感じですね」

「違ひない。まあ、イタズラ行為もほどほどにして事だな」

「あたしのそんなセリフに対し、感慨深げにつんうんと頷く花子。が、何故かジト目のびーこがぽつり。」

「お一人には言われたくないですね、それ」

「やれやれ。この前のドッキリの事、まだ根に持つてんのかよ。相

変わらず頑固な奴だぜ。

あたしは、苦笑いを浮かべながら新たなカボチャワインのコルクを空ける。

今宵はハロウィン。どこかの誰かの、彷徨える魂に乾杯だ。

END

第三十一話 「腐乱死体だ フランちゃん!」

第三十一話 「腐乱死体だ フランちゃん!」

とひとひ。

とひとひ」今までやつて来てしまった…… ぴょん。

思えば長い道のりだった。田を瞑れば思い出す、長く険しかった苦難の道のり。

あれもこれも、全ては我が一族復興のため。

そう。

だからこそ、アタイは今、ここにいる…… ぴょん。

「で、さつきからお前は何やつてんだ? 人ン家の部屋の前で「ぴょん? ほ、ほぎゃああアアアアア嗚呼」
「いや、そんなに驚かれるようなことしちゃいねーだひ、まだ。それとも、何が疚しい事でもあんのか? 事と場合によつては生かしちゃおけねーが」

あ、あわわわわ。焦るな、焦るなアタイ。まずは落ち着くぴょん。

この展開は予想通り。想定済み、想定の範囲内ぴょん。

アタイの田の前、と書つかいつの間にか背後に立っていた威圧感抜群の鬼のよ^うなこの女こそ、噂に聞くアイツに違いない。

そう。

地獄の門番ペットショ じや無くて、地獄の門番、法楽英子

に違いないぴょん。

ぐぬぬ。しかし、早くもジヨーカーのお出ましとは。まずはこいつを何とかしないとぴょん。

アタイがそんな風に瞬時のうちに108の謀略を巡らせていた正にその時、唐突にマンションの部屋のドアが開いた。そして、ドアの隙間からひょっこりと顔を出した人物。アタイが遠路はるばるここまでやつてきた目的。それは…

「英子ちゃん？ どなたかの声がしたと思つたら、ドアの前で一体何をしているんですか？」

「びーこか。今帰つてきたんだが、あたし達の部屋の前に見知らぬ奴がいたもんでな。いや、むしろ見知らぬ奴というより、思い切り不審人物。つーか、まあ、いつものパターンだなこりゃ」

「そうやって決め付けるのは良くないですよ、英子ちゃん。ほら、花子ちゃんのような例もありますし。そもそも、そういう悪い幽霊さんや妖怪さんだったら、いつやってドアから部屋に入つとほしないものです」

「詭弁だな。例えドアから入つてこようが、トイレから入つてこようが、こいつが不審人物であることに変わりは無い。だつてこいつ……腐つてるし」

「こちらの意思をガン無視した一人の話し合いの末、何故かすんなりと奴らの居住スペースへの侵入に成功したアタイ。

アタイは、リビングルームに案内され、一つのテーブルを挟んでターゲットと向き合つている。ちなみに側のソファーには、だらりとくつろぎながらも、その目だけは先ほどからアタイを鋭く射抜い

ている地獄の門番がギロリ。

このパターンは、我が108の事前シミュレーションにも無かつたパターンだぴょん。

とはいえ、ここからが本番。

我が使命のため、ターゲットにはアタイのこの手で、完全なる死を与えなければならないぴょん。

それはそうと、先ほどからちょっとだけ緊張してきたかも。

ほら、さつきからアタイの心臓の音が……全く、聞こえないぴょん。だつてだつて、アタイは腐乱死体だからNEというわけで、いざ、ミッションスタートぴょん。

「……で、最初の質問に戻るわけだが。結局のところお前は何もんだ？ 何を企んでここまでやって来た」

「はいはいはーい。私、知つてます。あなたはキョンシーさんですよね？ ね？」

何故かテンションの高いターゲット。地獄の門番の制止を振り切つてアタイを部屋に招き入れたのもコイツだし、これつてもしかしてもしかすると…… 聞いていたよりチョロイぴょんか？ くふふふ、警戒心がなさ過ぎぴょん 後は適当に話を呑わせて。

「いかにも。由緒正しきキョンシーアイ族が一人、フランとはアタイのことぴょん」

「待て待て。まずそのキョンシーってのが胡散臭い。キョンシーってのは、額にお札を貼つた死体の癖に、一切腐敗せず好き勝手に動き回るつていう中国産の妖怪だぜ？」

つむむ、流石は地獄の門番だぴょん。このことは何でもお見通しつてわけだぴょんね？ だがしかし、こちらも負けるわけにはいかないぴょん。

「いかにもいかにも。正にアタイのことぴょんね」

「お前、自分の姿を鏡で見たことあるか？」つーか、金髪西欧人のキヨンシーがどこの世界にいるってんだよ。しかも腐ってる！ おまけにウサ耳だと？ ふざけるな。認めない。あたしは断じて認めねーぞ。この面白ゾンビ野郎」

「ゾンビじゃないぴょん！ キヨンシーだぴょん！ この通り、ちやんとお札もついてるぴょん！ ぴょんぴょん跳ねるぴょん！」

「おいおい、興奮して臓物を撒き散らすなよ」

「キヨ、キヨンシーには良くあることぴょん」

……法樂えいこおおおお。

さつきから聞いていれば、アタイのグラスハートにガンガン傷をつけてきやがつてええええええええ。

話に聞いた通り、まるで鬼のよつな、悪魔のよつな女ぴょん。こいつ、人の悪口を言つてはいけませんつて、学校で習わなかつたぴょんか？

ターゲットを屠るためにも、やはりまずはあいつを何とかしないと…… そうだ！ いつその事あいつをこちら側に引き入れてしまえばいいぴょん。

あいつを味方に出来れば文字通り鬼に金棒ぴょん。くふくふ。さつすがアタイ、実に汚えてる

よーし。そうと決まれば善は急げぴょん。何とか隙を見ていつちょガブリと一かじりしてやるぴょん。

「あつ、急に眩暈が」

アタイは、極々自然なそぶりでお口をあんぐり、牙むき出し。が、憎らしい法樂英子はひらりと身をかわす。

Shift!!

コンチクショウー！

「お前が、今、露骨にあたしの事囁もつとしたり? やつぱりキヨンシーじゃなくてゾンビじゃねーか」

「ひ、貧血ぴょん。ゾンビは常に血が足りないんだぴょん。その上アタイ、低血圧なんだぴょん」

「やつぱりゾンビじゃねーか! 今、自分で言つたよな? 確かに言つたぜ! つーか、もつとまともな言い訳はねーのかよつ。まあ、この際お前が何者なのかなんぞ、どうでもいい。問題はお前がここに何の目的でやつてきたかだ」

「や、それは……」

「どうする? どうするアタイ。

「こで選択肢を間違えれば一発アウト。地獄の門番、鬼の法楽英子の妖刀の鎧になつてしまつぴょん。

と言つたきから物凄い睨まれまくつてゐぴょん。こ、怖いぴょん。ひしひしと殺意の波動を感じるぴょん。殺る気満々ぴょん。ガクガクブルブル。アタイ、何かもう色んなところから色んなものが駄々漏れしそうだぴょん。し、心臓が今にも止まりそうだぴょん……勿論、キヨンシーだからとつぐの昔に止まつてゐナビズエ

といふことで、ここは慎重に、あくまで慎重に……。

「英子ちゃん英子ちゃん、そんなの簡単ですよ。この子はさうと、私とお友達になるために来て下さつたに違ひありません!」

「……グッデ! その通りぴょん」

「なーにがグッデだ、ゾンビ野郎。脳みそまで腐つてんのか知らねーが、どうせびーこを殺して一族の名を上げようとか、復興させようとか、なんくだらねーことを企んでのこにやつてきたんだろ? しかも仮にもキヨンシーの癖して、たつた一人で乗り込んでくるあたり、まともな仲間のいないはぐれモノつてとこだな。もしかすると、自分を馬鹿にした同胞達を見返してやりたいつてのが、本音かもな。違うか?」

「く、腐つてないぴょん！　この通り、ぴょんぴょんしてゐるぴょん」「イヤ、そこは否定すんなよ。実際腐つてゐるし、手、もげてんぞ。しつかりくつつけとけよな。びーーにもびーーこだ、脳内お花畠も大概にしろよ？　普通に考えりや分かることじゅねーか。こいつはまともじやない、そんなの餓鬼でも分かるぜ」

ぐぬぬぬぬ、法楽英子許すまじ！！

……でも、実際のところの言ひ通り。

アタイはこの見た目のせいで、キヨンシー仲間達から受け入れられないのけ者。アタイのセンス溢れるあまりに未来的なこの姿は、仲間達からは嘲笑的。アタイはそれが悔しくて、奴らを見返したくて、単身ここまで乗り込んできたんだぴょん。だが、それもこれまで。

正体どころか素性まで地獄の門番に見抜かれてしまった今、作戦は完全に失敗。所詮アタイは出来損ないの腐乱死体。まともなキヨンシーにすら成れなかつた落ちこぼれぴょん。

アタイは、アタイは…。

「そんな言い方はあんまりです英子ちゃん！　彼女がどんな姿であれ、見た目であれ、心はキヨンシーそのものなんです。私達が信じてあげなくて誰が信じるつて言つんですか。フランちゃんは立派なキヨンシーさんです。それでいいじゃないですか。さあ、私とお友達になりましたようフランちゃん。皆仲良く、平和が一番です。ね？　ね？」

「あ、アタイのこと、キヨンシーつて認めてくれるぴょんか？　こんな風に腐つてて西欧人でウサ耳のアタイを、キヨンシーだつて信じてくれるぴょんか？」

「勿論です。フクンちゅうさんはとても良いキヨンジャーさんです。私が
保証します」

「… ひひひひひひひひひひ、あひ、がとう。そして、ありがと
う、ぴょん」

そんなターゲットからの優しい声かけに対し、気が付けばアタイ
は、涙ながらに實にいい声でそう言つのであった。完。

え？ あれ？ アタイ、一体何ここわざわざこんなところまで来
たんだつけ？

うーん。
まあいつか。

キヨンシーには良くあることだよNE

それに、アタイ今、何だか凄く晴れ晴れとした實に良い気分なん
だぴょん。

「いやいやいや、良いのかこれで？ つーか、なんなんだよ、この
茶番劇は」

…… そんなの、むしろアタイが聞きたいぴょん。

END

第三十二話 「馬鹿は風邪を引かない。ただ風の様に生れるのみ」

あたしも、このところの気候の変化は異常だと思つ。

暑くなつたり寒くなつたり。やつと涼くなつたと思つたり、やはつまた暑くなつたり。

急激な寒暖の差つてやつは、思つた以上に体に負担が掛かるものらしく。

… らしく、ところはあたし血氣はもう感じていないから。当事者ではないから。だから、らしく。

あたしは、新しい水枕を用意すると、再びびーーの待つ部屋へと戻る。

「おー、田が覚めたかびーー。気分はどうだ？」

「んみゅー。お早う！」さこます、英子ちゃん」

「ああ。お早う。時間帶じやねーけどな。よし、熱測つてみようぜ。ちよつとは下がつてつやせーんだが」

あたしは、体温計をびーーに渡し、そのトロに冷却シートを貼り、水枕を替える。

甲斐甲斐しくも、あれやこれやと話題を焼くあたし。これはまあ、所謂看病つてやつだ。

びーーの体調管理もあたしの仕事の一つ。本来ならまづ、風邪を

ひかねー よつ氣を使わなきやならねー と じろだが、一旦引いちまつたモノは仕方がない。そもそもびーこは、あたしと違つてもやしつ子＆お嬢様体质だからな。

基本的にここにはあたしとびーこの一 人しか居ない。最近は何故かびーこに看病されるつてパターンが多かつたし、たまにはこりやつてあたしが直々にびーこのやつを看病するつてパターンも悪くはない。

それに、今回はあいつも居ることだし。

「………… 英子。これ、届いた」

噂をすれば、だ。

「またかよ。で、花子、今度は誰から何が届いたんだ？」

「………… お馬さんから、スク水ね」

「あの変体馬!!!!」

あたしは、頭を抱えつつ、ぞんざいにコーコーンから届いたというスクール水着を部屋の隅へと放り投げた。

「何、だか悪いですね。皆さんに気を使わせてしまつて」

「あたしには、面白半分に送りつけてるだけに思えて仕方がねーがな」

人間ならば、誰かが風邪を引いたとき、その人のお見舞いをするという行為自体、何ら不思議はない。むしろ感心すべき好意だと思う。

だがしかし、びーこに至つてはそんな当たり前の行為すら普通とは行かないらしい。

ただでさえ、風邪で弱つて いるところにつけて、大量の魑魅魍魎、妖怪、伝承、悪霊の類がやつてきたらどうなるか。そんものは火を見るより明らか。

だからこそあたしは、敵味方と問わず、何時にも増してこのマンションへ侵入しようとする輩の徹底排除を固く誓つていた。

「…………… 英子。また悪靈が出た」

「つたく、懲りねー野郎共だぜ。分かつた、速攻片付けてくるから
びーー」を頼む

「…………… おつけー」

だが、どれだけあたしが気を張つていようと、来るものは来てしまつ。それがびーーの力であり、あたしの仕事だ。

まあ、弱つている時に攻めるなんてのは、誰だつて思いつく常套手段。だからこそあたしは、先ほどからびーーの看病と馬鹿退治で行つたりきたり。

今日も今日とて遊びに来ていた花子に手伝わせちやいるが、全くもつて手が足りない。

あたしは、目の前の雑魚達を秒速でぶつた切ると、再びびーーの待つ部屋へと戻る。

「悪いな、花子。また暫く見張りと荷物の受け取りをお願いできるか?」

「ククリと一度だけ頷いた花子は、音もなく部屋から消える。

今、あたしの頭を悩ませているのは、何も悪靈の類だけではない。先程ユニークーンから届いたスク水が良い例だが、何故かびーーやあたしの知り合い達から続々とお見舞いの品が届いているのだ。

あたしがいつにも増して気配を廻らせてるおかげで、やつらが直接ここにやつてくることはねーみたいだが、その代わりにってわけらしい。

正直、そういう行為自体を咎める気は当然ねーんだが、問題は、例外なくその送られてくるものが総じて役に立たないどうでも良い

品、むしろ嫌がらせの類としか思えないモノばかりが送られてくるという点だ。

ちなみに最初に届いたのは、あの糞忌々しい鎧野郎からだつた。さて、ここで問題だ。あいつは一体何を送りつけてきたと思う？ 正解は、100本の真っ赤なバラ。な？ 馬鹿だろ？ 気障野郎だろ？

次に届いたのが、人魚のしいから大量の魚。これはまあ、別に役に立たないものってわけじゃない。だが、問題はその量だ。とてもじゃねーがあたしとびーー、たつた一人じゃ腐りきる前に食べきる自信はないって程の量。

： だが、どうやらあいつもあいつなりに、再び人魚としての路を歩んでいつているんだってのが分かつただけでも、今回は良しとすべきなのかもしれない。

さらにお次が、例のびーー好きのクマからド、デカイ木彫りのクマ像。何なの？ カッコいい俺の姿を側に置いてくれってことなの？ ぶつちやけ邪魔で仕方がないし、正直不気味だ。

続いて、この間のゾンビキヨンシーコとフランから何故かモツ鍋セット……これ、あいつの臓物じゃないよな？ 違うよな？

それらに加えて先ほどのユニコーンのスク水。まあ、今のところそれが一番殺意が沸いた代物だったな。つーか、マジで何ゆえスク水？

あたしがそんな事を考えていたその時、ピピピピピピピピピピピピーーこの部屋に鳴り響いた。

「おつ。どれどれ、熱は下がったか？」

あたしは、びーーから体温計受け取り、そのデジタル表示を覗き込んだ。

「良かつた。大分下がつたみてーだな。これなら全快もすぐそこだぜ」

「本当ですか？ 良かつたあ。私、これ以上皆を心配かけるわけには行きませんもの」

「………… 良かつたね」

「ん？ 花子、また何か届いたのか？」

いつの間にか部屋へと現れた花子は、またまた誰かからのお届け物を抱えていた。

「………… これ、妖精達から」

「うづ、ピクシーの奴らからかよ。中身は……饅頭」

「………… 食べて良い？」

「いや、止めとけ。まず間違いなく激辛だぜ、コレ。あいつらも懲りねーな」

激辛と聞いて興味が失せたのか、花子は再び見張りへと戻つていった。

「えーっ？ これ、別に辛くないですよ？ だつて、普通に美味しいですよん」

「つて、もう食つてんのかよ！ まあ、お前なら『』へ普通に食えるんだろ？ けど良かつたじゃねーかびーこ」

「？ 何がですか、英子ちゃん」

「馬鹿は風邪を引かない何て言つだろ？ びーともやつぱり風邪なんてひくんだなーと思つてわ」

「もう！ それは幾らなんでも失礼ですよ！ 私だつて風邪くらいひきます、私はお馬鹿さんじゃありませんもん」

「………… 因みにあたしは、人生で一度も風邪つてやつをひいたことがない」

「え？ あー、私、急に眩暈が」

やれやれ、そんな迷信あたしは信じちゃいねーっての。そんな迷信。

迷信： だよな？

E
N
D

第三十四話 「眠れる鼠のタスマム」

第三十四話 「眠れる鼠のタスマム」

「はあ…… ハア……。 つ糞、 いきなりかよ」

ここは町外れの一角、 とある寂れた人気の無い廃屋。 忘れ去られた廃墟。

普段は治安の良いこの街にとつての、 唯一の例外。 未だ整備の届かぬグレーゾーン。 所謂、 この街のスネといったところだ。 完全完璧全知全能の人間が存在しないように、 この街もまた少なからず負の部分を抱えている。

だからこそ、 こんな人気の無い場所、 あたしだつたらまず近づかない。 近づこうとしない。

君子危つきに近寄らず。 びーー流に言つならそういうことだ。

だが、 今日のあたしはちょっとだけ事情が違つた。 いつも通り、 朝のびーーの送迎を終えたあたしは、 その足で別件の仕事に向かつた。

なに、 仕事自体は語るに足らないツマンネー内容だつた。 ツマンネー割に、 時間だけは食つていう実にメンドクセー仕事。 最悪だろ？

だが、 本当に最悪の事態つてやつはいつも最後に待ち受けてるもんだ。

一仕事終えた頃には、 帰りのびーーの送迎の時間が迫つていた。

こつものあたしなら、例えどれだけ急いでいたとしてもこんな判断はしなかつただろ。何しろツマラン仕事を押し付けられた後だ、この時あたしは多少気が立っていた。

この廃墟を突つつきれば時間的にかなりのショートカットが出来る。

やれやれ……急がば回れとは良く言つたもんぞ。

多少遠回りになつたとしても、こんな道、絶対に選ぶべきじやなかつた。

そんなあたしが、何者かに狙撃されたのは、一度廃路を半分進んだ時点のことだった。

「よりもよつて足を撃たれるなんてな」

あたしは、一旦廃屋の中に隠れ、自らに応急処置を施しながら毒づいていた。

「つたぐ。あたしは銃で狙撃される程、恨まれれるような真似してねーつての……いや、嘘。してるな。かなりしてる」

正直、思い当たる節がありすぎて誰から狙われてるのか分からねーつてのが、まず笑えない。

そして、もつと笑えないのが今のあたしの状況。

初弾で右足を狙われたのがまずかった。場所が場所だけに、何が起こつても可笑しくは無かつた。「一ラを飲んだらげっぷが出るくらい確実だつたのに、迂闊だつたとしか言いよづがねーぜ。

まあ、今更何を言つたところで後の祭り。今考えるべきことは、どうやってここから脱出するかだ。

……いや、違うな。

正しくは、どうやってあたしを狙撃した糞野郎を見つけてぶちのめすか、だ。

何にしてもこの足だ、逃げ切るなんて考えは捨てたほうがいい。今更遅いが、急がば回れってやつだ。元を断つ意外に方法は無い。それよりなにより、やられっぱななんてのはあたしの性に合わないからな。

幸い弾丸は貫通していた。応急処置を施したあたしの右足は、短時間なら何とか無理が利きそうだった。

「まずは… 奴の居場所を特定するのが先決か」

そう言つてあたしが、廃屋から姿を現した瞬間、次弾があたしの顔を掠める。

後一步、反応が遅れたらゲームオーバーだつただろう。

「おいおい、やつてくれるじゃねーか」

とは言つたものの、今のあたしには速攻で物陰に隠れる以外の選択肢はないわけで。

例えば、漫画やアニメなら刀で弾丸を真つ二つなんて芸当を平然としてのけるが、そんな真似が出来ればあたしだつてとっくにしてるし、あんなのは所詮ファイクションだけの世界さ。

何とも情けねーが、焦りは禁物。少しずつで良い、奴に近づいてぶちのめすことだけを考える。

ギリギリで3発目の弾丸をかわしたといふド、ようやく奴の居場所をつかむ事が出来た。

弾道からみて向かい側の廃ビルの屋上。

成る程、確かにあの場所なら、この忘れられた領域のどこにあたしが居ても狙撃可能だろつ。

そして、狙击の場所さえ分かつちまえばこつちのもんだ。

最も、奴がこのままおとなしく、あたしが来るのをぼけーっと待つているなんて事があるはずもねーんだがな。

あたしは件の廃ビルの屋上へと続く階段を駆け上がる。

そんなあたしに襲い掛かったのは、予想外の無数の弾丸だった。

「嘘だろー？　ここはビルの中だぞ？　曲がる弾丸？　追跡する弾丸だと!?　まさかアイツ…」

あたしは、滴る右足からの出血による血の道程を描きながら、屋上へと続く最後のドアを開けた。

日差しが眩しい、吹き抜ける風が心地いいぜ。だってそうだろ？ これからやつと奴と対面できるんだ。気分が悪いわけねーよな。

「よう。よーやく捕めたぜ、てめーのそのツラ。…あん？　なに驚いてんだよ」

「ど、どうやつて…」

「ああ？　どうやつて？　どうやつてだと？　ふん、そうだよな。お前は、悪魔と契約した魔弾の射手。その能力を使って放たれた弾は、例え相手がどこにいようと、ターゲットを追尾し、必ず命中するつて代物だ」

あたしは、目の前の顔面蒼白男に、一步また一步近づいていく。「きっとお前は、これまでにもこつやつて何人もの罪なき人間達を殺してきたんだろ？　自分の欲望のためだけに」

あたしは、赤き血に塗れた秋艶を一振りし、血潮を薙ぎ払う。

「安心しなよ。あたしは正義の味方なんかじゃない。その罪でめーを糾弾しようなんて気はさらさらない。それに、あたしは人間だけは裁けねーからな」

窮鼠猫を噛む。

あたしの目の前にいる哀れな男は、この期に及んであたしに向か

つて、魔弾を放つ。つたく、懲りねーやつだ。

あたしの心臓に向かつて一直線に飛んでくる魔弾。

あたしは、その弾を瞬時に…… 切つた。真つ一いつじ。

「どうだ？ 大分上手くなつただろ？ 最も、ここまでくるのに大分血を流す羽目にはなつたがな。ま、流石のあたしも弾丸をぶつた切るなんて芸当、まさか本当に実践する日が来るとは思つちやいなかつたわ」

そう。秋艶に付着したこの鮮血は、全てあたし自身の血によるもの。

最初あたしは、弾丸をぶつた切るなんてまね出来るわけがないなんて言つたが、ありや嘘だ。

確かに普通の弾丸を切るなんて芸当は出来ない。出来るはずがない。

だが、事、相手が魔弾なら話は別。

そう、逆に言えば、この芸当は相手が魔弾だからこそ通じる技。「あたしのこの秋艶はな、こう見えて元妖刀なんだ。だから、魔力や靈力の類には殊更敏感なのさ。てめーの弾丸があたしの心臓を捉えるように、あたしの秋艶もまた、てめーの魔弾そのものを捉えることが出来る。それでも、慣れるまで相当苦労したがな。ほら、この通り」

両腕、両足を始め、あたしの体にはいたるところに逸れた弾丸による傷跡が生々しく発生していた。幾ら秋艶が魔弾の魔力を捉え、通常ではあり得ない速度での反応が可能とは言え、そもそも刀で弾丸を切るなんて事そのものが、超A級難易度の技なんだ。

「どうだい？ てめーの疑問は解けたか？ 最初こそ、普通の弾丸であたしへの狩りを楽しんでいたつもりだるーが、あたしがてめーの場所を突き止め、このビルに入つた瞬間、てめーは通常の弾丸から魔弾へと切り替えた。よほど焦つたか業を煮やしたのかはしらね

一が、山ほど打ち込んでやがって

あたしは、そう言い終えるのと同時に、スナイパーの右手を銃ごと切り捨てた。それはもう、スマート。

「そうそう、忘れるところだった。この魔弾の厄介なところは、その本体は銃じやなくて弾自身、いや、契約者自身つてところだ」

懐から予備の六段式リボルバーを取り出したスナイパーの首元に、秋艶を突きつける。

「だからこそ、悪魔と契約しちまつたお前自身を切り刻まない限り、魔弾が尽きることはない……おっと、動くなよ？」

：さて、そろそろか。

あたしは、奴から数歩遠ざかり、ぽつりと呟く。

「お前、魔弾つて言葉の持つもう一つの意味を知ってるか？ 知らなきや教えてやるよ。意味は……都合良く存在してくれないもの、だぜ」

辺り一体に嫌な靈圧が漂う。空気がピリピリするっていう感覚。何度も感じても、到底スキにはなれねー感覚。間違いない、来やがつたぜ。アイツが。

音も無く、男の背後に出現したもの、それは……

「悪魔はな、強欲で狡猾でしたたかのさ。お前がその魔弾で殺した者達の命は、そのまま契約した悪魔の元へと逝く。だが、今回お前はあたしを殺すのに失敗しちまつた。いいか？ 悪魔はどこまでいつても悪魔なんだよ。つまり、一度失敗した人間に、わざわざ温情をかけるような悪魔はいないって話さ。そろそろ、あたしが何を言いたいのか分かるよな？」

悪魔。

言つまでもなく伝承クラスの相手。戯れに人間と契約し、その人間の運命を弄ぶ最低な伝承達。

「た、助けてくれ、た……たつた一度の失敗じゃないか。こ、これまでどれだけの魂をお前の元へ捧げたと思ってるんだ、お、お、俺は、まだ、まだ、この魔弾で人間達を」

無駄だ。悪魔に命乞いが利いたなんて話、どこの世界の逸話にも残っちゃいねーゼ。

「お、おいあんた。助けてくれ、あんたのその刀ならこいつも切れるんだろう？ なあ、おい」

やれやれ、これ以上聞いやられねーな。

「お前はな、その悪魔と契約しちまつた時点で詰んでたんだよ。とつこの昔にな。それに、残念ながらあたしには、お前を助ける義務も義務も、これっぽっちの正義感も持ち合わせちゃいねーのさ。じやーな、その悪魔と仲良くな

あたしは、そのまま一度と振り返る事無く、ビルの屋上を後にする。

男の口から鬼、悪魔などという罵詈雑言があたしに浴びせかけられ、その数刻後に、男の断末魔が辺り一体に響き渡ったのは言うまでもない。

あーらら、ご愁傷様。

因果応報。自業自得。

しかし、この期に及んでこのあたしに向かつて悪魔だなんて、なんて口の悪い野郎だ。……ま、あたしが言うのもなんだけど。

…… 今回の件、実のところ男を救う手段が本当に無かつた訳じゃない。

人喰いシリアルキラーや、人魚のしいの時同様、あたしの「紅の力」を使えば、恐らく奴の殺人思考や悪魔との契約そのものすら断

つ事が出来た筈だ。

だが、あえてそれをせず、奴が悪魔に喰われるより仕向けたあたしもまた、やはり奴の言つ通り「悪魔」「悪魔」なのかもしれない。

「……おつと、いけね。」(つや急がないとびーー)のお迎え、間に
合わねーぜ」

だが、さつとこれで良かつたのだらう。向こうにてもあたしは正義の味方なんかじゃなく、あくまで「びーー」の味方」なんだからな。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8403t/>

英子とびーこのあいどんのー!?

2011年11月20日02時09分発行